

○次大三昧耶

○闍伽常の

○花座常の

○振鈴常の

○次示三昧耶二手合

並べ

立つ 曇莫三滿多沒駄喃、阿三迷但里三迷、三摩曳、娑縛賀。

○次金剛薩埵内縛五股印

曇莫三滿多縛曰羅赦、縛戰擊、摩訶嚕濕擊、吽。

○次損金剛甲

二手虛心合、二風火の上に著け、二空相ひ並べて火の邊に著く、曇莫三滿多沒駄喃、唵縛曰羅迦縛遮吽。

○次怖魔毒風を申べ

曇莫三滿多沒駄喃、摩訶沫羅縛底捺著縛路、唵娑吠、摩賀味但里也、毘庚唵藥底、娑縛賀。

○次四大護

○無堪忍大護 合掌、二火を屈して掌に入れて相又へよ、曇莫三滿多沒駄喃、欠、麗嚕補哩尾矩哩尾矩隸、娑縛賀。

○無畏結護内縛、二火立て合す

曇莫三滿多沒駄喃、娑、娑縛賀。

○壞諸大護内縛二火劍形

曇莫參滿多沒駄喃、縛、娑縛賀。

○難降大護

定惠、風空相ひ取ること銷の如し餘輪立て散す。曇莫三滿多沒駄喃索、娑縛賀。

○次現供行者の

○塗香定、智の胸を取て施無畏に作せ 曇莫三滿多沒駄喃、尾輪駄健度納婆縛耶、娑縛

賀。

○花内縛、二風圓に合す

曇莫參滿多沒駄喃、摩賀味但里也、毘庚納藥帝、娑縛賀。

○燒香二羽、背け立て二風二空風に付く

曇莫三滿多沒駄喃、達磨駄但縛弩藥帝、娑縛賀。

○飲食鉢印

曇莫參滿多沒駄喃、阿羅羅迦羅羅、沫隣捺那頭、沫隣捺那、摩訶沫里、娑縛賀。

○燈明惠の手、劍印風火の背に著く

曇莫三滿多沒駄喃、但他藥多、囉旨娑回羅傳、縛婆娑曇、誑誑揉那里也、娑縛賀。

已上供養の作法金剛界の如し。

○次心略讚合掌

薩縛尾野比婆縛、誑誑誑哩野、素莫多地鉢帝爾曇、但賴駄都迦、摩訶攝佐、吠盧左曇曇、謨率都帝。

○次摩尼供養真言合掌

曇莫薩縛但他藥帝驪、尾濕縛目契弊薩縛他欠、鳴娜藥帝、娑

頗羅係幹、誑誑誑娜劔、娑縛賀。

○次三方偈

以我功德力 如來加持力 及以法界力 普供養而住

○次小祈願金剛合掌

普供養摩訶毗盧遮那佛

普供養兩部界會

諸尊聖聚 外金剛部

護法天等

所設供具

哀愍納受

護持佛子

滅罪生善

無邊善願

皆令滿足

乃至法界

平等利益

○次禮佛

南無摩訶毗盧遮那佛

南無寶幢佛

南無開敷花王佛

南無無量壽佛

南謨天鼓雷音佛

南謨普賢菩薩

南謨曼殊師利菩薩

南謨觀世音菩薩

南謨彌勒菩薩

南謨阿利也阿遮羅、曩駄尾地也囉惹三返

縛曰羅蘇婆尼

縛曰

羅軍荼利

縛曰羅焰曼德迦

縛縛羅藥叉

南無大悲胎藏界一切諸佛

南無

大悲胎藏界一切諸佛

南無金剛界一切諸佛菩薩摩訶薩

○次入佛三昧耶

○次法界生

○次轉法輪

已上三種印真言前の如し。

○次大惠刀

金剛合掌、二風屈して空の上に加ふ、曩莫三滿多沒駄喃、摩訶羯伽尾

羅惹、達磨珊捺羅奢迦、娑訶惹、薩得迦野、捺唎瑟耻砌諾迦、但他誑多、尾目乞底爾
佐多、尾羅誑達摩備惹多呼。

○次大法螺

合掌、風を空の上に絞へ、口に近けて之を吹く、左右に旋轉せよ、曩

莫三滿多沒駄喃、暗。

○次滿願

左の手、袈裟の二角を取り、右の手垂れて外に向ふ、曩莫三滿多沒駄喃、

縛羅娜縛曰羅但摩迦、娑縛賀。

○次佛眼

印真言常の如し。

○次正念誦

加持念誦作法 金剛界の如し真言に曰く、曩莫三滿多沒駄喃、阿。

○次定印に住して觀せよ、法界 定印「想へ自身の中に滿月輪あり、其の上に咒字あり、阿字
本不生不可得なるが故に心の自性本不生不可得なり、心の自性不生不可得なるが故に、
衆生の自性本不生不可得なり、衆生の自性本不生不可得なるが故に、諸佛の境界本不
生不可得なり、諸佛の境界、衆生の境界自性不可得なるが故に、佛界衆生界無二平等
なり、佛界衆生界無二平等なるが故に、自身即本尊、本尊即自身なり。

○次本尊加持 大日印真言外五股アヒツラムケンの印 阿尾羅咩欠。

○次毫相印真言右の拳等處に置く真言に曰く、阿含惹。

○次悲生眼印真言 右の手、火水を舒べて、地風を以て空の背を押して、左右の眼を加持す、真言に曰く、誦誦曩、縛羅落乞乃傳、迦嚧拏摩野、但他誦多、作乞芻、娑縛賀。

○次不動印真言印 曩莫三曼多、縛日羅赧含。

○次佛眼印明 ○次散念誦 ○次後供養 ○次後供印明常の如し ○次現供行者左方

○次讚略心 ○次普供養 ○次三方 ○次祈願 ○次禮佛 ○次廻向

方便 ○次廻向 ○次解界大三昧耶○火院○綱界 ○不動○四方結○地結

○次撥遣印真言 二手外縛、二中指立て合せて蓮葉の如くして、花を挿んで心に當て伽陀を誦す、亦た真言を誦して「本尊諸尊を本土に送り奉ると想へ」、花を上方に擲げ散すべし、伽陀に曰く、

現前諸如來 救世諸菩薩 不斷大乘教
到殊勝位者 唯願聖天衆 決定證知我

各當隨所安 後復垂哀赴

真言に曰く、唵鉢娜摩薩怛縛、穆。

○次三部 ○次被甲 ○次禮佛 ○次出堂。

○散念誦 佛眼、二十金大日百返本尊千返金薩百返般若百返不動慈教百返大金七返一字百返

以上(押紙)照して私に之を加ふ

御本に曰く

遍知院御本書を以て之を寫し畢る、但し此の本は帥入道資實成賢のために之を草せらる云云

國譯胎藏界念誦次第終

（二）本次第は前掲
載の十八道及び兩
部の法を委しけり
ば頭註は略せり。

〇〇國譯不動並護摩供私記

成賢御作
四度所用

〇〇國譯不動法息

房中より佛前に至る作法常の如し。

- 〇壇前普禮
 - 〇著座普禮
 - 〇塗香
 - 〇三密觀
 - 〇淨三業
 - 〇三部
 - 〇被
 - 甲護身
 - 〇加持香水
 - 〇加持供物
 - 〇覽字觀
 - 〇觀佛
 - 〇金剛起
 - 〇普
 - 禮
 - 〇表白
 - 〇神分
 - 〇祈願
 - 令法久住利益人天、護持弟子悉地圓滿の爲め
- 摩訶毗盧舍那寶號一打 觀自在菩薩名一打 金剛手菩薩名一打 外金剛部金剛天等を始め奉りて、三界所有の天王天衆、大日本國王城鎮守諸大明神、天照大神、八幡大菩薩等、六十餘州大小の神祇、殊に別は當所鎮守、清瀧權現、長尾天神部類眷屬、護持佛子當年屬屋、本命元辰、本名暉宿、北斗七星、諸宿曜等焰魔法王、太山府君、五道大臣司命司祿、冥官冥衆、當年行厄流行神等、乃至自界他方の權實二類、併しながら法樂莊嚴離業得道の爲に、一切神分に、

般若心經打 大般若經各打

國譯不動並護摩供私記

○祈願 三國傳燈諸大師等、淨佛國土成就衆生、普賢行願皆令滿足の爲に、摩訶毗盧舍那寶號一打 大聖不動明王一打 三代聖靈を始め奉りて、貴賤靈等、皆成佛道の爲めに 摩訶毗盧舍那寶號一打 大聖不動明王一打 聖朝安隱天下泰平の爲めに 摩訶毗盧舍那寶號一打 大聖不動明王一打 慈父悲母息災安穩增長福壽、二世大願成就滿足の爲めに、摩訶毗盧舍那寶號一打 大聖不動明王一打 伽藍安穩興隆佛法、院內安穩諸人快樂の爲めに、摩訶毗盧舍那寶號一打 大聖不動明王一打 一天四海安穩、泰平風雨順時五穀成就、萬民豊樂の爲めに、摩訶毗盧舍那寶號一打 大聖不動明王一打 仰ぎ乞くは、眞言教主大日如來、兩部界會諸尊聖衆、外金剛部金剛天等、殊に別ては、本尊界會不動明王、四大八大諸大眷屬、各々往昔の大悲本誓を還念し、此の瑜伽道場に降臨影向して、所設の供具を哀感納受し、無二の信心を知見照覽して、現世當世一一の願念を成就圓滿せしめんが爲めに、摩訶毗盧舍那寶號一打 大聖不動明王三返三打 金剛手菩薩名一打 兩部界會諸尊聖衆一打 外金剛部金剛天等一打 乃至法界平等利益の爲めに、摩訶毗盧舍那寶號一打 金剛手菩薩名一打 ○五悔金剛合掌 一切恭敬敬禮常住三寶 ○淨三業金剛合掌 ○普禮印 歸命十方一切佛等 ○發菩提心金剛合掌 唵冒地質多、母怛波二、娜弭引耶、 ○三耶昧戒同 唵三昧耶薩怛、

銀、○發願金一打して念珠を取る 至心發願 唯願大日 本尊界會

- 不動明王 四大八大 諸忿怒尊
- 兩部界會 諸尊聖衆 外金剛部
- 護法天等 畫空法界 一切三寶
- 還念本誓 降臨壇場 所設供具
- 哀感納受 護持佛子 息災延命
- 二世大願 決定成就 決定圓滿
- 及以法界 平等利益

○五大願 ○普供養 ○三方 ○大金剛輪 ○地結 ○四方結

○道場觀 「壇の上に吽字あり、變じて瑟瑟の座となる、座の上に憾字あり變じて利劍と成る、利劍變じて大聖不動明王と成る、身青黒色にして大忿怒の形なり、大盤石の上に半跏坐して、火生三昧に住したまへり、頂の上に七莎髻あり、左に一の辨髮を垂れ頼に水波の皴あり、右の手に智惠の利劍を執り、左の手に方便の絹索を持す、遍

身に火焰を出して、普ねく法界に周遍して、悉く自他の罪障及び諸の難降の類を焼き盡す、四大八大諸忿怒、無量の聖衆前後に圍繞せり、七處を加持す、左の膝、壇、右の膝、心、額、喉、頂 唵歩引欠。
 ○大虚空藏 唵譚譚囊、三波縛、縛曰羅合解。 ○小金剛輪 唵縛曰羅合斫訖羅、吽弱吽鑊斛。
 ○送車路 唵都嚕都嚕吽。 ○請車路 曩莫悉底哩耶、合地尾合迦南、但他引糞路南、引唵縛曰朗、二擬娘迦羅灑也、娑縛賀。 ○召請 曩莫三滿多、縛曰羅赦、哈、噫醯曳呬、娑縛賀。
 ○四明 弱吽鑊斛入
 ○拍掌 唵縛曰羅、合多羅都使也合解。 ○結界降三 唵蘇婆爾蘇婆爾、吽藥哩訶拏藥哩訶拏、吽藥哩訶拏、婆耶吽阿曩野斛、婆譚梵縛曰羅吽吽。 ○虚空網 唵尾娑普合羅、捺羅合乞灑、二縛曰羅、吽惹羅引吽發吒。 ○火院 唵阿三去莽擬事吽、引發吒。 ○大三摩耶 唵商迦隸摩訶三味焰、娑縛賀。 ○闕伽 曩莫三滿多沒馱南、譚譚囊、三摩三摩、娑縛賀。以本清淨水 洗浴無垢身 不捨本誓故 證誠我承事。 ○花座 曩莫三滿多沒馱南、阿。 ○振鈴 ○理供五供 ○事供右方、塗花燒飲燈
 ○讚不動 ○普供養 ○三方 ○祈願 普供養摩訶毗盧遮那佛 普供養 本尊界會 不動明王 四大八大 諸忿怒尊

兩部界會 諸尊聖衆 外金剛部 護法天等 所設供具
 哀感納受 護持佛子 消除不祥 增長福壽 無邊善願
 決定圓滿 天下法界 平等利益

○禮佛 南無摩訶毗盧舍那佛 南無阿閼佛 南無寶生佛 南無無量壽佛
 南無不空成就佛 南無四波羅蜜菩薩 南無十六大菩薩 南無八供養菩薩
 南無四攝智菩薩 南無阿里耶、阿遮羅、曩馱微地也、羅惹合 縛曰羅遜婆爾
 縛曰羅軍荼利 縛曰羅焰曼德迦 縛曰羅藥叉 南無金剛界一切諸佛菩薩摩訶薩
 南無大悲胎藏界一切諸佛菩薩摩訶薩

○入我我入法界定印 自身即ち本尊と成て、滿月輪の上に坐して、眷屬圍繞せり、我れと本尊と無二無別なり、本尊我が身に入り、我も亦た本尊の御身中に入る、即ち本尊の加被を被るに依て我が三業清淨なり、三業清淨なるが故に世出世の願皆な成就す。○本尊加持 根本印獨股印、内縛して二頭指を立て合せて 火界呪 曩莫薩縛他他譚帝毗藥、薩縛目契毗藥、薩縛他他羅吒、讚但摩訶路灑但、欠譚四譚四、薩縛尾觀南、吽但羅吒、憾給○劔印 慈救呪金界の如し ○正念誦慈救 ○本尊加持前の如し ○字輪觀 觀念せよ

國譯不動並護摩供私

貼を以て漱口を加
持す。

(一) 散杖を置く
散杖を置く。酒淨の
漱口の散杖を取り
次に九つ打ち入れ
く。

(二) 腕相ひ交
軌の外に左は内
は右の内は右は
高祖の御傳なり
道の如く神分は
小次第の如く神
行には十八道の
其他十八道の如
眼廿一返、台日
四大明王、當年
本命星を誦す。
入護摩此よ
り護摩に入るな
り。
(三) 觀想護摩に
ては此の觀摩に
にして之を本とな
す。
(四) 芥子 本説は
白芥子なるも菜種
も用ふ。

○次加持漱口香水 獨股杵を用 眞言に曰く、唵縛羅那縛曰羅曇。

○次散杖を取て灑淨香水に入れて、寶鏡二字の觀を作して、自身及び供物等に灑ぐ、
三度常の如し。

○次散杖を取て漱口香水に入れて爐の口に灑ぐ、三度、二字爐の口を洗ふ意なり。
○爐の口を加持す、三股杵を取て根里根里の呪
三返を誦して之を加持す。

○次補闕爐口加持の後、三股を置かすして壇上の
供物等之を加持す、大金剛輪眞言三七返。此れは供物の闕少を補する意なり。

○次羯磨加持 順逆各 其の印は、二手各々禪智を以て檀惠の甲を捻して、餘の三度開き
堅て、金剛杵の形の如くす、腕相ひ交へて右左を押せ、眞言に曰く、唵縛羅、
羯磨 此の時念珠を置く。 ○次 覽字觀等 以下行法常の如く散念誦に至る、但し大金剛輪、並に一字の
獨磨 此の時念珠を置く。 ○次 覽字觀等 眞言暫く之を誦せずして、護摩を作して之を誦するなり

○次 入護摩 ○先大日印明 智拳印羯磨の呪、(押に) ○次本尊印明 慈救呪 ○
次三平等觀 定印 「五 觀想せよ、如來の心は是れ實相なり。實相は是れ智火、爐は是れ
如來の身なり、火は是れ法身の智火なり、爐の口は即ち是れ如來の口なり、火は即ち
行者身中の智慧なるが故に、如來の身口と爐の口と、及び行者の身口と三平等なり。

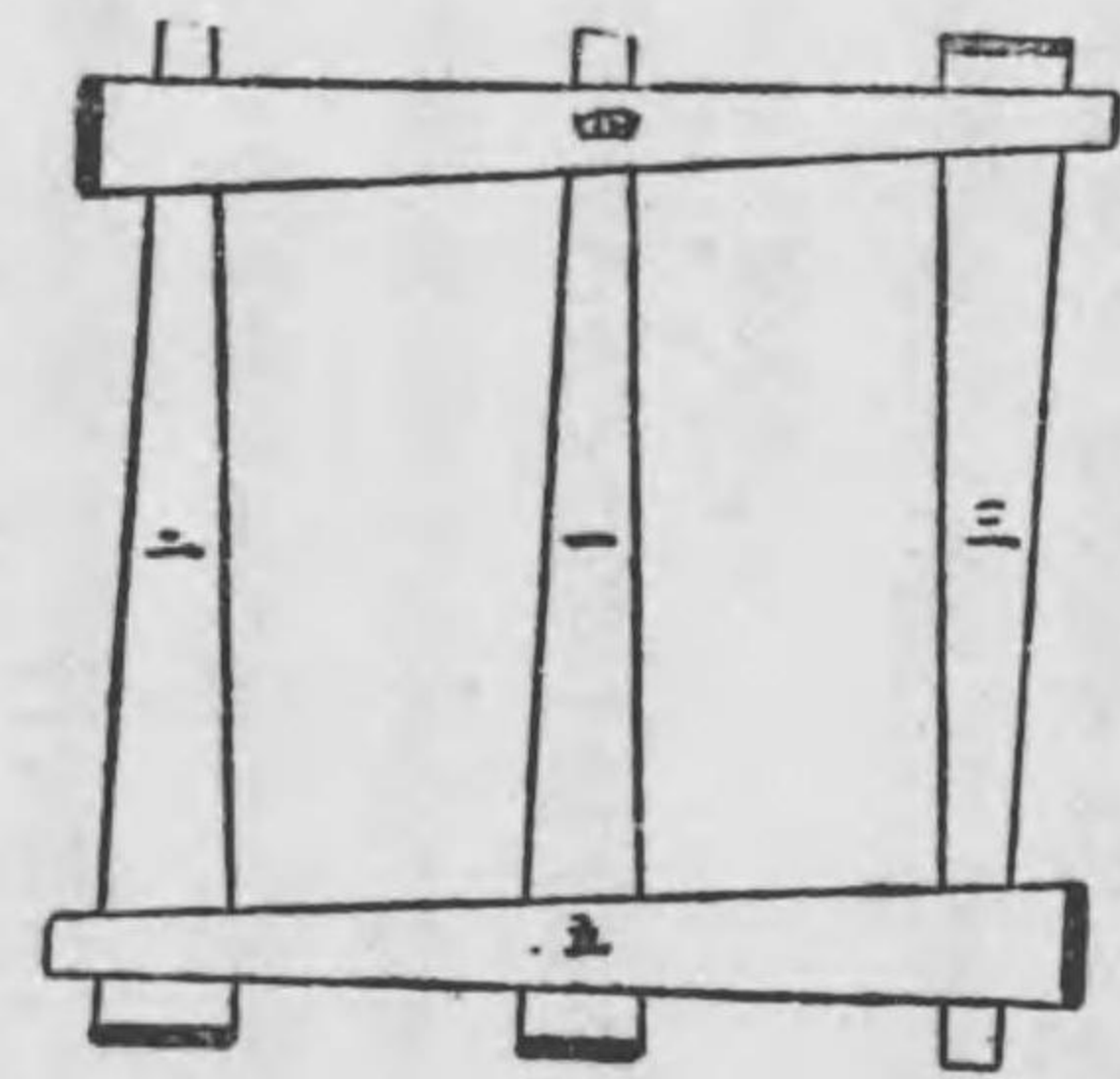
○次火舎を取て壇の左の角に置き、次に 芥子の器を取て火舎の跡に置いて、不動の印

(一) 投す 是れ辟
除の義なり 芥子
は是れ智慧の義な
るが故に。

(二) 誦す 誦す了
此の能く祈願す了
摩の呪さいふ。

(三) 丸香云云 願了りて左の脇切
の丸香を散りて
花器を重れ取りて
爐の左方に置く
鈴杵の左方に置く
機丸香等左の脇
置きの金剛盤等に
貼る如く鈴杵の
貼る如く置く。

言を以て 劍印慈救呪 二十一返 或は七返 加持し、次に右の手を以て芥子を取て四方四角上下に
之を投す、是れ十方なり、東北の角より之を始め方毎に一度なり、眞言は不動一字の明
なり、方毎に各々一返惣じて十度之を投するなり、次に器を本所に置く。
○次火天の印を結んで身の四處を印す、常の 其の印相は、左の手を以て右の腕を握
る、右の手指を屈して掌の中に置き、餘指直く之を舒べよ、眞言に曰く、終に息災の句
唵阿譏娜曳、扇底迦、娑縛訶。
○次に念誦を取て火天の小呪百返を誦す 上の如し



此の上に豎に左より次第に六支之を置く、本を行者
の方に向て並べ置く、合して十一支なり、此の薪を
以て三段之を行す、謂く火天段、部主段、本尊段な
り、若し薪盡き火滅せば、更に薪一兩を加ふべし

○次 丸香、散香、切花、次の如く之を取て爐の傍らに置き、次に 鈴杵を取て左机

國譯不動護摩私記

(一) 三指 護摩の時、
 持す、加持の時、
 三指を以て、
 乳木の薪の上に置
 け、次に三指を取
 て左の手に持す、
 次に右机の塗香並
 に加持す。乳木の
 薪の上に置け、次
 に二十一支の乳木
 を取て緒を解いて
 本を前の方に向け
 て金剛盤の上に置
 け、次に箸を取て
 檀木を挿んで次第
 の如く之を積む。
 次箸を以て肥松を
 挿んで右の燈明の
 火を著け、右の方
 より薪の下に之を
 入れよ。
 (二) 次扇を取て火
 を扇げ「想へ扇の
 上に憾字あり、變
 じて風輪となる」
 七返之眞言に曰く、
 唵、步、入、縛、羅、吽。
 (三) 次白濁淨薪の
 上に灑ぐ、(押)に
 曰く、枳里枳里、
 各一返。
 (四) 次三股を以て
 爐の薪を加持す、
 枳里枳里の呪を用
 ふ、三返。○次に
 彌陀の定印を結ん
 で「觀せよ、我が
 心月輪の上に覽字
 あり、變じて三角
 の火輪となる、我
 身體を舉げて火輪
 なり、此火輪變じ
 て白色火天の身と
 なる、四臂具足し
 て火焰身に遍す、
 是れ遍法界の大身
 なり。
 (五) 次火天を勸請
 す、先づ右の手を
 以て(七)一花を取
 て火天の小呪を誦
 して、爐の薪の上
 に置いて定印を結
 んで「觀せよ此の
 花爐中に至て荷葉
 座と成る、座の上
 に覽字あり、變じ
 て賢瓶となる、賢
 瓶變じて火天の身
 となる、白色にし
 て四臂具足せり、
 右の第一の手に
 は施無畏、第二の
 手には數珠、左第
 一の手に仙杖を執
 り、第二の手に軍
 持、火焰

の丸香等の跡に之を置け、次に(三)三股を取て左の手に持す、次に右机の塗香並に加持す、次に二十一支の乳木を取て緒を解いて本を前の方に向け、金剛盤の上に置け、次に箸を取て檀木を挿んで次第の如く之を積む。
 ○次箸を以て肥松を挿んで右の燈明の火を著け、右の方より薪の下に之を入れよ。
 ○(二)次扇を取て火を扇げ「想へ扇の上に憾字あり、變じて風輪となる」七返之眞言に曰く、唵、步、入、縛、羅、吽。
 ○(三)次白濁淨薪の上に灑ぐ、(押)に曰く、枳里枳里、各一返。
 ○(四)次三股を以て爐の薪を加持す、枳里枳里の呪を用ふ、三返。○次に彌陀の定印を結んで「觀せよ、我が心月輪の上に覽字あり、變じて三角の火輪となる、我身體を舉げて火輪なり、此火輪變じて白色火天の身となる、四臂具足して火焰身に遍す、是れ遍法界の大身なり。
 ○次火天を勸請す、先づ右の手を以て(七)一花を取て火天の小呪を誦して、爐の薪の上に置いて定印を結んで「觀せよ此の花爐中に至て荷葉座と成る、座の上に覽字あり、變じて賢瓶となる、賢瓶變じて火天の身となる、白色にして四臂具足せり、右の第一の手に施無畏、第二の手に數珠、左第一の手に仙杖を執り、第二の手に軍持、火焰

くるの薪の上に置
 け、次に三指を取
 て左の手に持す、
 次に右机の塗香並
 に加持す。乳木の
 薪の上に置け、次
 に二十一支の乳木
 を取て緒を解いて
 本を前の方に向け
 て金剛盤の上に置
 け、次に箸を取て
 檀木を挿んで次第
 の如く之を積む。
 次箸を以て肥松を
 挿んで右の燈明の
 火を著け、右の方
 より薪の下に之を
 入れよ。
 (二) 次扇を取て火
 を扇げ「想へ扇の
 上に憾字あり、變
 じて風輪となる」
 七返之眞言に曰く、
 唵、步、入、縛、羅、
 吽。
 (三) 次白濁淨薪の
 上に灑ぐ、(押)に
 曰く、枳里枳里、
 各一返。
 (四) 次三股を以て
 爐の薪を加持す、
 枳里枳里の呪を用
 ふ、三返。○次に
 彌陀の定印を結ん
 で「觀せよ、我が
 心月輪の上に覽字
 あり、變じて三角
 の火輪となる、我
 身體を舉げて火輪
 なり、此火輪變じ
 て白色火天の身と
 なる、四臂具足し
 て火焰身に遍す、
 是れ遍法界の大身
 なり。
 (五) 次火天を勸請
 す、先づ右の手を
 以て(七)一花を取
 て火天の小呪を誦
 して、爐の薪の上
 に置いて定印を結
 んで「觀せよ此の
 花爐中に至て荷葉
 座と成る、座の上
 に覽字あり、變じ
 て賢瓶となる、賢
 瓶變じて火天の身
 となる、白色にし
 て四臂具足せり、
 右の第一の手に
 は施無畏、第二の
 手には數珠、左第
 一の手に仙杖を執
 り、第二の手に軍
 持、火焰

身に遍せり。
 ○次火天の印を結び小呪を誦す、眞言の末に曳醜醜の句を加ふ、右の手の風指を以て之を召く、拳に安す。○次(三)四明の印を結んで眞言を誦す、弱吽餞斛、「想へ曼荼羅本位の火天を勸請して、爐中の火天に冥會せしむ。」
 ○次合掌啓白して曰く、唯願火天 降臨此座 哀愍納受 護摩妙供。
 ○次漱口(三)三度、火天の御口を洗ふなり。啓白に曰く、至心奉獻 漱口香水 唯願火天 納受護摩。
 摩 悉地圓滿。眞言に曰く、唵、縛、羅、那、縛、日、羅、曇。
 ○次(三)塗香三度啓白に曰く、我今奉獻 塗香妙供 唯願火天 納受護摩。悉地圓滿。
 「想へ火天の御口より入りて、心蓮華臺に至て微妙の供具となる、心より身に遍す、其の毛孔より種種の供養雲海を流出して、一切佛菩薩緣覺聲聞、及び一切世天に供養す、眞言に曰く、唵、阿、訶、訶、娜、曳、扇、底、迦、娑、婆、賀。
 ○次(三)蘇油大約三度 啓白に曰く、我今奉獻 蘇油妙供 唯願火天 納受護摩。悉地圓滿。
 國譯不動護摩私記

煙を表す小杓は大
口を表す、今小杓
を汲みて大杓に入
るは、大日の教示を
蒙りて金剛薩埵眞
言行法を修習する
ことを表す。
〇乳木 三妄執
を表し、飲は貪欲、
五穀は五純使惑、
切花は食慾、丸香
は瞋、散香は三細
煩惱なり。

- 〇次一乳木三 啓白に曰く、我今奉獻 護摩支木 唯願火天 納受護摩
- 悉地圓滿。
- 〇次飲食 小杓 啓白に曰く、我今奉獻 飲食妙供 唯願火天 納受護摩
- 悉地圓滿。
- 〇次五穀 小杓 啓白に曰く、我今奉獻 五穀妙供 唯願火天 納受護摩
- 悉地圓滿。
- 〇次切花 度三 啓白に曰く、我今奉獻 切花妙供 唯願火天 納受護摩 悉
- 地圓滿。
- 〇次丸香 丸三 啓白に曰く、我今奉獻 丸香妙供 唯願火天 納受護摩 悉
- 地圓滿。
- 〇次散香 度三 啓白に曰く、我今奉獻 散香妙供 唯願火天 納受護摩 悉
- 地圓滿。
- 〇次蘇油 大杓一度 啓白に曰く、我今奉獻 蘇油妙供 唯願火天 納受護摩
- 小杓一度 啓白に曰く、我今奉獻 蘇油妙供 唯願火天 納受護摩
- 悉地圓滿。 以上觀呪啓白塗香に準ず。

〇次普供養三方 常の 祈願 唯願火天 納受護摩 護持弟子 悉地成就。
 〇次二 漱口 三度前 〇次三 撥遣 先づ一花を取て小呪を誦して佛前に投げ、
 「想へ此の花本位に至て荷華座となる」、次に〇前の勸請の印を結んで、風指を外に向
 けて之を撥ふ、眞言に曰く、唵阿譚那曳、藥車藥車程、娑婆賀。
 「想へ火天を火中より本曼荼羅に還著せしむ、啓白に曰く、唯願火天 還著本座。
 △第二部主段 〇先漱口 三度 爐の口に灑ぐなり。
 〇次五 定印を結んで、「觀せよ心月輪の上に卍字あり、變じて五股杵と成る、杵變じて
 降三世尊と成る、八臂にして四面なり相好圓滿せり、二手は印を結べり、右の第二は
 鈴、第三は箭、第四は利劍、左の第二は三戟、第三は弓、第四は索なり、左の足に大自
 在天を躡み、右の足に彼の王の妃を躡む、「遍身に火光あり。」大印呪 〇大印呪 〇大印呪
 〇次部主を勸請す。 先づ一花を取て眞言を誦して爐の薪の上に置き、定印を結ん
 で「觀せよ此の花爐中に至て寶蓮花座となる、座の上に卍字あり、變じて五股杵とな
 る、杵變じて降三世尊となる、儀形前の如し。
 〇次大印を結んで大呪を誦し、末に曳醜噫咽の句を加へ、右の風指をもて三度之を召

(五) 定印 阿彌陀
(六) 常の如し 金剛界の如し。

(一) 塗香 火天段
の通り、但し唯願
部主と替ふるのみ
なり、眞言は小呪
以下皆同じ。

(二) 撥遣 大呪に
相の句を加へて
の末に「觀了りて
の句を加ふ、此の
句の時三度撥す、
此の始めより、
て置き撥す。

(一) 劍印 劍印を
鞘に刺し、七返に
にて、逆方五處に
剛界の通なり。
加へ、爐の句を
の末に相應の句を
るなり、次に觀
主の通り、唯願
尊の本尊の御口と
替るのみ、慈救の
句の呪の末に相應
供物之に、已下請

け、次に四明の印を結んで言を誦して「觀想せよ、曼荼羅本位の部主を勸請して、爐中の部主に冥會せしむ」啓白に曰く 唯願部主 降臨此座 哀愍納受 護摩妙供。

○次漱口 三度部主の口を洗ふなり。 啓白前の如し、明は大呪或は小呪なり。 ○次(一)塗香 三度

○次蘇油 大約三度 小約三度 ○次乳木 支三 ○次飲食 小約三度 ○次五穀 小約三度 ○次切花 三度

○次丸香 丸三 ○次散香 三度 ○次蘇油 大約三度 小約三度 ○次普供養 三方 常の如し ○次祈願

唯願部主 納受護摩 護持弟子 悉地圓滿。 ○次漱口 三度 ○次撥遣

先づ一花を取て眞言を誦して「想へ、此の花本位に至て寶蓮花座となる」佛前に

投げ勸請の印を以て之を撥す、末に藥車藥車の句を加ふ「想へ、部主爐中より本曼荼

羅に還著せしむ」、啓白に曰く、唯願部主 還著本座。

△第三本尊段 ○先(一)漱口 三度 爐の口を濯ぐなり。 ○次定印を結んで「觀せよ、心

月輪の上に憾字あり變じて智劍となる、劍變じて不動明王となる、火生三昧に住して

大忿怒形を現す、頂に七莎髻あり、左に一の辮髮を垂れたり、右の手に智惠の劍を握

り左の手に四攝の索を持す、身色青黒にして迦樓羅炎を遍せり、諸の忿怒の使者等前

後左右に圍繞せり。 ○次に(二)劍印を結んで慈救の呪を誦す。 ○次(三)本尊を勸

請す 先づ一花を取て眞言を誦して、爐の薪の上に置て定印を結んで「觀せよ、此

の花爐中に至て瑟瑟の座と成る、座の上に憾字あり變じて智劍と成る、劍變じて不動

尊となる、身青黒色にして大忿怒の形なり、大盤石の上に半跏坐して火生三昧に住し

たまふ、頂上に七莎髻あり額に水波の皴あり、右の手に利劍を執り、左の手に絹索を

持し、火焰を出して普ねく法界に遍して、普ねく自他の罪障及び諸の難降の類を焼き盡

す、無量の聖衆眷屬前後に圍繞せり。

○次大鈎召の印を結んで本尊の呪を誦せよ、本尊の呪の末に曳鹽曳咽の句を加へ、右

の風指を以て三度之を召け。

○次四明の印を結び眞言を誦して「觀念せよ、曼荼羅本位の本尊を勸請して、爐中の

本尊に冥會せしむ、啓白に曰く、唯願部主 降臨此座 哀愍納受 護摩妙供。

○次漱口 三度 御口を洗ふと想へ ○次(三)塗香 三度 ○次蘇油 大約三度 小約三度 ○次(四)

乳木 百八支之を 燒き盡す ○次飯 小約三度 ○次五穀 小約三度 ○次切花 三度 ○次丸香 丸三 ○次

散香 三度(朱書に曰く、 以上慈救呪を用ふ) ○次(五)混沌 先づ散香の器を取て切花の器に入れ、次に丸香を

切花は貧欲を表し
丸香は瞋散香は
愚痴の器に故に皆
食の器に入るに切
れ欲を本器に入ら
食欲の中に入らば
花の中に入らば
ば、又飯器は苦果
の依身をなれば此
煩悩に由る苦果の
依身を感ずる故に
なり、飯器は業道な
なれば、飯の器に入
つに苦の三道を入
す義なり、護摩を
す

(二)加持物 白胡
麻を用ふ。是を相
應物といふ。

取てまた切花の器に入れ、次に丸香の器を散香の器に重ね、次に切花の器を取て右方の
飯器に入れ、次に切花の器を丸香散香の器に重ね、次に扇を取て右の脇机を叩て承仕
を呼ぶ、之に應じて承仕來て、五穀を飯器に入れて混沌して二器に分つ、一器は諸尊
の料、一器は世天段の料なり。

○次蘇油 大約一度 ○次普供養印眞言

○次乳木 二十一支の内、六支を一度に取て蘇
油に指して、一度に爐中に之を投ぐ

○次藥種 藥種の器を取て火舎の跡に置て、獨股杵を以て加持すること二十一返
して、一字七返爐中に投ぐ、其の後本所に返し置け。啓白前に準ず。

○次(二)加持物 右の手を以て加持物の器を取て火舎の跡に置き、次に獨股を執て不

動一字の明を誦して二十一返加持す 左の手に三股、並に念珠本の如く之れあり 次に加持了て、右の手を以て加

持物を取て、前の一字の明を誦して爐中に投ぐ、左の手の念珠を以て數を取る 「觀想せよ、此加持物、

本尊の御口より入りて、心蓮華臺に至て無量の光明輪と成る、即ち一一の毛孔より光

明輪雲海を流出して、而も十方無邊諸佛の海會に供養す、其の光明輪還り來て普ねく

自他身心の三毒の罪障を照して、皆悉く一切の災難を摧破して速疾消滅す、此の如く

觀じて百八返之を供して器を本所に還し置け。

○次普供養印言、三力、祈願 例の如く祈願には念珠を擲るなり 唯願本尊 納受護摩 護持佛子 悉

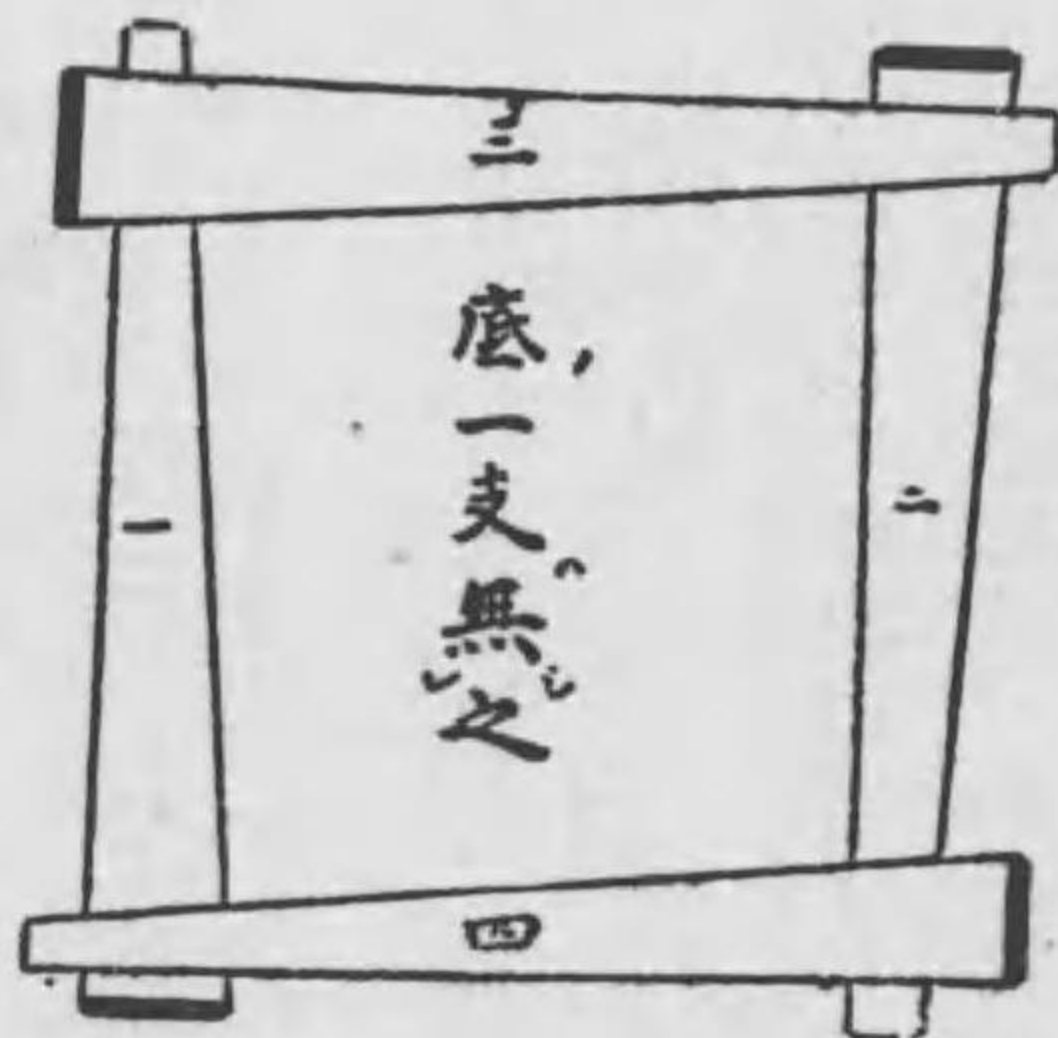
地圓滿。

○次漱口 度三 ○次撥遣 先づ一花を取て佛前に投げ、勸請の印を以て之を撥せよ

眞言は慈救呪の末に藥車藥車程の句を加ふ「想へ、本尊火中より本曼荼羅に還著せし

む、啓白に曰く、唯願本尊 還著本座。

(二)三十七尊は通相なり
十七尊は内證の智
是れ本尊に就きては
の故に又其
緒部類もあつて
抑利抄もあつて
茶利抄もあつて
炎利抄もあつて
増利抄もあつて
八供は四光七尊
は法供は八光七尊
攝降伏は四光七尊
軍茶利は四光七尊
夜王愛喜四
薩八供なりと



此の上以前の如く堅に六支之を積む、こゝ、火天段の
如し、前を合せて二十一支、此の薪を以て諸尊世天
の二段を行するなり。

△第四諸尊段(二)三十
○先灑淨 度三 ○次羯磨加持 如し ○次漱口 度三 ○次爐加

國譯不動護摩私記 二一七

持三股杵を用ふ、明

○次積薪 持三股杵を用ふ、明

○次火を扇ぐ度 眞言に曰く、唵歩入縛羅吽。

○次灑淨度 眞言に曰く、唵歩入縛羅吽。

○次定印を結んで「観せよ、我が身の九識轉じて五智と成る、謂はゆる第九菴摩羅識轉じて法界体性智と成る、第八識轉じて大圓鏡智と成る、第七識轉じて平等性智と成る、第六識轉じて妙觀察智となる、前五識轉じて成所作智と成る、此の五智に五部の諸尊一切聖衆を攝入す、また我身即諸尊なり、善く能く之を觀せよ、○印明口傳あり智拳印、唵縛曰羅駄都嚩、四處加持已達は口傳の印明をも結誦すべし。

○次諸尊を請勸す 先づ右の手に數花を取て、唵迦摩羅婆縛賀を誦して薪の上に置く、次に定印を結んで「観せよ、此の花爐中に至て無量の蓮華座と成る、五部の諸尊一切聖衆其の上に坐せり、身相微妙にして相好圓滿せり。」此の如く觀じ了て。次に大鈎召の印を結び右の風を以て之を召け、眞言の末に曳醯噎咽の句を加ふ。

○次四攝印明 常の「想へ曼荼羅本位の諸尊を勸請して、爐中の諸尊に冥會せしむ。」

○次四攝印明 常の「想へ曼荼羅本位の諸尊を勸請して、爐中の諸尊に冥會せしむ。」

啓白に曰く、唯願諸尊 降臨此座 哀愍納受 護摩妙供。

○次漱口度 諸尊の御口を洗ふなり、啓白等前に準す ○次塗香度 供物の呪は唵

○次蘇油度 蘇油小杓三度 諸尊の御口を洗ふなり、啓白等前に準す ○次乳木支 〇次混沌の一器を諸尊に供

し之を盡す、但し前の方の器なり、小杓を以て之を供す、

大日 杓唵縛曰羅駄都嚩。 阿闍 杓唵惡乞芻毗也吽。 寶生 杓唵囉怛曩三婆

縛怛洛。 無量壽 杓唵盧計濕縛羅囉惹訖里入 不空成就 杓唵阿目伽悉弟惡。

以上眞言の末に扇底迦の句を加ふべし。次殘三十二尊 惣じて三杓之を供す、但

○次金滅惡趣尊杓、眞言に曰く、曩莫三滿多母駄南、阿弊多羅尼、薩怛縛駄敦娑縛賀。

○次蘇油小杓一度 〇次普供養、三力、祈願唯願諸尊 納受護摩 護持弟子

悉地圓滿。 〇次撥遣 外五股の印右の風 先づ數花を取て、迦摩羅婆縛賀を誦して佛

前に投じて「觀せよ此の花諸尊の本位に至て各々花座と成る。」即ち前の大鈎召の印を

結んで、末に藥車藥車穆の句を加へて之を撥せよ「想へ諸尊皆悉く本位に還著す。」

啓白に曰く、唯願諸尊 還著本座

○次灑淨度 眞言に曰く、唵歩入縛羅吽。

○次定印を結んで「観せよ、我が身の九識轉じて五智と成る、謂はゆる第九菴摩羅識轉じて法界体性智と成る、第八識轉じて大圓鏡智と成る、第七識轉じて平等性智と成る、第六識轉じて妙觀察智となる、前五識轉じて成所作智と成る、此の五智に五部の諸尊一切聖衆を攝入す、また我身即諸尊なり、善く能く之を觀せよ、○印明口傳あり智拳印、唵縛曰羅駄都嚩、四處加持已達は口傳の印明をも結誦すべし。

○次諸尊を請勸す 先づ右の手に數花を取て、唵迦摩羅婆縛賀を誦して薪の上に置く、次に定印を結んで「観せよ、此の花爐中に至て無量の蓮華座と成る、五部の諸尊一切聖衆其の上に坐せり、身相微妙にして相好圓滿せり。」此の如く觀じ了て。次に大鈎召の印を結び右の風を以て之を召け、眞言の末に曳醯噎咽の句を加ふ。

○次四攝印明 常の「想へ曼荼羅本位の諸尊を勸請して、爐中の諸尊に冥會せしむ。」

啓白に曰く、唯願諸尊 降臨此座 哀愍納受 護摩妙供。

○次漱口度 諸尊の御口を洗ふなり、啓白等前に準す ○次塗香度 供物の呪は唵

○次蘇油度 蘇油小杓三度 諸尊の御口を洗ふなり、啓白等前に準す ○次乳木支 〇次混沌の一器を諸尊に供

し之を盡す、但し前の方の器なり、小杓を以て之を供す、

大日 杓唵縛曰羅駄都嚩。 阿闍 杓唵惡乞芻毗也吽。 寶生 杓唵囉怛曩三婆

縛怛洛。 無量壽 杓唵盧計濕縛羅囉惹訖里入 不空成就 杓唵阿目伽悉弟惡。

以上眞言の末に扇底迦の句を加ふべし。次殘三十二尊 惣じて三杓之を供す、但

○次金滅惡趣尊杓、眞言に曰く、曩莫三滿多母駄南、阿弊多羅尼、薩怛縛駄敦娑縛賀。

○次蘇油小杓一度 〇次普供養、三力、祈願唯願諸尊 納受護摩 護持弟子

悉地圓滿。 〇次撥遣 外五股の印右の風 先づ數花を取て、迦摩羅婆縛賀を誦して佛

前に投じて「觀せよ此の花諸尊の本位に至て各々花座と成る。」即ち前の大鈎召の印を

結んで、末に藥車藥車穆の句を加へて之を撥せよ「想へ諸尊皆悉く本位に還著す。」

啓白に曰く、唯願諸尊 還著本座

(一) 塗香 啓白觀
文眞言等前々通
願諸尊と改む、眞
言は唵縛曰羅駄都
嚩囉底迦娑婆賀な
り。
(二) 蘇油 啓白眞
言等前の如し、但
し蘇油妙供と替
ふ。
(三) 混沌 小杓を
取り前方の飯器の
混沌を爐中に入れ
供す、人中三杓眞
言の末に相應の句
を加ふ、下準す。
(四) 殘三十二尊
普供養明に相應の
句を加ふ、三返唱
へ三杓供す。
(五) 滅惡趣 相應
の句を加ふ、眞言
三返唱なり、眞言
滅惡趣に供するこ
と甚深の義なり、
是れ一切有情の滅
罪生喜の義を觀じ
供するなり、又今
次第三千佛に供す
一杓宛なり。

(一) 漱口、啓白、眞
言、通、唯、願、

(二) 四臂具足、成、時、
天、怒、拳、不、動、明、王、
は、四、臂、怒、拳、不、動、明、王、
此、の、三、即、地、に、入、る、故、
此、の、三、即、地、に、入、る、故、
此、の、三、即、地、に、入、る、故、
此、の、三、即、地、に、入、る、故、

(三) 塗香、啓白、眞
言、念、天、不、動、明、王、
唯、願、眞、言、不、動、明、王、
一、字、眞、言、不、動、明、王、
一、字、眞、言、不、動、明、王、
一、字、眞、言、不、動、明、王、
一、字、眞、言、不、動、明、王、

△第五世天段二十八宿

○次(一) 漱口三 爐の口を瀉ぐ、先づ數花を取て、不動一
字の心呪を誦して爐の薪の上に置て、次に定印を結んで「觀せよ、此の花爐中に至て
明王の花座、及び天等の荷葉座と成る、即ち花座の上に憾字あり、變じて不動明王と
成る、(二) 四臂具足せり、また荷葉座の上に各々呼字有り、變じて十二天、七曜二十八
宿となる。」

○次に大鈎召の印を結んで、眞言の末に勸請の句を加へて之を召け、言に曰く、曩莫
三曼多母馱南、阿、薩縛多羅鉢羅底賀誦但他譚黨、俱捨胃地左利也、婆哩步落迦、瞿
醯、瞿、娑縛賀(朱書)に曰く右の風

○次四明の印言前 曼荼羅本位の世天を勸請して、爐中の火天に冥會せしむ。
啓白に曰く、唯願世天 降臨此座 哀愍納受 護摩妙供。

○次漱口三 ○次(三) 塗香三 ○次蘇油小約三度 以上各々不動一字心の呪を誦す。
○次(四) 乳木先づ不動三支。歸命懺悔阿彌 〇次混沌供小約を以て 不動尊三約慈救呪一(朱書に)曰
準之 伊舍那天一歸命、伊舍那耶娑婆賀。 帝釋天一歸命、因捺羅耶娑婆賀。
火天三歸命、阿譚那曳娑婆賀。 焰魔天一歸命、焰摩耶娑婆賀。 羅刹天一歸命、地

(一) 廿八宿 此の
次に口傳にて行者
の本命星當年星
各一約供す唱へて
各一約供す唱へて
各一約供す唱へて
各一約供す唱へて

哩底曳娑婆賀。

水天 一歸命、縛囉拏耶娑婆賀。

毗沙門 一歸命、吠室羅縛拏耶娑婆賀。

地天 一歸命、畢哩體微曳娑婆賀。

一歸命、戰捺羅耶娑婆賀、

七曜 一歸命、藥羅醯濕縛哩野鉢羅跋多、而輸底羅摩

耶娑婆賀。 (二) 廿八宿 一歸命、諾乞灑恒羅涅會那爾曳娑婆賀。

以上眞言の末に各々扇底迦の句を加ふ。若し殘供あらば諸部の眷屬に之を供すべし、

但し光明眞言を誦せよ。 ○次蘇油小約一度 ○次普供養三力祈願。唯願世天

納受護摩 護持佛子 悉地圓滿 ○次漱口三 ○次撥遣 先づ右の手を以て

數花を取て不動の呪を誦して、歸命佛前に投じて觀念せよ前の、次に右の手拳にして彈

指すること三度、眞言に曰く、唵縛日羅穆乞及穆。 世天を火中より本曼荼羅に還

著せしむ、啓白に曰く、唯願明王 及與天等、還著本座 以上護摩供了る。

次に(三) 其器等各々本所に取り置き、次に鈴五股火舍等次の如く本所に取り置くべし。

○次大金剛輪返 ○次一字金輪返 ○次(三) 後供養 印明常の

○行法後夜の時には、廻向の前に磬一打、後夜の偈之を誦すべし、偈に曰く、

國譯不動護摩私記

(一)息災 已下護
 摩の用意を明す
 (二)長十二指の
 寸を取り、指の端の
 寸を指の故に十二
 指といふ。其頭圓な
 り、息災は圓調
 伏は三角増益は四
 角なり。甘木 息災に
 は甘木、調伏には
 毒木、増益は葉木、
 敬愛は花木、然れ
 ども松を用ゆ。
 (五)藥種 此の中
 一種を用ゆ。荷杞な
 り。
 (六)相應の句、息
 災には扇底迦、増
 益には阿毘遮迦、
 調伏は阿毘遮迦、
 羅摩を加ふ。
 (七)破壇作法 行
 者自ら動む。
 (八)觀想 彌陀定
 印にて吹き破る迄
 の觀を一返唱ふ。
 (九)法身の偈 唱
 剛合掌して一返唱
 へりて、了りて火箸
 へ三度突き破る意
 にす。

白衆等各念、此時清淨偈、諸法如影像、偈了て磬一打、例の如く廻向を誦せよ。寂照曰く(本次
 清淨無礙、取説不可得、皆從因業生、偈了て磬一打、例の如く廻向を誦せよ。寂照曰く(本次
 第には此に諸尊段三十七尊勸請の圖、及び世天段の十二天、七曜二十八宿の圖、並に
 護摩壇の圖を出せり、煩を避けて略す)。(一)息災部 北方に向て之を修す、諸事白色
 を用ふ。 ○乳木 (二)長十二指、其の頭を圓に作る、(三)圓に作る、(四)甘木 椎の木、榎の木、柏の木、穀の木、
 栗の木、桑の木、總じて無毒甘味
 なる木之 ○五藥種 甘草、遠志、荷杞 ○加持物 胡
 迦羅を加へよ、

○○破壇作法 結願の作法了て、禮盤を起たすして之を行す或は他人之行 先づ灑水を
 以て壇上並に爐口等に灑ぐこと三度「(一)觀想せよ、壇上に憾字あり變じて風輪と成る、
 其の風爐並に壇上を吹き破る」此の如く觀すべし。

○次に、法身の偈を誦す 諸法從緣生 是法從緣滅 如來說是因 偈を誦了て火箸を取て爐の縁
 を引き破る、但し本説は獨股を以て之を破る云云 今は師傳に依て箸を用ふ。以上

國譯不動護摩私記終

御本に曰く、
御本を以て之を書き畢る

憲 深

○神供略作法 東方を向て之を修す

○香水 一桶 香花を浮ぶ 杓を加ふ ○粥 一桶 五穀を用ふ 杓を加ふ ○香 小土器に盛る ○切花 小土器に盛る ○散米 小土器に盛る
 ○房花 小土器に盛る 以上の四種は折敷一枚に之を備ふ。 都合六種の供物は行者の右方に之を置く。

○先づ護身法 常の如し ○次香水加持 二十一返 三股の印、枳里枳里の呪 ○次香水を地に灑ぐ 三度杓を用ふ
 ○次覽字觀 火輪の印 ○次淨土變 如來の印 ○次數花を取て地に投ぐ ○次召請 大鈎の印

○次香花散米等各々三度之を供す、普供養の明を用ふ。 ○次弼を供す 杓を用ふ 各各の眞言を誦して一一に之を供す。

伊舍那天 杓 帝釋天 杓 火天 杓 焰魔天 杓 羅刹天 杓 水天 杓 風天 杓
 毗沙門天 杓 梵天 杓 地天 杓 日天 杓 月天 杓

若し殘粥あれば光明眞言を以て、丑寅の角に之を灑ぎ以て眷屬に供す。

○次法施 心經等任意 ○次撥遣 右の手彈指三度 唵縛曰羅步乞及穆
 以上護摩並に神供作法大略此の如し、觀念及び口決等善く能く之を問ふべし。

御本に曰く

御本を以て之を書き畢る

憲 深

國譯薄雙紙

普通諸尊法

- 普通諸尊法第一 ○藥師、○阿彌陀、○釋迦、○光言、○佛眼、以上諸佛。○金輪、○尊勝、以上佛頂。
- 法花帖、○理趣經付十七段、○寶樓閣、○六字經、○雨寶陀羅尼、○寶篋印經、○心經、○菩提場經、○無垢淨光、○呪賊經、○壽命經、○童子經、以上經法。
- 六觀音、○不空絹索、以上諸觀音。
- 八字文殊、○五字文殊、○通用文殊、以上諸文殊。
- 五秘密、○虛空藏、○普賢、○普賢延命、○延命、○地藏、○彌勒、○勢至、○隨求已上諸菩薩、已上三十七尊。

薄雙紙普通諸尊法

- 阿彌陀法 房中より佛前に至る作法常の如し、
- 壇前普禮 ○著座普禮 ○塗香 ○三密 ○淨三業 ○三部 ○被甲 ○加持香水 ○加持供物

國譯薄雙紙

薄雙紙は通智院成
 賢の御作と諸尊法
 重さあり後者二重と
 傳授するに古師を
 儀軌に實るに大古師を
 其の後に折て授けしは
 觀印の種子三形を寫し
 て印明せしむるを成賢
 始て下記し尊引に
 膜下にて一尊を引に
 放て授けし尊引に
 の紙の厚きを由て
 薄さはいふその由
 通さる多分未達は
 末達にも授けざる
 なり。

(一)壇前以下凡
 目十八道及び金剛
 界胎藏界次第に
 なるが故に説かざる
 なり。

(二)加持供物行
 するに小三古の呪
 用さるに里々々の呪

(一) 大日 大日と
計りある時は金剛
界大日なり。コ
本尊の呪をいふ。
御加持 日中
諸君は將軍の御
座の間へ行き阿闍
梨玉體を加持す
之を御加持とい
ふ。

(二) 迦樓羅座 四
佛所座の中にし
毘盧遮那は獅子座
阿闍梨は象、寶生は
馬、阿彌陀は孔雀、
釋迦は迦樓羅座な
此鳥は毎日大龍一
頭小龍三頭を食す
一切衆生の根本無
明の大龍一頭三毒
の小龙を食するを
表す。
鉢形 鉢は應
量器といふ。食を
分器に應じ受くる
が如く衆生の機根
に應じて度する心

(三) 説明の印 根
本智祥の印なり。

(四) 根本印 空火
相捻するは報身の
釋迦、風空相捻す
るは法身の釋迦
也。
袈裟の角 法
界定印を二手重れ
たる間より袈裟の
角を出す。

野。但姪他。唵毗舍施毗舍閣。娑摩揭帝。娑縛訶、或說小呪を用ひ印唵俱毗羅。娑縛訶
○正念誦心呪を用ひ、曰く 唵轉殺社の呪なり。 ○本尊加持前 ○字輪觀五 ○本尊加持先(一)大日、次 ○散念
誦佛眼、大日、本尊、日光、月 ○後供養事供 ○闍伽 ○後鈴 ○讚 ○普供養 ○三力 ○祈願 ○禮
佛 ○廻向 ○至心廻向 ○撥遣 ○三部 ○被甲 ○禮佛 ○出堂 護摩増益或 ○部主延命
大日、或 ○本尊段 ○諸尊三十七尊、日光、月光之 ○世天常の如く十二神 ○伴僧並びに 御加持
根本呪、天蓋には
十二神將の呪、

○釋迦法 房中より佛前に至る作法常の如し
○壇前普禮 ○著座普禮 ○塗香 ○三密 ○淨三業 ○三部 ○被甲 ○加持香水 ○加持供物 ○覽
字觀 ○觀佛 ○金剛起 ○普禮 ○表白 ○神分 ○祈願 ○五悔 ○發菩提 ○三昧耶。
○觀請 大恩教主釋迦尊、羯磨部中諸眷屬。 ○發願 本尊界會 李尼薄伽 ○五大願 ○普供
養 ○三力 ○大金剛輪 ○地結 ○四方結 ○道場觀 壇の上に欠字有り(一)迦樓羅座となる、座
の上に紇哩字有り蓮花臺と成る、臺の上に不字有り變じて鉢形と成る、變じて釋迦
如來と成る、身黃金色にして三十二の大人の相を具し、八十隨好を備へ玉へり、心

の上に(一)説法の印を作つて赤色の袈裟を著して蓮花臺に坐せり、無量の菩薩聲聞恭敬
圍繞せり。

○大虚空藏 ○小金剛輪 ○送車格 ○請車格 ○召請大鈎 ○四明 ○拍掌 ○結界動 ○虚空網 ○
火院 ○大三昧耶 ○闍伽 ○花座 ○振鈴 ○理供 ○事供 ○讚四智 縛曰羅羯磨。蘇縛曰羅紇
攘。羯磨縛曰羅。蘇薩縛誦。縛曰羅誦伽。摩呼娜哩耶。縛曰羅尾濕縛。曩謨率都帝
○普供養 ○三力 ○祈願 ○禮佛 曩謨殺迦胃地。薩但多誦多。返
○入我我入 ○本尊加持 ○根本印智吉祥の印と名く 定惠各々五輪を舒べて空火相ひ捻して左を
心の前に仰げ右を左の上に覆せて相著くこと勿れ、曩莫三曼多沒駄南。婆薩縛吃哩捨
囉素娜曩。薩縛達麼。縛始多。鉢羅鉢多誦誦曩。三麼三麼。娑縛訶 ○又印鉢の印なり
胎藏の如し、曩謨三曼多。沒駄南。婆 ○又印金剛界三昧耶會、 二手外縛して二中指を
屈して掌に入れ面を合せ二小二大共に立て合せよ、唵阿謨伽悉帝惡羯磨の ○正念誦大
なり、或 ○本尊加持前の ○字輪觀五 ○本尊加持先(一)大日、次(二)本尊、次佛眼、 ○散念誦佛眼、大日、本尊、普 ○後
供養理供 ○闍伽 ○後鈴 ○讚 ○普供養 ○三力 ○祈願 ○禮佛 ○廻向 ○至心廻向 ○解界 ○撥
遣 ○三部 ○被甲 ○禮佛 ○出堂 ○護摩災 ○部主金輪或は ○本尊段 ○諸尊段三十

光明真言法

(一)胎藏 本尊に
 就き秘説多々ある
 も今胎藏は因
 さ茶羅にして十界
 曼荼羅の故に平普
 輪圓の故に本尊と
 偏を尊んで本尊と
 なる。又胎藏は百
 光遍照の功徳廣大
 殊勝の故に以て本
 尊となす。修行の
 時は兩界を掛く本
 尊を秘するなり。
 (二)三昧耶形塔
 今胎大日の故に
 五輪塔なり。五指
 より五色の光明を
 放つて觀する。小
 より次第して大指
 に至る。黄、白、赤
 と黒の光を放つ
 と思ふ。此の五色
 は五大の光明なり。
 爾るに五輪即ち五
 智の光明なり。不

○本尊 (一)胎藏大日口傳、(二)兩界に懸く ○種子形 ○(三)三昧耶形、塔○道場觀 心の上に阿字有り變じて光明心殿と成る、其の中に紇哩字有り大蓮花王と成る、臺の上に阿字有り變じて月輪と成る、上に紇哩字有り變じて八葉の蓮花と成る、上に莛字有り此の字五色の色を具す五色の光明を放つ、字變じて五輪塔と成る、五輪より各光を放つ、即ち五色の光明なり、塔變じて大日如來と成る、法界定印に住して五智の寶冠を戴き、結跏趺坐して正受に住し玉へり、身より五色の光明を放つて遍く法界の衆生を照し玉ふ、上有頂より下無間に至るまで、此の光明に遇ふ者皆な離苦得樂す、四智四行の無量の佛菩薩聖衆、前後に圍繞せり。
 ○印真言 外五股印 真言五字の明訶尾羅吽欠 ○五色光印 左の手、金剛拳に作して腰に按ず、右の手開き舒べ五指外に向ふ口傳有り○真言に曰く 唵阿謨伽尾盧左曩摩訶母捺羅 摩泥 鉢納摩 入縛羅 鉢羅鞞利多耶 吽。
 ○正念誦光明 ○散念誦佛眼、大日、光言、阿彌 ○伴僧、御加持常には之 ○勸請 ○發願 ○禮佛皆金剛界 ○護摩息 ○部主陀 ○本尊段加持物の呪、曼莫 ○諸尊三曼多、漫跋南、阿 ○諸尊七尊

(一)佛眼 佛母菩薩といふ、又は佛眼明王といふ、此の眼法は息災法に之を行するなり。

(二)三層八葉蓮花 重に花咲く蓮花なり、佛眼は蓮花の中心に蓮花の形なり、佛の頭を置くなり。
 (三)白月云云 金剛薩埵の形なり。
 (四)二手云云 法界定印なり。
 (五)著摩他 定相に住するなり。

○佛眼法 房中より佛前に至る作法常の如し。

○壇前普禮 ○著座普禮 ○塗香 ○三密 ○淨三業 ○三部 ○被甲 ○加持香水 ○加持供物 ○覽字觀 ○觀佛 ○金剛起 ○普禮 ○表白 ○神分 ○祈願 ○五悔 ○發菩提 ○三昧耶 ○勸請 佛眼佛母大覺尊 (三)三層八葉諸眷屬。 ○發願 本尊界會 佛眼佛母 三層八葉 諸大眷屬 ○五大願 ○普供養 ○三力 ○大金剛輪 ○地結 ○四方結 ○道場觀 「觀想せよ、壇の上に阿字有り寶樓閣と成る、内に曼荼羅有り、上に紇哩字有り、變じて三層八葉の蓮花と成る、中臺に蓮字有り、佛頂眼と成る、變じて佛眼尊と成る、身色、白月の暉の如くして二目微笑せり、(五)二手臍に柱め、奢摩他に入るが如し、一切の支分より十恒河沙俱胝の佛を出生す、前の一の蓮葉の上に一切佛頂輪王あり、手に八輻の金剛寶輪を持せり、次の右に旋て七曜使者を布す、次に第二の花院に、頂輪王の前に當て、金剛薩埵、文殊、虚空藏、轉法輪、觀世音、虚空庫、金剛拳、摧一切魔等、の八大菩薩、右に旋て安せり、各々本標示を執る、第三の花院に前の葉より右に旋て、步擲、降三世、六足、大咲、大輪、馬頭、無能勝、不動等の八大明王等を安せり、花院の隅に内の四供養あり、外院の四方四隅に四攝四供等皆

(一)師子冠 息災
の表示なり。

(二)讚 金剛薩埵
の讚なり。
(三)一字金輪 此
の尊は一字金輪の
字一字を以て眞言
とす。故に一字金
輪といふ。世間の
金輪王は餘の輪に
に勝れて威徳無比
なり。今世尊に於
ても亦今の尊無比
無過上の故に金輪
悉地速疾の法に望
天變災増益の所を
意息災増益の所を
深秘此法に於る佛
の望

な(一)師子冠を戴けり、是の如く分明に之を觀せよ。」

○大虚空藏○小金剛輪○送車輅○請車輅○召請大鈎 ○四明○拍掌○結界不 ○虚空網 ○
火院○大三昧耶○闍伽○花座○振鈴○理供○事供○讚四智。金剛薩埵 ○普供養○三力○祈願○
禮佛 曩謨阿利耶勃駄嚩者囉返三 ○入我我入○本尊加持根本印言 ○正念誦同 ○本尊加持の
如○字輪觀大 ○本尊加持、先大日、次に本尊前の根本印 次に金輪二手内縛して二中指を立て合せ、
大指を並べ立て、二頭指を風して、端を合せて二大指の上に置き、○眞言に曰く 曩謨三曼多沒駄喃、部嚩唵 ○次に七曜惣印
言二手虚心合掌して二大指を並べ立てよ 曩莫三曼多沒駄喃、誑羅計入縛利也、鉢羅鉢多儒底羅摩野、娑縛
訶。○次に八大菩薩惣印言合掌 曩莫三曼多沒駄喃、吽闍伽洛吽唵哩、唵惡郝、娑縛
訶。○次に八大明王惣印言合掌 曩莫三曼多沒駄喃、唐吽唵哩吽吽吽吽、娑縛訶。○
散念誦大日 本尊、金輪、七曜惣呪、八大菩薩 ○闍伽○後鈴○讚○普供養○三
力○祈願○禮佛○廻向○至心廻向○解界○撥遣○禮佛○出堂○護摩息 ○部主金 ○諸尊
七曜、大菩薩、八大明王或は三十七尊

○(一)一字金輪法 道場を建立し本尊を安置す。房中より佛前に至る作法常の如し。

○壇前普禮○著座普禮○塗香○三密○淨三業○三部○被甲○加持香水○加持供物○覽
字觀○觀佛○金剛起○普禮○表白○神分○祈願○五悔○發菩提○三昧耶。

○勸請 一字金輪轉輪王、八大佛頂諸轉輪 ○發願 一字金輪 八大佛頂、諸眷屬等。

○五大願○普供養○三力○大金剛輪○地結○四方結○道場觀 壇の上に香水海有り、
海の中に妙高山有り、山の上に大曼荼羅有り、其の中央に(一)七つ獅子の座有り、其の上
に白色八葉の大蓮花王有り、中臺に熾盛の日輪有り、輪の中に悉字有り變じて(二)十二
輻の金輪と爲る、輪變じて大日如來一字頂輪王と成る、金剛の寶冠を戴き形服素月の如
くにして(三)輪鬘を首飾として、種々の衆寶をもて法身を莊嚴す、智拳の大印を持す、形相
界大日一の葉に右に旋て輪王の七寶ありて、輪、象、馬、珠、女、圍繞せり。「前の葉に佛眼尊
を安す。」

○大虚空藏○小金剛輪○送車輅○請車輅○召請○四明○拍掌○結界不 ○虚空網 ○火

院○大三昧耶○闍伽○花座○振鈴○理供○事供○讚○普供養○三力○祈願○禮佛 南

無沒駄嚩瑟吒灑。者羯羅返三 或は 曩謨醫伽乞叉羅 ○入我我入 ○五本尊加持智拳 娜

莫、三曼多勃駄喃、步嚩唵 ○次に勝身三昧耶 二手金剛合掌して、二中指圓かに立て

(一)七獅子 七覺
支を表す。
(二)十二輪云云
三摩耶形の時ハ
三摩耶形の時ハ
十二因縁を摧破す
は十二輪の輪ハ
十二因縁を摧破す
義なり。
(三)輪鬘 諸佛ハ
花鬘なるも此の尊
ハ輪鬘を掛けたま
ふ。
(四)召請 大鈎召
なり。
(五)本尊加持
處加持明四返。四

(二) 辨事云云此
の印は第三の本
加持のみ用ひ此
の辨事佛頂は金
第一の内眷屬な
用は特に此の印
ゆるるなり。

(三) 尊勝此の法
は本尊の法を
も金剛界の大
法は増益の法
除病減罪災等
修す又は延壽
に修す。

蓮の如くす、二頭指を屈して二中指の背の上節に属く加持四處 唵歩欠

○次に根本の印 二手内縛して二中指を立て合せ上節を屈して鈎(異)鈎を形に作るの如くす、二大指を並べ立て二頭指を屈して端を合せて二大指の上に置く、歸命。勃嚕唵。吽

○正念誦勃嚕唵 ○本尊加持前の三種 ○字輪觀五 ○本尊加持前の三種 ○次に(二) 辨事佛頂印言 二手内縛、二中指を立て合せ、上の節を屈して鈎形の如くす四處を加持す 娜莫。三曼多勃嚕南。唵吒嚕唵。滿馱。娑縛訶○佛眼印明○散念誦佛頂、不動、大金、大日胎、

○後供養理供事 ○闍伽○後鈴○讚○普供養○三力○祈願○禮佛○廻向○至心廻向○解界 ○撥遣○三部 ○被甲○禮佛○出堂 ○護摩災 ○部主佛眼 ○本尊。自加持、召請、撥遣。諸供物。加持物。○諸尊三十 ○本尊讚滿寧寧定シニ反引 薩縛惹反 薩縛惹反 地帝引史 尼ニ 延結シヤサビ 拾シヤサビ 尾ニ 步シヤサビ 羅シヤサビ 步シヤサビ 合シヤサビ 縛シヤサビ 鼻シヤサビ 舌シヤサビ 迦シヤサビ 滿シヤサビ 引シヤサビ 馱シヤサビ 吠シヤサビ 吠シヤサビ 三シヤサビ 去シヤサビ 摩シヤサビ 鼻シヤサビ 多シヤサビ 二シヤサビ 尾シヤサビ 爾シヤサビ 也シヤサビ 二シヤサビ 地シヤサビ 跛シヤサビ 作シヤサビ 紇シヤサビ 羅シヤサビ 二シヤサビ 鼻シヤサビ 里シヤサビ 寧シヤサビ。曩シヤサビ 謨シヤサビ 娑シヤサビ 都シヤサビ 合シヤサビ 帝シヤサビ 恒シヤサビ 羅シヤサビ 引シヤサビ 恒シヤサビ 哩シヤサビ 作シヤサビ 紇シヤサビ 羅シヤサビ 二シヤサビ 鼻シヤサビ 合シヤサビ 鞞シヤサビ 舌シヤサビ 底シヤサビ 以シヤサビ 反シヤサビ 寧シヤサビ 四シヤサビ

○尊勝法

房中より佛前に至る作法常の如し

(一) 三股云云極
樂には金繩を以て
界道は三股を以て
茶羅には三股を以て
て界道の兩方に置
きて界道となす。
(二) 分齊 隔をな
す。
(三) 法界都婆 五
輪塔婆 八師子 八正
道を表す。
(四) 最勝佛頂 釋
迦なり。
(五) 放光佛頂 光
聚佛頂ともいふ。
(六) 三角 火輪の
形にして菩提心の
體を表す。
(七) 六個の飛天
五淨居天に善住天
子を加ふ。

○壇前普禮○著座普禮○塗香○三密○淨三業○加持香水○加持供物枳里 ○覽字觀○觀佛○金剛起○普禮○表白○神分○五悔○發菩提○三昧耶○發願本尊聖者尊勝佛頂、八大佛頂諸大轉輪、 ○五大願○普供養○三力○大金剛輪○地結○四方結○道場觀「觀想せよ、五大所成の法界宮の中に大圓明の月輪あり、(一)三股を以て界道と爲し寶瓶を以て(二)分齊と爲す、其の中央大蓮華臺の上に鑲字有り、(三)法界率都婆と成る、率都婆變じて大日如來と成る、五智の寶冠を戴き瓔珞を以て身を嚴れり、法界定印に住して(四)八師子の床ユカに結跏趺坐し玉へり、左の圓明の中に覽字有り白傘蓋佛頂と成る、右の圓明の中に悉字有り(五)最勝佛頂と成る、中の圓明の前に忽鉢字有り變じて鈎と成る蓮華上鈎變じて尊勝佛頂と成る、中の後の圓明の中に怛嚩鉢字有り(六)放光佛頂と成る、尊勝の左圓明の中に單字有り勝佛頂と成る、尊勝の右の圓明の中に吒嚩鉢字有り廣生佛頂と成る、光聚の右圓明の中に吽字有り無邊聲佛頂と成る、光聚の左圓明の中に室嚩鉢字あり發生佛頂と成る、下の左邊の半月の中に吽字有り降三世と成る、右邊の(七)三角の中に憾字有り不動尊と成る、前に香爐有り、像の上に寶蓋有り、兩邊に(八)六個の飛天有り、各々花を執る」七處加持常の如し ○大虛空藏 ○小金剛輪 ○送車輅 ○諸車輅 ○召請大鈎 ○四明 ○拍掌 ○結界

印を指して大寶瓶の
水を注ぎて衆生の
願望を満す。觀智
可きなり。胎藏の
は今の胎藏といふ。
塔の印と云ふ。勝
指の内縛して右の頭
手は立相の頭
は鉤なり。此の鉤
大悲は方便の鉤
生死の味を生ず
生じて離れ得ず
牽て出離の岸に
榮大樂の彼岸に
らしむる意なり。
は普通の法なれど
も別して甚深の法
なれば未入壇の法
此の儀軌は許さず。
文の儀軌に依りて
智の儀軌に依りて

三曼茶羅に付く。

高妙の寶塔
多寶塔なり。
曼茶羅の故に東
向て之を修す。
は多寶北は釋迦
金剛界の大日
寶胎藏の大日

- 世三 〇虚空網 〇火院 〇大三昧耶 〇闍伽 〇花座 〇振鈴 〇理供 〇事供 〇讚四 〇普供養等
- 〇禮佛 之を用ひ 南無、但隸嚕迦、烏瑟尼沙、薩但他莫多反三 南無、悉多他半但羅、烏瑟尼沙、薩但他莫多 南無、尾惹野、烏瑟尼沙、薩但他莫多 南無、帝儒羅施、烏瑟尼沙、薩但他莫多 南無、尾枳羅拏半祖、烏瑟尼沙、薩但他莫多 南無、吒嚕呼、烏瑟尼沙、薩但他莫多 南無、輪嚕呼、烏瑟尼沙、薩但他莫多、南無、吽惹惹、烏瑟尼沙、薩但他莫多 南無、金剛界一切諸佛菩薩摩訶薩 南無、大悲胎藏界一切諸佛菩薩摩訶薩 〇入我我入 〇本尊加持、二手虛心合掌して、二頭指二大指 〇彈指の如くせよ、眞言は尊勝陀羅尼なり。 〇又印 智拳印 同陀羅尼 〇又印 〇胎藏除障佛頂の印言なり
- 〇正念誦 唵阿密利多、帝惹縛底、娑縛訶 〇本尊加持 〇字輪觀五 〇本尊加持先
- 〇散念誦 佛眼、大日、陀羅尼、小呪、七佛 〇後供養 〇金剛波羅蜜眞言。唵薩但縛二縛日里合吽 〇通佛頂輪王呪。唵度嚕咩泮吒
- 〇難勝忿怒王呪。唵微枳羅合娜。度那度那吽
- 〇法花法息災、滅罪、延壽、道場を建立して本尊を安置す 房中より佛前に至る作法常の如し

- 〇壇前普禮 親り常在靈山釋迦如來、證明法花多寶世尊、並に三曼茶羅座敷の聖衆に對ひ上ると觀想して禮拜三返せよ。 〇著座 〇塗香 〇三密 〇淨三業
- 〇三部 〇被甲 〇加持香水 〇加持供物枳里 〇覽字觀 〇觀佛 〇金剛起 〇普禮 〇表白 〇神分
- 〇祈願 〇五悔 〇發菩提 〇三昧耶
- 〇勸請 一乘教主釋迦尊、多寶分身諸如來、普賢文殊諸薩埵、身子迦葉諸賢聖、
- 〇發願 本尊外會 釋迦牟尼、靈山會中 諸尊聖衆。
- 〇五大願 〇普供養 〇三方 〇大金剛輪 〇地結 〇四方結 〇道場觀 「大曼茶羅壇上の中に百寶莊嚴八葉の大蓮華花有り、中央花實の上に高妙の寶塔有り、莊嚴殊妙なり、塔門西に開けたり、其の寶塔の中に師子座有り、釋迦、多寶の二佛同座し玉へり、其の外八葉に八大菩薩あり、彌勒、文殊、藥王、妙音、常精進、無盡意、觀音、普賢、中院の四角に四大聲聞あり、第二院に八菩薩あり、勢至、寶手、寶幢、星宿、並に四攝の菩薩、外の四供養あり、第三の院に四大天王八部等の衆、四大忿怒あり、烏瑟沙寔、軍荼利、次に依て坐し玉へり、四十餘尊を而も上首と爲して無量の菩薩、聲聞、緣覺分身の諸佛座敷の聖衆八方に來集して各々化導を助く」七處加持常の如し
- 〇大虚空藏 〇小金剛輪 〇送車輅 〇請車輅 〇召請大鈎 〇四明 〇拍掌 〇結界不 〇虚空網

火院○大三昧耶○闍伽○花座○振鈴○理供○事供○讚先つ四智次に不動○普供養○三力○祈願○禮佛。

- 南無摩訶毗盧遮那佛
- 南無阿閼佛
- 南無寶生佛
- 南無無量壽佛
- 南無不空成就佛
- 南無四波羅蜜菩薩
- 南無十六大菩薩
- 南無八供養菩薩
- 南無四攝智菩薩
- 南無釋迦牟尼佛
- 南無多寶佛以下或は之を略す
- 南無普賢菩薩
- 南無文殊師利菩薩
- 南無觀世音菩薩
- 南無彌勒菩薩
- 南無妙音菩薩
- 南無藥王菩薩
- 南無無盡意菩薩
- 南無常精進菩薩
- 南無勇施菩薩
- 南無多聞天王
- 南無持國天王
- 南無十羅刹女
- 南無金剛界
- 南無大悲胎藏界
- 入我我入○本尊加持○先大日印言智智印○次に釋迦印言智智印○次に釋迦印言智智印○次に釋迦印言智智印
- 通佛真言 曩莫三曼多沒駄引南一暗、薩縛沒駄胃地、薩怛縛合訖哩合捺野彌、二吠奢彌、曩莫、薩縛尾泥、娑婆訶、○次に八大菩薩印言金剛合掌。諸菩薩の慈呪なり 歸命、迦薩縛他、合尾底底、合尾枳羅傳、達羅羅合駄略、濕入佐多五三三詞六娑縛訶、○正念誦○本尊加持釋迦、○字輪觀或は五大○本尊加持。大日、釋迦、多寶。八大菩薩。諸聲聞。佛眼。○散念誦佛眼、大日金、釋迦、多寶、無量壽命、決定如來、諸菩薩、不動、讀經大金、一字○後供養事供○闍伽○後鈴○讚前の如し○普供養○

○、多寶印言法界定印、言は胎藏遍智院一切佛心の明なり。

○正念誦 釋迦の眞言なり。

○釋迦 千返を誦す、已達は無所不至の印なり。



三力○祈願○禮佛○廻向○至心廻向○解界、○撥遣○三部○被甲○禮佛○出堂○讀經の觀念軌に曰く「觀せよ、舌端に於て八葉の蓮花有り、上に佛有す、結跏趺坐して猶し定に有るが如し、妙法蓮花一一の文字、佛の口より出でて皆な金色と成る、具に光明有て遍く虚空に列なる、一一の文字變じて佛身と成る、虚空に遍滿して持經者を圍繞し玉ふ」文○法花肝心眞言 曩莫。三曼多沒駄南。歸命佛唵。三身ア開ア、示ア暗。語ア入アラバ、一ガダ駄佛キ、ジヤニナウ。知チキ、シユニ、ビヤ。見ギキ、ナウツ、バ。如來阿也阿引暗。也惡也薩縛。切勃駄佛也積娘合曩。也娑乞窶合毗耶。也識譏曩娑縛。如虛羅乞又爾離塵のサカラヤ。正フンダリキヤ、白蓮花ソ、タラン、薩駄覽也惹也吽也鏡。也住コ、ク、バ、チラ、固、羅、乞、又、輪、吽。護、娑、縛、合、賀、決、○法花補闕眞言 南無。囉、但、那、多、羅、夜、耶。唵、迦、羅、迦、羅。但、注、但、注。摩、羅、迦、羅、吽。賀、賀、蘇、多、都、婆、摩、曩。娑、縛、賀、○護摩○部主○本尊大○加持物五字○諸尊曼荼羅諸尊。或三十七尊。○伴僧○御加持動

(二)大法 金胎兩部を雜へ入れて行するを大法と云ひ十八道に就て行するを別行といふは大法の大法にあらす。
(三)受茶羅 能説の序品の受茶羅をいふ。

(三)召請 大鈎召なり。
(四)讚 四智と金剛薩埵の讚となり。
(五)禮佛 金剛界の如し、次の入我々入は十八道の如し。

〇〇理趣經法法則は(一)大法、或は別行任意、理趣會の(二)受茶羅を本尊と爲す 房中より佛前に至る作法常の如し

〇壇前普禮〇著座普禮〇塗香〇三密〇淨三業〇三部〇被甲〇加持香水〇加持供物〇覽字觀〇觀佛〇金剛起〇普禮〇表白〇神分〇祈願〇五悔〇發菩提〇三昧耶〇勸請若しは發願、金界の如〇五大願〇普供養〇三方〇大金剛輪〇地結〇四方結〇道場觀「壇の上に惡字あり變じて寶樓閣と成る、樓閣の中に殊妙の壇あり、壇の上に五の月輪有り月輪の中に各々蓮花あり、蓮花の上に唵摩訶素伽の五字有り 次の如く變じて、五股箭五股、摩羯幢、慢印と成る、變じて各々金剛薩埵慾觸愛慢の五尊と成る、各々相好圓滿し威儀具足せり、中央の金剛薩埵の身水精色の如し、右の手に五股金剛杵を持し左の手に金剛鈴を持す、慾金剛の身赤色にし金剛箭を持す、計哩計羅金剛の身白色にして五股金剛を抱く、愛金剛の身青色にして摩羯幢を持す、慢金剛の身黄色にして慢印を持す、八供四攝等の菩薩聖衆前後に圍繞せり」〇大虛空藏〇小金剛輪 〇送車輅 〇請車輅 〇召請 〇四明〇拍掌〇結界降三 〇虛空網〇火院〇大三昧耶〇闍伽〇花座〇振鈴〇理供〇事供 〇禮佛〇普供養〇三方〇祈願〇禮佛〇入我我入〇本尊加持。先金剛薩埵印言 二手外縛して二中指立て合せ、二大二小各々開き立つ、唵三昧耶薩但鏝(朱)三返次に惣印言

大獨股印と名く、金界極喜の三昧耶の印なり 二手外縛して二中指掌に入れて面を合せ、二大二小端を合せて而して偃け立てよ、唵摩訶素伽。縛曰羅薩但縛、弱畔鏝斛、素羅多薩但梵。

〇次五尊羯磨の印明△金剛薩埵大智印 左の手金剛拳に作り左の胯に安ず、右の手掌を舒べて少し屈し、又大指を屈して掌の内に置く、此の印を結び金剛杵を抽擲するの勢の如し、縛曰羅薩但縛。憾

△慾金剛印言 二手拳に作して射方の如くせよ、薩縛引努羅引議。素法薩但摩合曩娑クイリキヲ △計里計羅印言 二手金剛拳に作り、右を以て左を押し腕を交ゆ 薩但鏝合縛曰羅二薩但縛合跛羅莫。素羅多入

△愛金剛印言 二手金剛拳に作り右の拳を立て、左の拳を以て右の手の肘を承けよ、薩縛冥。摩訶引素議。涅哩合住。掣野諾。

△慢金剛印言 二手金剛拳に作り、各々左右の腰に安ず、頭をして而も少しく左に傾かしむ、跛鞞反悉地也。合左攝虞。鉢羅曩多入

〇次五尊三昧耶印言 二手外縛して、二中指掌に入れて、面を合せ二大二小立て合せよ、極喜三昧耶素羅多。薩但梵の印なり

△慾金剛印言 以前の金剛薩埵の印の如し、但し二頭指を屈して甲を合はせ、二大指を並べ立て二頭指の側を押せ、弱。縛曰羅合二涅里合二瑟知合二娑野計麼多。

△計哩計羅印言 以前の慾金剛の印の如し、但し二大右を上にして左を下にして相交へよ。咩。縛曰羅合二計哩吉麗咩。

△愛金剛印言 以前の計哩計羅の印の如し、但し二小指二無名指直く立て合せて二大指並べ立てよ、二頭指中の節を屈し、上の節を屈して指の端し相ひ挂へて、二大指の端と二頭指と相合せよ、鏝。縛曰羅合二泥。娑摩合二羅。囉吒。

△慢金剛印言 以前の愛金剛の印を結び、先づ右の股に觸れ次に左の股に觸れよ、解。縛曰羅合二迦冥。合二濕縛合二哩但囉引。

○正念誦 唵(三)阿、莎訶 ○本尊加持 ○字輪觀 ○本尊加持日 ○佛眼印明。 ○散念誦 佛眼、本尊、金剛薩埵、十七尊總呪、般若 善薩、降三世、讚經、大金、一字。 ○後供養 ○闍伽 ○後鈴 ○讚 四智 ○普供養 三力 ○祈願 ○禮佛 ○廻向 ○至心廻向 ○解界 ○撥遣 ○三部 ○被甲 ○禮佛 ○出堂 ○護摩 息災或 是敬愛 ○部主 金界 ○本尊 諸尊 三十七尊或 三十七尊

(二)阿 理趣經は實相般若の理を説く、實相般若の極理は阿字本不生の理を一致にして故に阿字を用ゆるなり。又金剛薩埵眞言は嚧なり。

(一)加來拳印 四處加持明四返。
(二)左の五指 胎拳に作る。

(三)利菩薩 左手舒相捻して餘指舒べ散じ右は銀指に作し花の莖を切る如く三度の印の方へ遣る、是れ於泥に入る根を切る意なり、明三返。
(四)業菩薩 小三指印六指上の節を交ふなり。

(五)寶樓閣 此法は滅罪の爲め又は供養に之を修するなり。寶樓閣なる法界都婆と意得るこゝなり。

○理趣經段段の印 振鈴の次に ○金剛薩埵 左右各、金剛拳に作つて、右を上げて右の胸に當て、左を左の腰に安す。 ○大日 (三)如來拳印 疾。 ○降三世 大印如常

○觀音 二手各、金剛拳に作つて、左を仰け右を覆せて、右の小指を以つて、左の五指を次第に之を開き、左の掌を三度之を搔く。八葉を開く意なり。疾。 ○虚空藏 二手外縛して、二頭指變形の如くす。疾。 ○拳菩薩 二手金剛拳にして、左を仰け右を覆せて二拳相重ねよ、疾。 ○文殊 金剛界羯磨會(三)利菩薩の印なり。疾。

○轉法輪 二手金剛拳にして、二拳相ひ合せて、二頭圓かに立て合はせ二大並べ立てよ、疾。 ○虚空庫 金剛界三摩耶會、業菩薩の印なり。疾。 ○摧一切魔金剛界羯磨會、牙菩薩の印なり。疾。 ○普賢 金剛合掌。疾。 ○外金剛部 内五股の印、疾。

○七母女天 右の手蓮花拳に作つて、頭指を申べ立て、之を鈎して三度來去せよ、左の拳は腰に安す。疾。 ○三兄弟 金剛合掌。疾。 ○四姉妹 金剛合掌。疾。

○寶樓閣法
○本尊釋迦 ○種子芥 ○三昧耶形、鉢 ○道場觀「觀想せよ、七寶莊嚴樓閣の中に

師子座有り、座の上に蓮花臺有り、臺の上に婆字有り變じて寶鉢と成る、鉢變じて釋迦牟尼如來と成る、説法の相に住し玉へり、佛の右邊に金剛手菩薩有り、十二臂にして黄白色なり、其像四面なり、左邊に寶金剛菩薩有り、四面にして十六臂なり、餉奇尼天女、吉祥天女、金剛使者天女、花齒天女、四大天王等、四方に恭敬し圍繞せり、樓閣の上方に梵天、毗紐天、自在天等有つて、花を散して供養す諸尊の持物座位等は

(一) 經 寶樓閣經
(二) 根本印 刀印
刀印なり、即ち大惠樓閣の印ともいふ。

(一) 經の中卷に之有り。○印言 ○(二) 根本印 二手虚心合掌して、刀の印の如くして(傍注)二頭を風して大指の上に置くなり。二中指寶形の如し、二無名を獨股の如くす。二小指相去けて心に當つ。十方の諸佛天等、此手印の人を○眞言寶樓閣陀羅尼曩莫薩縛但他引曩多去南、引唵ニ尾補羅曩陛、三 摩拏、鉢羅、合 陛、四 但他曩多、五 爾捺捨寧、六 摩拏摩拏、七 蘇上、鉢羅二陛、八 尾摩黎、九 娑引曩羅、十 儼鼻、十一 吽十 吽三入縛合羅、入縛合羅、十四 沒駄尾盧枳帝、五 虞咽夜、合地瑟恥合多、上曩陛、六 娑縛引、訶七 ○心印 右の手の母指を以て、無名指と柱へて、餘の三指を申べて心を掩ひ(三) 左は前の如く左の膝の上に覆せよ。(冠注)或は右掌を仰げ、左は大指小指を捻す。押口云冠注を用ふべし。○心眞言に曰く 唵摩尼縛日羅吽 ○隨心印此印はよく一切の事業を成辨して一切の罪を滅して一切の右の手の母指と無名指と相柱へて、餘の煩惱を除き、久しからずして決定して當に佛菩提を得べし。

(三) 左は云云
の大指小の甲を押して左の膝の上を安んずるなり。

(一) 二菩薩 道場觀を出る金剛手菩薩と寶金剛菩薩との二菩薩なり。

(二) 宇治云云 宇治の關白賴通をいふ。

(三) 大理趣房 實名は寂圓仁海の弟子なり。胎藏院之れあるは釋迦院之れある故なり。

(四) 法三の宮 寬平法皇第三の御親王子。御諱は眞寂親王なり。

三指之を展べ、仰けて右の膝の上に安ず、又左の手の母指と小指と捻して、餘の三を展べて横に心の上に仰け、(注)或は右の手掌を仰けて心に安じ、大指頭指相捻じて環の如くす。左は前に依て膝の上に置く。(押)口に曰く細字を用ゆ可べし云々 ○隨心眞言 唵摩尼反 馱 馱 聲 哩 吽 泮 吒 音 以上三種の印、新舊の經大同小異なり。勸請、發願、禮佛、讚等の法則は、釋迦の法と同じかるべし。○正念誦言 ○字輪觀五 ○散念誦(押)佛、大胎、釋迦、本尊三種、 ○教令輪無能勝 ○護摩息災。敬 ○加持物ヲ、 ○部主金輪。或 ○諸尊 三十七尊 亡者の爲めに此法を修す、惡趣の亡者を召して善所に置く、此法は(三) 宇治殿御祈の爲めに、(四) 大理趣房之を修す、胎藏の曼荼羅を懸けて之を行す。○伴僧大呪を誦す。曼荼羅は經説に在り、(五) 法三の宮御傳の圖には、新舊兩譯の經文を交へたり。

〇〇(六) 六字經法調伏

先づ行者虔誠の心を發し、道場を莊嚴し調伏相應の香花を辨備すべし、四肘の壇を建て、三角の爐を塗る。私曰。一肘は一尺六寸なり。上堂の作法、行法の法則は常の如し。○道場觀「觀想せよ、壇上に惡字有り寶殿樓閣と成る、其の中に殊妙の壇有り、壇上の中央に

(一) 金輪佛頂、金剛佛頂と成る。釋迦(二) 金輪の廻りに六觀音有り、前えより右に廻りて馬頭、聖觀音、千手、衆如意輪、衆十一面、眞準脈、眞六方に列座せり。(異) 坐を立に作る此曼荼羅の左右に不動大威徳有り、二明王の中間に(三) 圓鏡有り、圓鏡の廻りに六箇の天形有り」○印
 二手各々二大指を以て、二中頭を捻して、定の掌を仰け惠の掌を覆ふて、惠の頭指を以て定の大中の間に入れ、定の小指を以て惠の大的大中の間に入る、惠の小指を以て定の無名指の頭を捻し、惠の無名指を以て定の頭指を捻す、四處 眞言 唵 佉知佉知、佉吽知、絨壽絨壽、多知婆知、莎呵 ○又印 二手内縛、二中指を立て合はせ
 二頭指を屈して中指の上節を捻し、二大指を並立てよ、眞言如前 ○正念誦前
 ○散念誦 佛眼。大日。金輪。本尊。六觀音。
 ○護摩調 ○火天段常 ○部主段 金輪、祕說 ○本尊段 曼荼羅 ○諸尊段 三十七尊、不動 世天段 如常、但し終名を加ふべし ○三類形を焼く事 護摩了て未だ鈴杵を置かざる以前に之を焼く、謂く左の脇机に小土器に入れ置ける、三類形を取りて金剛盤の上に置き、先づ不動の慈救呪

蓮花臺有り、臺の上に淨月輪有り、月輪の上に(ボロム) 字有り金輪と成る、金輪變じて(二) 金剛佛頂と成る。釋迦(二) 金輪の廻りに六觀音有り、前えより右に廻りて馬頭、聖觀音、千手、衆如意輪、衆十一面、眞準脈、眞六方に列座せり。(異) 坐を立に作る此曼荼羅の左右に不動大威徳有り、二明王の中間に(三) 圓鏡有り、圓鏡の廻りに六箇の天形有り」○印
 二手各々二大指を以て、二中頭を捻して、定の掌を仰け惠の掌を覆ふて、惠の頭指を以て定の大中の間に入れ、定の小指を以て惠の大的大中の間に入る、惠の小指を以て定の無名指の頭を捻し、惠の無名指を以て定の頭指を捻す、四處 眞言 唵 佉知佉知、佉吽知、絨壽絨壽、多知婆知、莎呵 ○又印 二手内縛、二中指を立て合はせ
 二頭指を屈して中指の上節を捻し、二大指を並立てよ、眞言如前 ○正念誦前
 ○散念誦 佛眼。大日。金輪。本尊。六觀音。
 ○護摩調 ○火天段常 ○部主段 金輪、祕說 ○本尊段 曼荼羅 ○諸尊段 三十七尊、不動 世天段 如常、但し終名を加ふべし ○三類形を焼く事 護摩了て未だ鈴杵を置かざる以前に之を焼く、謂く左の脇机に小土器に入れ置ける、三類形を取りて金剛盤の上に置き、先づ不動の慈救呪

(一) 觀宿 眞觀寺
 座主 東大寺 別當 長者
 入壇 灌頂の弟子 尊
 師 入壇 灌頂の弟子 尊

を以て一百八返を誦し、次に六足尊の呪を以て一百八返を誦し、然して後に降三世の眞言を誦して一股を以て二十一返加持す、其後爐の縁の上に三類形を置きて、佉知佉知の眞言を誦して之を焼く、焼く間に「觀想せよ、一切衆生は作業に依りて輪廻す、此業を淨除して解脱灌頂の名を得」云云先づ天孤を焼くこと七つ、次に地孤七つ、次に人形七つ之を焼く、箸に挿んで爐の火に焼く、次に器を以て本と三類形を容るの器なり 其灰を受取つて蓋を覆ふ件の灰を散せしめざれ、結願の後結線に相ひ貝して、之を増越に送り服せしむ、怨敵を伏するの心なり、湯を以て之を服すべし、酒を以て服すべからず。 ○弓箭の事 三類形の事了つて、

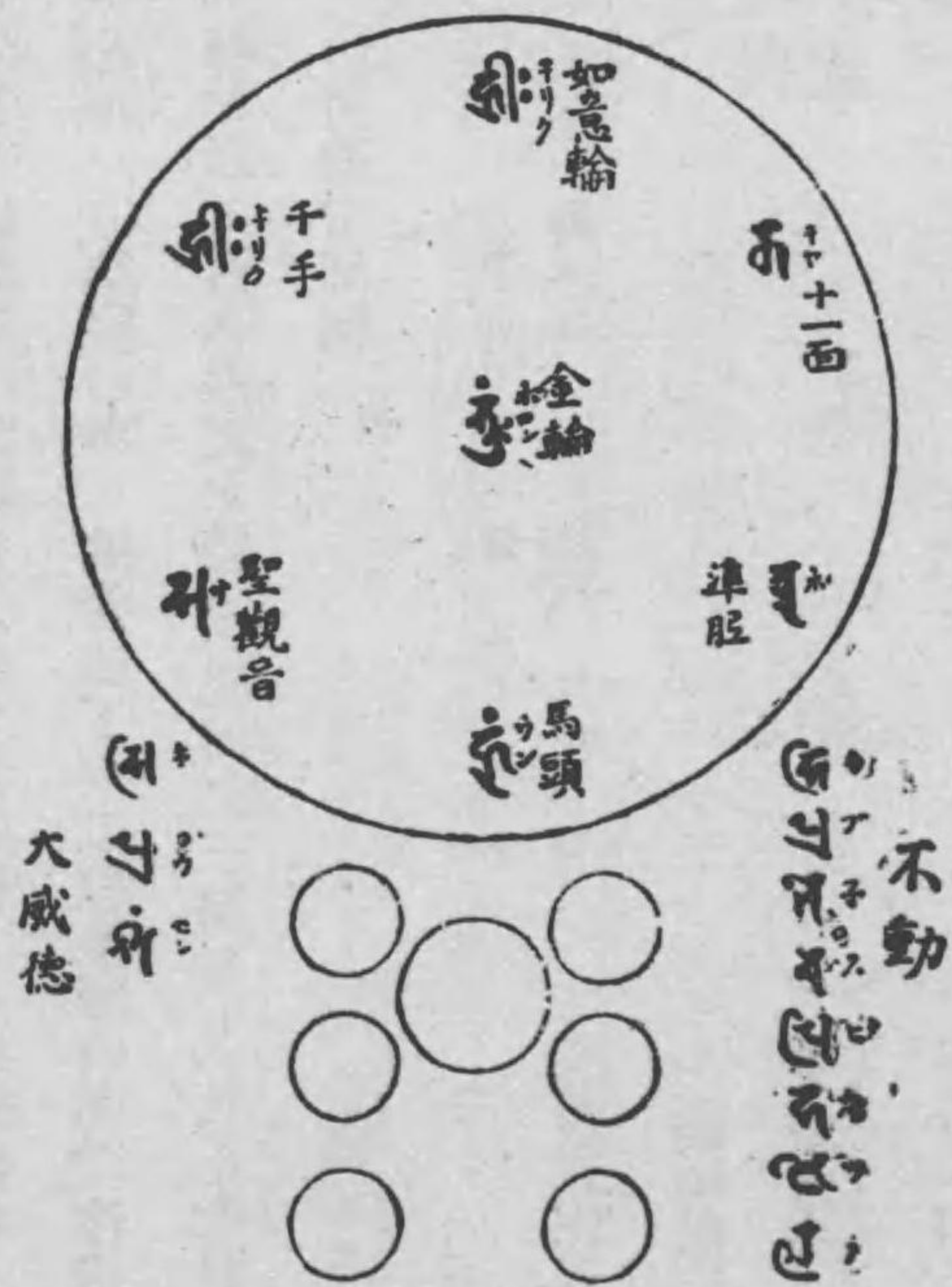


圖 譯 薄 雙 紙

(一) 寶篋印云云
此法は初善提に
修す、初心は釋迦
は本尊さなし已達
は塔中に舍利を安
く、智拳印、初心
は此の印、已達は
塔印、塔の中に陀
羅尼を觀す、施羅
七返。

〇〇〇 寶篋印陀羅尼經法

塔の中に佛舍利、並に陀羅尼を安じて本尊と爲す。

〇本尊、釋迦 〇種子、三昧耶形、舍利 〇印、智拳印 〇眞言は陀羅尼の奥なり。
唵薩縛他他莫多、三十ウ烏瑟泥合沙、馱都訶捺羅尼、薩縛他他莫單、娑引馱都尾部使多
引地瑟耻合帝九、吽吽娑縛引合詞引四十 〇或傳には、寶篋印塔を以て本尊と爲して、羯磨
身の用のざるなり、種子、阿字變じて塔婆と成る」文此傳の意は、塔即羯磨身、羯磨
即ち塔なり、此れ四種曼荼各不離の義なり、塔即羯磨身の事は聖位經に之有り、塔中の
陀羅尼に即ち佛舍利なり、舍利は即ち如意寶珠なり、經に曰く譬へば幢上の如意寶
珠の常に珍寶を雨らして一切の願を満するが如し」文 〇印 智拳印塔の 〇眞言陀羅
尼、或は奥。

〇道場觀「五大所成の虚空の中に惡字有り、變じて七寶殊妙の塔婆と成る、其内に紇
哩字有り八葉の蓮花座と成る、上に^七字有り變じて如來の舍利と成る、舍利變じて釋
迦法身如來と成る、相好莊嚴し圓滿具足せり、十方の諸佛金剛手等の諸大菩薩、前後
に圍繞せり」七處加持

(二) 神明法樂
此法は息災に之を修
し神明法樂に修す
るこ船若の妙理
は珠に神明の納受
なり。

〇〇〇 心經法(二) 神明法樂の爲に殊

(袖書) 敬んで眞言教主大日如來、兩部界會諸尊聖衆、別し

ては本尊聖者三世覺母般若菩薩、十六善神諸大眷屬、惣じては盡空法界一切三寶の
境界に白して言はく、夫れ以れば、佛法は神明の擁護に依つて徳を増し、神明は佛
法の法味を嘗めて威を施す、就中此經は、三世諸佛の祕藏、十方大士の密樞なり、
是の故に文は即ち一紙なれども義理は塵滴の佛も未だ之を説き盡さず、行は即ち十
四なれども、功德は歴劫の談にも之を窮め盡さず、爰を以て其利益を蒙んが爲め、
悉地を成せんが爲めに、壇場を莊り奉り秘行を修し奉る、然らば即ち神明は法樂に
依つて彌々威光を増し、行者は加護に依つて倍々快樂に誇らん、敬んで白す」私かに
ふ以上補

〇本尊、般若菩薩 〇種子、三昧耶形、梵篋

〇道場觀「觀想せよ、心の前に阿字有り變じて七寶の樓閣と成る、而も四門を開く、
其の寶殿の内に紇哩字有り變じて蓮花と成る、蓮花の上に阿字有り月輪と成る、上に
^七字有り變じて梵篋と成る、梵篋變じて般若菩薩と成る、通身白色にして、面に三眼
有り、天女の相に似たり、形貌端正にして菩薩の形の如し、師子座の上に結跏趺坐せ

(一) 鍔箕光 劍
を並ぶるが如し、
先き光りたる五色
の光なり。

(二) 環劍 手頭の
劍(タマキ)

(三) 十六善神 四
天王と十二神將と
なり、此れ般若の
守護神なり。
(四) 經臺の印 此
の印の上に般若梵
徳ありて觀す。

(五) 大惠刀 船若
の大惠刀の印な
り。

り、頭に天冠を戴き、鍔箕光を作す、耳に眞珠寶瑤を著けり、項下に於て七寶の瓔珞あり、兩臂肘を屈して左を仰けて五指を申べ展べて、掌の中に七寶の經函を持す、其中に十二部經を具せり、即ち般若波羅蜜藏なり、右の手を垂れて右の膝の上に著け、五指を舒べ展ぶ、是れ施無畏の手なり、身上に羅綿を着け、兩の手の腕に皆環劍あり、右は梵天左は帝釋、十六善神等の無量の眷屬圍繞せり」

○印眞言 ○經臺の印 二手背を合はせ、二頭二小を屈して、二大を以て二頭二

小の甲の上を押す、二中二無名の背を合せて直く立てよ、

○無盡藏陀羅尼 又は修習

つ曇謨婆去誡縛戴、引鉢羅合積孃、二播引羅頭引曳、唵紇里入引地引室哩入引戊嚕合底尾

惹曳、娑縛引合詞

○梵篋印

二手掌を舒べ、左は仰け右は覆ふせ、左右相ひ合せて

兩手共に少しく掌を屈せよ。

○心經陀羅尼 揭諦揭諦、波羅揭諦、波羅僧揭諦、

菩提娑縛訶

○大惠刀印

二手虛心合掌して、二大並べ立て、二頭を屈して端し

相柱へて二大の上に置く。

○無盡藏陀羅尼 前如

○正念誦 心經の

○散念誦 佛眼。

本尊。梵天。帝釋。十六善神の呪「集經第三に出す」但し用意に任す心經。大金。一字。

○勸請

三世覺母般若尊、十六善神諸眷屬。

○發願

三世覺母 般若菩薩 十六善神 諸大眷屬

○禮佛

○讚四

○護摩 就息災 修之 ○部主段動 ○諸尊段十

七 ○世天段 十六善神

○梵天真言 歸命、沒羅捺摩曳、莎訶

○帝釋眞言 歸命、

因捺羅耶、莎訶、以上の二呪は 散念誦に用ゆ

照に曰く、本紙には此に陀羅尼集經所説の三十六神王

の呪を出す、今は略す。

○菩提揚經法 釋迦を以て本尊と爲す。有雙

茶羅

○種子杵 ○三形鉢 ○道場觀

釋迦の如く二曼

○印言

○根本印 二手平に展へて、右の手を以て左の手の仰けたる

掌を押して心の上に安ず、名けて菩提揚莊嚴陀羅尼根本の印と爲す。梵篋の

○陀羅

尼別

○隨心陀羅尼 唵薩縛怛他莫多、縛耶縛嚕囉帝、惹耶惹野、娑婆訶

○心中心

陀羅尼、唵虎嚕虎嚕、惹耶穆穆、莎訶

以上は三種陀羅尼なり、満すべき呪返

等、具さに本經を見るべし、此法は寶樓閣の法に引き合せて意を得べきなり、天女

等の印明は彼の法に見たり、彼此釋迦を以て本尊と爲す、種子三昧耶の印明は胎藏の

如し。

(一) 菩提揚經法 此の法は寶樓閣法尤も滅罪の爲に之を修す。
(二) 曼荼羅 道場觀なり。
(三) 三種陀羅尼 根本印を結んで三種の明を誦す。

(四) 無垢云云 此法敬愛にも修すべけれども専ら滅罪を修する法なり。

○無垢淨光陀羅尼法 敬愛に之(袖書) 祕録に三十曰く。無垢光大陀羅尼經一卷 眞元圖覽

(二) 本尊阿彌陀の胎藏の三
 百光通照の胎藏の三
 大日如來彌陀の胎藏の三
 摩地淨光の胎藏の三
 無垢淨光の胎藏の三
 故に本尊彌陀の胎藏の三
 佛明照十方世界念
 佛來生攝取不捨の
 義は無垢淨光の胎藏の
 契ふ。
(三) 蟻子 蟻塚の
 土を取て丸めて丸
 香となす、此を滅
 罪に用るに功能あ
 り。
(四) 大理趣房 寂
 圓なり、此の法は
 白河院、中宮の御
 菩提の爲に修す、御
 道徳僧都に仰付け
 られて修せしめ玉
 ふ。
(五) 十二光佛 雙
 觀經の説なり。此
 の中第六を清淨光
 佛、無垢淨光佛と
 呪ふ。
(六) 呪賊經 此法
 は資人を防がんに
 めに修するものな
 り、取返し盗みたる
 人に返さんか爲め
 にあらす。
(七) 天等の通

二五六
 垢淨光大陀 無垢淨光眞言一卷 惠運 梵字無垢淨光陀羅尼一本 仁海曰

〇〇 本尊阿彌陀 種子 〇三昧耶形開敷蓮 〇道場觀 如常。但し無垢淨光 〇印言 常
八葉印 房說 無垢淨光陀羅尼之れを用ゆ。或は三 〇部主 音 〇諸尊 三十七尊。或 〇乳木 天木香、五 〇蘇
摩那花 仁冬。以上二種の 〇〇 蟻子百八丸 丸香に之 種種名香合和するなり。口傳に曰く、若し名香
中有るに隨ふなり。 〇觀請、本尊聖者無垢光、蓮花部中諸聖衆。成蓮 大理趣房曰く無垢淨光は十二
 光佛の其一なり」又 成蓮房曰く、清淨光佛なり」文 勝俱胝院之に同じ。實範上人、烏
 羽院の御祈に此法を修する時、金剛界を懸け奉り敬愛に之を行す。云云
〇〇 十二光佛 無量光佛 無邊光佛 無礙光佛 無對光佛 光炎王佛 清淨光佛 歡
 喜光佛 智慧光佛 不斷光佛 難思光佛 無稱光佛 起日月光佛
〇〇 呪賊經法 盜人の爲め 之を修す
〇 本尊訶利帝 種子 〇三昧耶形、 〇道場觀 「壇上に八つの結哩字有り、
 各々變じて荷葉座と成る、中央の座の上に卍字有り變じて刀と成る、刀變じて訶利帝
 母と成る、餘の七葉の座に各々卍字有り」七鬼と成る、眷屬圍繞せり」
〇 印 降伏の 二手内縛して、二中指を立て合はせ、二頭指を屈して二中指の上の節に

(一) 種子なり。刀は降伏
 の義ある故なり。
 (二) 七鬼 天上の五百
 母にして千の天子あ
 り、其の中を愛子
 九人、其下又二人を
 除て七鬼なり。
 (以上二五六註)
(三) 四無量觀 四
 方結大三摩耶等を
 用ゐざることは請
 する處の天等卑劣
 の故に結界の中に
 は用ゐるべき故に
 を用ゐる地結の無
 量觀は理觀なれば
 之を相應なれば佛
 菩薩には相應なれば
 天等には相應なれば
 正念誦字輪觀なり
 等も用なり。是
 れ天部の普通な
 り。
(四) 八杯 七鬼と
 帝母とに供す。
 (五) 燈明 燈柱一
 筋にして側へ置
 なく、壇上燈明か
 なれば眷屬來るこ
 となし。
(六) 壽命經法 此
 法は息災増益の中
 に増益を肝要とな

屬けよ、二大指を並べ立て二中指の中節の文を押せ、二無名指、二頭二大の指の跨よ
 り指し出して、二小相係けて鈎決せよ、眞言に曰く、唵、弩弩麼里、迦、引、嘸帝、娑
 縛、二、引、訶、引、〇散念誦 法施。大日。本尊。愛子。唵、チ、ヒ、チ、ニ、ソ、ハ、カ。
 〇勸請 〇發願 〇
禮佛 〇讚 〇行法用意 三方の偈の後、道場觀以前に、地結の印明許り之を用ゐ、
四無量觀四方結等は之を用ゐず、又正念誦字輪觀等も之を用ゐず、前供養は常の如
 し、後供養には闕伽許り之を供して、塗香花鬘燒香飲食燈明等はすべて用ゐざるなり、
 次に讚。普供養、祈願、禮佛、以下の作法は常の如し。供物は洗米、八杯、燈明二
 臺常の如し。
〇〇 壽命經法 息災 増益
〇〇 道場觀 器如常 「八葉蓮花臺の上に 惡字有り變じて五股と成る、五股變じて金剛壽
 命薩埵の智身と成る、身色黄金にして五佛の寶冠を著し、右に五股杵を持し、左に五
 股鈴を持す、八供四攝四大天王、前後に圍繞せり」
〇 印 五股 唵、縛、日、羅、娑、勢、娑、縛、訶、訶、〇又印 二羽金剛拳にして、頭指相ひ鈎し

す、壽命を延るは増益の義の故なり。
(五) 噫、噫の阿字は命根の義なる故なり。
(六) 印、右の五指は佛界、左の五指は衆生界にして生佛平等一體にして不生不滅なり。
(以上二五七頁註)

(二) 都合、入用物の都合書を擧ぐるなり。

(一) 淨衣、増益は黄、息災は白なり。

(三) 童子經云云、書寫の時此の作法を用ひ、及ぶ迄は十五才以上を用ひ、此の守りを用ひ、作法集に出づ。
(四) 月の八日云云、是は成就の日。
(五) 若くは云云、小兒の衰日を除く。
(六) 持せしむ守事なり。
(七) 十五鬼神、乾達婆の眷屬なり。
(八) 去垢の呪、枳里々々の明、枳里々々の呪、經を寫す時手に筆を取て書き了る迄、筆を放さず書寫す故に硯の墨等用意して、硯分心を付け置く可し。
(九) 又子の母云云、是は施主の宅に至りては、住居にては沙汰なきなり。

て頂上に安じて、金剛壽命陀羅尼七邊を誦せよ、然して後手を分て頂に繫げよ、次に二頭を舒べて遍身に旋轉して甲冑を環らす勢の如くせよ、唵、唵、唵、縛曰羅、師口に曰く、正しく紫ひ繞らす時、右の頭の面に唵を觀じ、左の頭の面に唵を觀じて、紫繞已て金剛甲冑を被ると觀せよ」文 ○正念誦本尊 ○散念誦佛眼、大日、本尊、金剛壽命、佛眼、陀羅尼、天王、一字 ○勸請 本尊界會延命尊、金剛部中諸聖衆 ○發願 三世常住 薩埵智身 ○結界 降三 ○部母忙非 ○讚四智、金 ○禮佛 曩莫、縛曰羅、母迦三摩耶薩怛縛



○字輪觀
○伴僧 三方の偈の後金智譯の經を轉讀すべし。若し伴僧多かる時は不斷に之を轉讀すべし。作法は例の轉經修如し。 ○御加持 降三世 ○護摩 ○部主寶世尊 口に曰く。息災の時 ○本尊段 ○加持物 本尊。並に寶光幢、降三世之用ひ。 ○支度 注進 壽命經御修法支度事 (二) 合 蘇蜜 名香白檀。口に曰く息災の時 五寶 金、銀、瑠璃、琥珀、眞珠。 五香。鬱金、蘇合、白檀、丁子、白朮。 五藥。天門冬、訶梨勒、

桂心、地黄、荷杞 五穀、稻穀、大麥、小麥、菘豆、油麻、(二) 淨衣 黄色若口に曰く伴經机。並に小燈臺。伴僧の員數に隨つて之を載すべし。又轉經の料に油五升。五明の外に之を加ふべし云々 壽命經御修法所 奉供 大壇供 護摩供 諸神供 奉讀 金剛壽命經 奉念 佛眼眞言 大日眞言、金剛壽命陀羅尼、多聞天眞言、持國天眞言、增長天眞言、廣目天眞言、一字金輪眞言 御本に曰く。幸心を開く故に勸修寺の次第に依つて私に之を加ふ

〇〇〇 童子經書寫供養略作法

月の八日、若くは十五日、若くは他の吉日を以つて書寫供養して之を(五) 持せしむ、師説に曰く、兒の生氣の方の水を寅の時に之を汲むで、硯の水並に關伽水と爲す、又東方桑木の東の枝を切つて硯水に入る」文 ○次に東方に向ふて南無栴檀乾闥婆王と唱ること百返、次に(六) 十五鬼神の名號を唱ふる事各々七返 ○次に新しき硯筆を以て經を書寫す、去垢の明を以つて二十筆硯を加持す、書寫の間名香を焼いて之を(八) 斷せず、(九) 又子の母洗浴して八齋戒を受けしめ、書寫了つて供養す。 ○作法 三禮、如來唄、表白、經題、發願、四弘、讀經、返 結線 五色の糸 神分、祈願、六種廻向

十七面千手は胎藏
十波羅蜜を表す。
大洲四惡趣六欲四
種四空處三界とな

(三)蓮花云云蓮
花五股印中指は蓮
の一葉即中古な
り。大指小指開き
立つるは四股な
る蓮花の莖となし
たる蓮花の莖なり。此
の印は胎の八葉九
尊金の九尊なり。
祕印は九峰の印
なり。
手陀羅尼なり。千
手陀羅尼此法滅
罪に修する事は臨
終の時惡相を現し
て畜生道に墮する
相現する時此の
法を修して早く助
可きなり。
白馬頭白馬
は勝る。故に三形
さなす。

(二)左の跌翻す
處に如來の千輪
の形あり。風空の間
を去け馬口と觀
す。當尊の大慈を
馬に喩ふ。謂く湯
草したる馬の但た水
知なき義は此の所
惱及一切衆生の煩
惱を食して餘念な
きに喩ふ。
(三)結界印言を
出さざるも大威徳
或は不動なり。瓶
口又寶瓶なり。瓶
し口も甘露の智水
入れ止ま生じ與熱
金櫃止ましむ。熱
きも此の尊細注な
と四臂の尊に二臂
臂は陀羅尼經の二
釋三卷の經に説け
り。
(六)十一面此法
は病患疾癘等を除
く十一面を具す。

具す、無量壽佛を頂載せり、千手に各々三摩耶を持して衆生の願樂を滿つ、手(鼻)手を千に作る
掌の中に於て各々皆一眼有り、千臂廣博の體にして、二十五有に遊んで、大悲方便
を以て諸の有情の苦を斷じ給へり、十波羅蜜、八供養の菩薩、白衣、大白衣、多羅、
毗俱胝、及び天龍八部衆、前後に圍繞せり。

○印 (三)蓮花五股印祕印なり。二手合掌して、二中指連合、二頭二無名立て交へ、二大二小各々
開き立つ、○真言(三)大陀羅尼。或は唵 ○又印八葉印 ○真言、唵縛曰羅達麼訖哩。

○勸請 千手千眼觀世音、蓮花部中諸聖衆。 ○發願千手千眼 蓮花部中 諸聖衆 ○結界馬

○禮佛 南無、沙賀沙羅布惹、阿梨耶、縛嚕枳帝、濕婆羅、胃地薩埵、摩訶薩埵
○讚四智 ○字輪觀五大。或は ○正念誦呪 ○散念誦佛眼。大日。阿彌陀。正觀音。本 ○護摩
息災 ○部主正觀音 ○諸尊三十七尊或

○馬頭滅
○種子五 ○三昧耶形、白馬頭四臂 ○尊形二臂或 ○道場觀「壇の上に阿字有り變じて蓮花
座と成る、座の上に字有り變じて馬口形と成る、馬口形變じて馬頭明王と成る、赤

肉色にして三面二臂なり、忿怒形にして頭上に白馬形有り、輪王馬寶の如し、衆生の
諸の恐怖を碎破し、無明の諸障を噉食して盡し、兩手に根本の印を結
んで、右の足を立て、左の趺翻がへして外に向ふ、蓮花部の無量の聖衆、前後に圍繞
せり」○印 二手合掌して、二頭二無名屈して掌に入れて甲を合はせ、二大並べ立
て微しく屈して頭指に著くること勿れ。○真言 爾阿密利怛、弩婆縛、吽發吒 ○
勸請 馬頭觀音大悲尊、蓮花部中諸聖衆 ○發願本尊聖者 馬頭明王 諸大眷屬 ○結界 ○禮
佛眞諱。阿利耶。賀耶。里。婆。 ○讚四智 ○字輪觀大 ○正念誦阿彌陀。吽發吒。 ○散念誦佛眼。大
陀。正觀音。本尊。 ○護摩息災或 ○部主正觀音 ○諸尊三十七尊或六觀音

○十一面法
○種子五 ○三昧耶形、軍持 ○尊形
○道場觀「樓閣の中に大曼荼羅有り、上に八葉の蓮花有り、其上に圓淨の月輪有り、
上に字有り變じて軍持と成る、軍持變じて十一面觀自在菩薩と成る、身白肉色に
して四臂十一面を具す、當前の三面は寂靜の相、左邊の三面は威怒の相、右邊の三面

は利牙出現の相なり、後ろの一面は咲怒の容、最上の一面は如來の相なり、各々頭冠の中に皆化佛有ます、右の第一の手には念數を把り、第二の手は施無畏なり、左の第一の手には蓮花を持し、第二の手には軍持を執り種種の瓔珞其身を莊嚴せり、無量の聖衆前後に圍繞せり。」

(一) 秘説 中節に
至り此の印を頂上
に置きて自身の本
面を加へて十一面
を觀す是れなり
此の印にて次の小
呪を誦す。

(二) 又印 諸觀音
通用の印なり。

(三) 正念誦 初七
返は大呪、八返よ
り小呪なり。
大日 金大日
なり。

○印 根本印 祕印口傳 金剛合掌して頂上に置く。 (深く又ゆる此れ) ○眞言 ○姪他開一

達羅達羅、二地囉地囉、三杜囉杜囉、四壹蘇 (去聲) 下同代蘇、五折隸折隸、六鉢羅折隸鉢羅

折隸、七俱素謎、八俱素摩伐隸、九壹履弭履、十止履止履、(知里反社切) 羅摩、波捺耶

夷向切 戊輪律陀、薩埵、三莫訶、迦囉尼 (上聲) 十沙去聲同訶、五、十 ○小呪 (押) 小呪は常の合

莫迦迦囉尼 (上聲) 莎訶 ○又印八葉印 ○眞言 唵囉計濕縛羅、紇哩 ○勸請

大聖慈悲十一面、蓮花部中諸聖衆。 ○發願 (蓮花部中) 十一面尊 ○結界馬 ○禮佛

南無阿利耶、囉迦囉奢母佉 ○讚智 本尊讚 唵鉢納麼羅誑涅 (摩) 摩攬、迦引摩羅

誑母答 (合聲) 盧迦曇他、滿馱銘、薩縛鉢馱悉地者 ○字輪觀 (大) ○正念誦小

○散念誦 (佛眼。大日。阿彌陀。正觀音。) ○護摩 (息) 部主 (正觀) ○諸尊 (三十七或六觀音)

○○準 祇觀音 (除災。延命。求兒。)

○種子 ○三昧耶形、寶瓶 ○尊形、十八臂 ○道場觀「觀せよ、大海の中に乾哩

字有り (大蓮花と成る、難陀跋難陀の二龍王共に蓮花の莖を扶く、蓮の上に電字有り

變じて寶瓶と成る、瓶變じて七俱胝佛母尊と成る、身黃白色にして種種に其身を莊嚴

せり、其像の周圍に光明光焰あり、(白螺を劍となし十八臂を具す、面上に三目有り、

上の二手は說法の相に作る、右の第二の手は施無畏、第三の手は劍を把り、第四は

數珠を把り、第五は (微惹) 布羅迦菓を把り、第六は鐵斧を把り第七は鉤を把り、第八

は (跋折羅) を把り、第九には (寶鬘) を把る、左の第二は如意寶幢を把り、第三は蓮花

を把り、第四は (深罐) を把り、第五は索、第六は輪を把る、第七は螺、第八は寶瓶、

第九は般若梵篋、赤蓮花に坐し給ふ、八供四攝の諸大菩薩、二淨居天、前後に圍繞せり」

○印 二手内縛して、二中指を立て合せ、二頭指を屈して二中指の上節に附く、二

大指を開て二頭指の側に附けよ。 眞言 曩謨、颯多引南、引三藐三沒馱、引俱引祇

南、引怛囉也 (合他、引唵) 以下者禮、主禮、準泥、娑縛 (引) 二賀。 ○又印 二手外縛

して、二頭指立て合せ、二大指並べ立て、五處を印す。 ○眞言 唵迦摩黎、尾麼黎、

(一) 准 祇 觀 音
此の法は來兒
の祈りに聖尊
災は諸尊に過
命は廿一年の
延る。十八臂
の譯あり。金
也。大蓮華 赤
也。白螺 白螺
七寶の羅一なり。
滿業と翻す。實
名きものなり。求
子に修するは此
依る。
(六) 跋折羅 三貼
なり。
(七) 寶鬘 一種の
玉を貫いたるもの
なり。
(八) 深罐 口の長
き瓶なり。

○ 緇索 尊形の
時はケンジャク
三形の時はケン
ク、此の三形は四
種の衆を以て極悪
の衆生を濟度する
こと世間の流火の
魚類を釣るが如
し。○ 右の第一 此
尊の四臂四種に配
す。第一念珠は息
災、水瓶は増益、
蓮花は敬愛、緇索
は調伏なり。○ 鹿
皮の中にて子を諸
念ふこと他に勝
る。今此尊の一切
慈悲深きことを表
す。○ 無量 此の尊
因位の時仙人の道
を行することあり
り。故に眷屬とな
す。○ 根本印 内三
指なり、此の印は
甲冑の印にして、
一切衆生に甲冑を
被らしめ堅固とな
らしむ。○ 虎口 禪度
金にて一切衆生を
以て一切衆生を生

死の大海より引上
る心なり。
○ 御加持 天子
の爲に御加持、平
人の爲に後加持と
書す。

○ 八字文殊 息災。天
法は智慧福德音聲
の爲に之を修す、
文殊は智慧を與ふ
故に之を修す。

- 準泥、娑縛合賀引 ○ 勸請 準抵佛母大薩埵、如來部中諸聖衆、 ○ 發願 準抵佛母 如來部中 諸尊聖衆、 ○ 結界 〇 禮佛、南無阿利耶沒駄、婆伽縛底、〇 讚四
- 字輪觀 大 〇 正念誦 唯者禮主禮 〇 散念誦 佛眼、大日、釋迦、本尊、不動、鳥、〇 護摩息
- 主胎藏大日 〇 諸尊三十七尊 或六觀音

〇〇 不空絹索法

○ 種子字 〇 三昧耶形、(一) 緇索 ○ 道場觀 「壇の上に八葉の大蓮花あり、臺の上に月輪あり、月輪の中に字あり變じて絹索となる、絹索變じて不空絹索觀自在尊と成る、首に花冠を頂き、冠の中に阿彌陀佛有ます、三面四臂にして通身肉色なり、(二) 右の第一の手には念持を持し、次の手には水瓶を持す、左の第一の手には蓮花を持し、次の手には絹索を持す、(三) 鹿皮を以て袈裟となす、赤蓮花に坐す、蓮華部の聖衆、乃至(四) 無量の仙衆前後に圍繞せり、(五) 根本印 二手蓮花合掌して進力禪智金剛縛して禪度を以て左の(六) 虎口の中に入れよ、〇 眞言 唵阿謨佉、鉢頭摩波奢、俱路駄迦羅沙野、摩訶波瑟波底儀魔縛囉拏、俱吠羅謨羅憾摩、吠沙陀羅、鉢頭摩俱擻三摩儀、吽吽 〇 又

- の眞言 前の印唵鉢納摩陀羅、阿謨迦、惹野泥、主嚕主嚕、娑縛訶、〇 正念誦 第二の呪
- 散念誦 佛眼、大日、正觀音、本尊、 ○ 伴僧 第二 〇 御加持 同 ○ 勸請 ○ 不空絹索觀
- 世音、蓮花部中諸聖衆、 ○ 禮佛 曩謨阿利耶、謨迦波奢吠地、薩但縛摩訶薩但縛 ○ 讚
- 四方 〇 護摩息 〇 部主頭

〇〇〇 八字文殊 息災。天 房中より佛前に至る作法常の如し

- 壇前普禮 ○ 著座普禮 ○ 塗香 ○ 三密觀 ○ 淨三業 ○ 三部 ○ 被甲 ○ 加持香水 ○ 加持供物 ○ 覽字觀 ○ 觀佛 ○ 金剛起 ○ 普禮 ○ 表白 ○ 神分 ○ 祈願 ○ 五悔 ○ 發菩提 ○ 勸請 三世覺
- 母大聖尊、八大童子諸眷屬 ○ 發願 八字文殊 八大童子 諸眷屬等 ○ 五大願 ○ 普
- 供養 ○ 三力 ○ 四無量觀 ○ 大金剛輪 ○ 地結 ○ 四方結 ○ 金剛眼 ○ 召罪 ○ 摧罪 ○ 業障除 ○ 成
- 菩提 ○ 道場觀 「想へ、須彌山の上に阿字有り轉じて妙樓閣と成る、其の中に
- 紇哩字有り大蓮花と成る、其の上に(七) 字有り師子と成る、其上に阿字有り淨白圓明の月
- 輪と成る、其上に紇哩字有り八葉の蓮花と成る、其上に(八) 字有り轉じて利劍と成る、利

(七) 五尊云云 五尊其の儘にして定門十六尊の徳を具する六尊の徳を具する義なり。
(八) 大獨股印 二乗心を射るなり。
(九) 大智印 右大を掌に入れ杵を抽擲するこさ三度言三返。

次、大獨股印極喜三昧耶の印なり(押) ○真言に曰く、唵摩訶素伽、縛日羅薩怛縛、弱吽
鍍斛、蘇羅多薩怛鍍 ○次に五尊羯磨の印明 △金剛薩埵同會愛菩薩薩埵の印なり 大智印
言に曰く、縛日羅薩怛縛合 △慾金剛の印同會愛菩薩薩埵の印の如し 真言に曰く、薩縛引弩羅引識、素
法、薩怛摩、合、曇娑 △計哩計羅の印、二手金剛拳に作り、右を以て左を押し腕
を交へよ。真言に曰く、薩怛鍍、合、縛日羅薩怛縛合、跛羅莫素羅多入 △愛金剛の印
羯磨會禮菩薩の印の如し 真言に曰く、薩縛冥、摩訶引素伽涅哩合、住掣野諾 △慢金剛の手同會禮菩薩
真言に曰く、跛鞞ハダヤ 反悉地也、合、左擺虞、鉢羅曇多入 ○次に五尊三摩耶の印明
△金剛薩埵三摩耶の印極喜三摩耶の印 真言に曰く、素羅多薩怛鍍 △欲金剛の印 以前の金剛
薩埵の印の如し、但し二頭指を屈して甲を並はせ、二大指を並べ立て、二頭指の側を
押せ。真言に曰く、弱、縛日羅合、涅哩合、悉知合、娑野計麼吒 △計里計羅の印、以前の
慾金剛の印の如し、但し二大指右を上にし左を下にして相交へよ。真言に曰く、吽、
縛日羅合、計里吉麗吽 △愛金剛の印 以前の計里計羅の印の如し、但し二小指二無名
指直く立て、合せて二大指並べ立て、二頭指中節を屈し、又上節を屈して指の端し相拄
へて、二大指の端と、二頭指の端しと相合せよ。真言に曰く、鍍、縛日羅合、拈、娑摩

(二) 正念誦 チン
マカソキヤの眞
言。

合ニ羅囉吒 △慢金剛の印 以前の愛金剛の印を結べ、先づ右の股ヒキに觸れ。次に左の股
に觸れよ。真言に曰く、斛、引縛日羅合、迦冥、濕縛合、哩但、囉ニ合
○(二) 正念誦 呪 ○散念誦 佛眼。大日。本尊二種。施縛日羅薩怛縛。唵摩
薩埵、四種明妃諸眷屬 ○發願 金剛薩埵、慾觸愛慢、諸眷屬等 ○禮佛、南無阿
利耶、縛日羅薩怛縛、摩訶薩怛縛三 南無阿利耶、伊車縛日羅、南無阿利耶、計哩計羅
縛日羅、南無阿利耶、羅法縛日羅、南無阿利耶、摩麗縛日羅以上禮 ○讚四 讚四智金 ○護
摩敬 ○部主 ○本尊段五 ○諸尊三十 ○伴僧 ○御加持の呪呪

(三) 虚空藏法 此
法は福徳智慧音聲
の爲に此の法を修
す。
(三) 八師子 八正
道を表す。

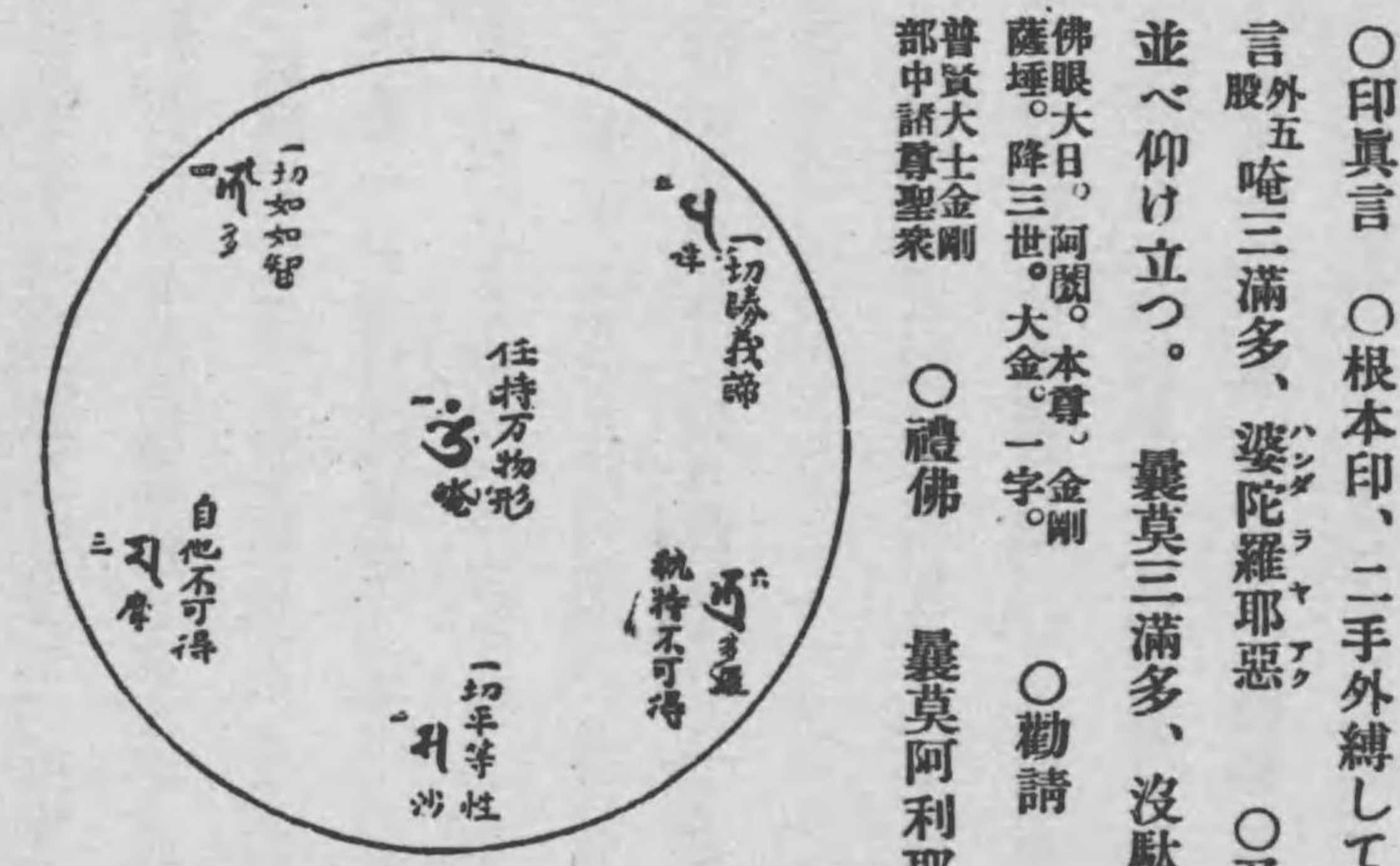
○(三) 虚空藏法
○種子字 ○三摩耶形、寶珠 ○道場觀「觀せよ、地の上に八功德水有り、水の中に
寶山有り、山の頂に寶樓閣有り、樓閣の中に三 八師子の座有り、座の上に満月輪有り、
月輪の上に七寶の蓮花臺有り、臺の上に但洛字有り、字變じて寶珠と成る、寶珠變じ
て虚空藏菩薩と成る、其身金色にして首しに五佛の寶冠を著し、右の手は施願の印に
て、左の手に如來寶珠を持す、無量の眷屬前後に圍繞せり。」

○根本印 金剛 三摩耶會の寶善
 薩の印の故に縛を
 宜しとす。○又の印 是れ
 求開持儀軌に一印
 の法を説くは是れな
 り。○或は下は之を伸
 握る。○軍荼利 南方
 部の教令輪なる
 故なり。○尊賢云云 此
 法は滅罪の爲に之
 を修す。○道場觀 本
 金剛薩埵と同體な
 り。○種子 觀の如
 し。○種子 觀の如
 大日さば因果の異
 にして不二の體な
 る。○故に之を用ゆ
 る。○三形も五股な
 り。○右の手の五股は
 生本の五股は乘
 手に有る。○五股は乘
 覺して無煩悩の驚
 眠を醒す。○白象王 象は
 大力にして淨菩提心
 動なれば淨菩提心

○印眞言 ○二根本印 金剛 二手内縛して、二頭指を立て合はせ、中節を覺めて寶形の如くす、二大指を並べ立つ。唵縛曰羅、囉怛曇、唵。○又の印 胎 二手虚心合掌して二頭指を屈して、二大指を並べ立て、又屈して二頭指の背の上より掌内に入れよ。曇莫三滿多沒駄南、阿迦餘三曼荼、弩藥多、尾悉怛羅、縛羅駄羅、娑縛賀。○三又の印 一右の拳に作り、頭指大指端を合せ、共に覺めて寶形に作れ。申へて大頭寶形 南牟、一阿迦引捨舒可、二揭切、三魚羯、四婆引余可、五阿喇、六迦摩喇、七慕喇、八莎訶八。○正念誦 囉囉囉、○散念誦 佛。大。寶生。本尊。○勸請 能滿諸願虛空藏、三十七尊諸聖衆。○發願 本尊聖者 虛空藏尊 ○禮佛 ○讚智 ○護摩益 ○部主 寶生 ○諸尊 七尊 願摩尼部中 諸尊聖衆

白淨信心の義を表
 するなり。

○普賢云云 此
 の法は増益延壽の
 爲に之を修す。○
 普賢の所變は
 延命の三摩地に入
 り。○玉ふと云ふな
 り。○金剛薩埵といふ
 なり。○根本は大日
 變なり。



國譯海雙紙

屬自然に具足す。」

○印眞言 ○根本印、二手外縛して、二中指を立て合はす、三摩耶薩怛饒 ○又印 言 外五 唵三滿多、婆陀羅耶惡 ○又印言 胎藏一切支 分生の印言 二手虚心合掌して、二大指を相ひ 並べ仰け立つ。曇莫三滿多、沒駄南、闇惡、娑縛訶 ○正念誦 囉囉囉 ○散念誦 佛眼大日。阿闍。本尊。金剛 薩埵。降三世。大金。一字。○勸請 普賢菩薩大薩埵、金剛部中諸眷屬。○發願 本尊 普賢大士金剛 部中諸尊聖衆 ○禮佛 曇莫阿利耶、三滿多、咩多羅、胃地薩怛縛三 ○讚四智。金 又別讀あり ○字輪觀 石山。或 儀軌に出づ ○護摩息 ○部主 金界 ○諸尊 三十七尊 ○密號 普攝 金剛、胎藏には眞如金剛と云ふ。

○三普賢延命法(押)増益延壽の 爲めに之を修す

○種子咒 ○三昧耶形、甲冑

○道場觀「須彌山の上に惡字有り、變じて七寶 の宮殿と成る、其中に絛哩字有り、變じて八葉

(一) 五千の群象
無數生死の表示なり。
(二) 一の大金輪
此本尊の堅固の金剛の義なり。
(三) 千葉の坐なり
菩薩の坐なり。
(四) 甲冑有漏の
依身を全ふして無漏常住の身を得る義なり。
(五) 三世常住云云
大日如來なり。
(六) 金剛壽命云云
普賢延命なり。
(七) 満月童子
十五圓満の月輪の
端眼に類して童子の
に缺け目なきに喩ふ。
(八) 印
此印は右は佛界の五大、左は衆生界の五大、左右の風指は命息なり、佛界の命息を以て衆生無常の命風を抱へる意なり。
(九) 結背の印
金剛界結背の印。金剛界結背の印。金剛界結背の印。
(十) 伴僧の修する故
大法に修する故

の蓮花と成る、蓮花の上に(一)五千の群象有り、(二)一の大金剛輪を負ふ、其輪の上に四の哦字有り四の大象と成る、鼻を以て獨股杵を巻く、各六牙を具す、其象外方に向つて立つ、象の頂に次の如く四大天王有りて世界を誓護す、其の象の上に訖哩字有り、(三)千葉の大寶花王と成る、其上に阿字有り圓明の淨月輪と成る、輪の上に欲字有り變じて金剛の(四)甲冑と成る、甲冑轉じて(五)三世常住の(六)金剛壽命薩埵の智身と成る、其形も満月童子の如し、身は黄金色なり、五佛の寶冠を戴き、身より百寶の光を放つ、光の外に白月輪有り、二十臂を具して、十六尊、並に四攝の三摩耶形の標幟を執持す」

○(八) 印 二手金剛拳に作りて、二頭指仰け並べて相係け而して鈎結して心に當てよ、眞言に曰く。唵縛日羅、合唵灑、娑縛訶 ○又の印(九)結 二手金剛拳にして、二風を舒べて相縈ひ繞らせ、天魔惡類を降伏し、最正覺を成せんが爲めの故に、此の大誓の甲冑を被る、頸、胸、腰、腕、膝、脛、足を結んで、後に首頭を堅めよ。眞言に曰く、肩以下皆左右に結べ、先づ右次に左。一唵硃縛日羅唵 ○正念誦(十)縛日羅唵 ○散念誦(十一)佛眼。處を結ぶに隨つて各々、明一返を誦せよ。唵硃縛日羅唵 ○散念誦(十二)佛眼。本尊、二種降三世、執金剛。四天王。經。大金。一字。 ○(十二) 伴僧(十三)中分。誦經 ○御加持(十四)降三世 ○勸請 普賢延命大薩

に大法の時伴僧
廿人なり、誦經は
金剛智の壽命經
を讀む。

(一) 七層の輪燈
此の燈は外にはな
く薬師の法と此の
つた七重にして七
々四十九燈なり。

(二) 延命法
此は小御法に此の
法は延命に三昧地
入るなり。

埵、金剛部中諸聖衆。 ○發願(十三)三世常住 普賢延命 金剛部中 諸大眷屬 ○禮佛 南無阿利耶、縛日羅目佉、三昧耶冑地薩怛縛、摩訶薩埵縛返 ○讚(十四)先四知次 唵縛日羅二羅細(十五)堅固勇(十六)摩訶燥契耶安樂の縛日羅(十七)合唵勢、摩訶唵勢(十八)壽命縛日羅(十九)合惹爾多、摩訶惹爾底、命縛日羅(二十)合毗喩、摩訶毗喩(二十一)不老(二十二)唵硃、曩謨率都帝 ○護摩(二十三)益(二十四)部主降(二十五)三世(二十六)諸尊(二十七)七尊 ○世天(二十八)執金剛(二十九)四天(三十)王(三十一)加持 ○壇場莊嚴 先づ御聽聞所の方に於て大壇を建て、大壇の左の邊に護摩壇を建つ。 近來は便宜に隨ひ或は右邊に之を建つ。次に十二天壇、次に聖天壇之を建つ、各々壇上の支分は常の大法の如し、但し大壇の上に經箱は之を安せず、又中央の火舎は之を用ゐず、大壇と護摩壇の間に(一)七層の輪燈を建て、四十九燈を燃す、或説には佛前と大壇の間に輪燈を建つ。云云 或説には、佛前と大壇との間に輪燈を建つ。」文

○(十三) 延命法 房中より佛前に至る作法常の如し

○壇前普禮 ○著座普禮 ○塗香 ○三密觀 ○淨三業 ○三部被甲 ○加持香水 ○加持供物(三)股
積里(四)枳里 ○覽字觀 ○觀佛 ○金剛起 ○普禮 ○表白 ○神分 ○祈願 ○五悔 ○發菩提 ○三昧耶 ○
發願(五)三世常住 延命菩薩 諸尊聖衆 ○五大願 ○普供養 ○三力 ○大金剛輪 ○地結 ○四方結

三形なり、延命の
延べんが爲の甲冑
に災難を除く
義なり、五股の
れ形なり、右の
耶形なり、右の
五古さ左の鈴を
す、即ち二臂を
十七尊を具する
り、召請内縛左
の指を立つるな

正念誦
ナ
ン
の
明

○道場觀如來 「樓閣の中に千葉の寶蓮花臺有り、上に月輪有り、輪の中に卍字有り變じて、甲冑形と成る、變じて延命菩薩と成る、身黄金色にして頂に寶冠を載き、右に五股を持して胸の前に當て、左に鈴を執り左の腰に當つ、相好威儀具足圓滿せり、量の聖衆前後に圍繞せり。」七處加持 ○大虛空藏 ○小金剛輪 ○送車輅 ○請車輅 ○召請 ○四明 ○拍掌 ○結界 降三世 ○虛空網 ○火院 ○大三昧耶 ○闍伽 ○花座 ○振鈴 ○理供 ○事供 ○讚 先四智 唵縛曰羅 世 羅細 堅固 摩訶燥弊耶、大安 樂者縛曰羅 二 喻勢、摩訶喻灑、壽 命縛曰羅 二 惹爾多、摩訶惹爾底 命 縛曰羅 二 毗喻摩訶毗耶、不老 唵砧 忿 曩謨率都 二 帝 ○普供養 ○三力 ○祈願 ○禮佛 南無阿利耶、縛曰羅謨迦 三摩耶薩怛縛 ○入我我入 ○本尊加持 ○金剛壽命加持甲冑密印 二手各々金剛拳に作つて、進力を以て右、左を押して相鉤して頂上に安じて、即ち壽命の眞言七返を誦せよ、眞言に曰く、唵縛曰羅、唵灑、娑婆訶 ○又印 二羽金剛拳にして、二風を舒べて相縈ひ繞らせ、天魔惡類を降伏して、最正覺を成せんが爲めの故に、此大誓の甲冑を被る、頸、胸、腰、肩腕、膝、脛、足に結んで、後に首頭を堅めよ。(朱)口傳に曰く、金剛界結 ○護身被甲の眞言 唵砧縛曰羅、忿 ○正念誦 眞言 ○本尊加持 前の ○字輪觀 五 ○本尊加持 前の

讀經 前の大
金剛輪の前に讀む
地蔵は彌陀の因位
由にて蓮華部に此の
なるも本流の習攝
第は南方寶菩薩の次
故に寶部とするな
り
は五色の寶幢の上
に寶珠あり寶幢の
の四親近の寶幢を
意得るなり

○佛眼印明 ○散念誦 佛眼。大日。本尊。降三世。執金剛 ○後供養 理供 ○闍伽 ○後鈴 ○讚 ○普供養 ○三力 ○祈願 ○禮佛 ○廻向 ○至心廻向 ○解界 ○撥遣 ○三部 ○被甲 ○禮佛 ○出堂 ○○地蔵菩薩法 ○種子 ○三昧耶形、寶幢 ○道場觀 「壇の上に蓮花臺有り、臺の上に訶字有り變じて、寶幢と成る。蓮花の上 寶幢變じて地蔵菩薩と成る、ウチ 内には菩薩の行を祕して外には聲聞の形を現し、福智の二嚴を以て莊嚴と爲し、恒沙の萬徳を以て眷屬と爲す、右の手は施無畏、左に寶珠を持す。」 ○根本印眞言 二手内縛して、二中直く立て、相著くること勿れ、唵、訶訶訶、尾三摩曳、娑縛賀 ○又印 二手内縛して、二小無名立て合はせ、二大並べ立てよ、歸命、訶訶訶、素多弩、娑縛訶 ○正念誦 唵訶訶尾三 ○散念誦 佛眼。大日。寶生。 利。大金。 ○勸請 六道能化地蔵尊 摩尼部中諸眷屬 ○發願 本尊聖者 地蔵菩薩 一字。 ○禮佛 曩謨 阿利耶 乞叉底矩奢、胃地薩怛縛、摩訶薩怛縛返 ○讚智 護摩

藏涌出同一體なり。

(一) 彌勒法 諸大祖師多く此の淨土に往生し玉ふ。

(三) 慈氏 慈心を以て衆生を化度し佛種を斷ぜざらしめんことを欲する故に慈氏といふ。

(二) 法界塔印 蓮花の上に五輪塔を置く義なり。胎藏の八葉の彌勒の相なり。而して胎藏の本師釋尊は入涅槃の故に塔婆を持するなり。

(一) 印 此の瓶の中に如來遺身の舍利ありと觀す。法輪を轉する義なり。(三) 初印 第一の印なり。

(四) 大勢至法 滅罪の爲に之を修す。苦薩部に屬す。(五) 未敷蓮花 右手に蓮花を持す。左手に指は花を風空に二指は花を開く勢なり。未敷蓮花は一切衆生の數を提心蓮を表す。

息災。増益等。事に随つて之を修す。但し未だ本説を見ず。○部主寶 諸尊七十

○密號 悲願金剛

二八〇

○彌勒法(押) 減罪に之を修す

房中より佛前に至る作法常の如し

- 壇前普禮 ○著座普禮 ○塗香 ○三密觀 ○淨三業 ○三部 ○被甲 ○加持香水 ○加持供物 ○覽字觀 ○觀佛 ○金剛起 ○普禮 ○表白 ○神分 ○祈願 ○五悔 ○發菩提 ○三昧耶 ○勸請 當來化主 慈氏尊 都率内院諸聖衆 ○發願 彌勒慈尊 都率天上 諸眷屬等
- 五大願 ○普供養 ○三力 ○四無量觀 ○大金剛輪 ○地結 ○四方結 ○金剛眼 ○召罪 ○摧罪 ○業障除 ○成菩提

- 道場觀 「樓閣の中に八葉の蓮花臺有り、臺の上に月輪有り、輪の中に阿字有り、字變じて率都婆と成る。率都婆變じて彌勒菩薩と成る、首に五如來の冠を戴き。左の手に蓮花を執り、花の上に於て、法界塔印を置き。右の手は説法の印に作り、結跏趺坐せり。」七處 加持
- 大虚空藏 ○小金剛輪 ○送車輅 ○請車輅 ○召請 大鈎 ○四明 ○拍掌 ○結界 不動 ○虚空網 ○

火院 ○大三昧耶 ○闕伽 ○花座 ○振鈴 ○理供 ○事供 ○讚 四智。本尊の讚は如意輪の讚に同じ。 ○普供養 ○三力

○祈願 ○禮佛、南無、梅怛黎耶、冒地薩怛縛、摩訶薩怛縛 三 ○入我我入 ○本尊加持 ○

印 二手合掌して、二風甲を屈め相ひ合せて、二大を以て之を押す 最勝印 眞言に曰く、

唵梅怛梨耶阿、娑縛訶 ○又印 胎藏 二手金剛合掌して先づ右を上にして、三度旋らせ。次に左を上にして三度旋らせ。眞言に曰く、曩莫三曼多沒駄南、摩訶瑜哦瑜祇尼、

瑜契濕縛里、欠若里計、娑縛訶 ○又印言 初印の如し 納芥糝滿多彌駄引 脯。一 遇襲

單耽耶、二 薩縛合薩怛縛二合 捨也、弩藥多、娑縛訶 ○正念誦 大悲三昧の呪即ち過 純單耽耶の呪なり ○本

尊加持 ○字輪觀 五 ○本尊加持 先大日。次に 散念誦 佛眼。大日。本尊。波羅蜜。 木尊次に佛眼。 不動。降三世。大金。一字。

○後供養 事供 ○闕伽 ○後鈴 ○讚 ○普供養 ○三力 ○祈願 ○禮佛 ○廻向 ○解界 ○撥遣 ○三

部 ○被甲 ○禮佛 ○出堂 ○護摩 益 ○部主 輪 ○本尊 ○諸尊 七尊

○被甲 ○禮佛 ○出堂 ○護摩 益 ○部主 輪 ○本尊 ○諸尊 七尊

○種子 卍 ○三昧耶形、未敷蓮花 ○道場觀 「樓閣の中に八葉の大蓮花あり、臺の上

上に月輪あり、輪の中に索字あり、字變じて未敷蓮花となる、蓮花變じて大勢至菩薩

上に月輪あり、輪の中に索字あり、字變じて未敷蓮花となる、蓮花變じて大勢至菩薩

と成る、肉色にして左の手に蓮花を持し、右の手胸に當て、地水火の三指を屈して赤蓮花に坐す、眷屬圍繞せり」○印 未敷蓮花印 ○真言 曩莫三曼多沒駄南、糝糝索、娑婆訶○發願本尊聖者蓮花部中得大勢至諸尊聖衆○護摩○部主、阿彌陀。

○○隨求法

○種子マ○三昧耶形、梵篋○道場觀「壇の上に紇哩字有り、轉じて赤蓮花座と成る、座の上に鉢羅字有り、變じて梵篋と成る、轉じて隨求明王菩薩と成る、色深黃にして八臂を具す、左第一の手に蓮花を持す、上に金轉有りて光炎あり、次の手には梵篋を持し、次の手には寶幢を持し、次の手には索を持す、右第一の手に五股金剛杵を持し、次の手には戟鉞ゲキハクを持し、次の手には寶劔ホウケンを持し、次の手には鉞斧ツツブコウを持す、衣服瓔珞相好圓滿せり、四攝八供等の菩薩、恭敬圍繞せり」

○印梵篋の印 真言に曰く、唵跋羅跋羅、三跋羅三跋羅、印捺哩インダリニヤ也、尾戌達頓ビシユダニ、吽引吽ウンイン引嚕嚕インロロ、左隸シヤレイ、娑縛サハフ二合ニ合賀引カイン 隨求陀羅尼八印師傳に曰く。此八印は本尊加持には之を用ゐず。振鈴の次に之を行すなり。○第一の印内五股 真言大隨求陀羅尼は別にあり ○第二の印、鉞斧。二手各々五指を舒べて、背を合はせ相着

けて十指組み合せよ。風輪の印の如し。但し二大指同じく右の頭指の側程にして組み合はすなり。 真言、唵サハバ薩縛サハバ但サハバ他サハバ引サハバ誦サハバ多サハバ、沒ボウ

引サイ帝ハハ、鉢羅ハハ二ハハ縛ハハ羅ハハ尾ハハ誦ハハ多ハハ婆ハハ曳ハハ、捨シヤ麼マ野ヤ、薩サ縛ハハ二ハハ合ニ合銘メ、婆ハハ誦ハハ縛ハハ底チ、薩サ縛ハハ播ハハ閉ヘ毗ヒ唵オン、二ニ娑サ縛ハハ二ハハ合ニ合底チ羅ラ、娑ハハ縛ハハ都ト。七十シチ母ボ頰ニ母ボ頰ニ八十ハチ尾ビ母ボ頰ニ、佐シヤ隸レイ佐シヤ隸レイ、婆ハハ野ヤ尾ビ誦ニ帝テイ、婆ハハ野ヤ賀カ羅ラ

拈ニ九ク胃イ地チ胃イ地チ八ハチ胃イ地チ十ジュウ胃イ地チ八ハチ胃イ地チ野ヤ、八十ハチ沒メ地チ里リ沒メ地チ里リ二ニ薩サ縛ハハ但チ他カ引キョウ誦ニ多タ、紇キ里リ二ニ乃ノ野ヤ、足ソク

瑟シ猷ユ二ニ合ニ合薩サ縛ハハ引イン、賀カ引イン八ハチ○第三の印、索、二手内縛して、二中圓に立て合せよ、真言 唵オン

引イン縛ハハ日ニチ羅ラ、二ニ合ニ合縛ハハ底チ、縛ハハ日ニチ羅ラ、二ニ合ニ合鉢ハチ羅ラ、二ニ合ニ合底チ瑟シ恥チ帝テイ、舜シユン弟テイ八十ハチ但チ他カ引キョウ誦ニ多タ、母ボ捺ナ羅ラ、

二ニ合ニ合地チ瑟シ吒チ二ニ合ニ合囊ニヤウ、地チ瑟シ恥チ二ニ合ニ合帝テイ、薩サ縛ハハ二ハハ合ニ合賀カ引イン八ハチ○第四の印、劔大惠刀 真言 唵オン 畝ホ頓ニ、

畝ホ頓ニ、八十ハチ畝ホ頓ニ縛ハハ隸レイ、阿ア鼻ヒ誦シ去キョ佐サ祝シユク給ニ、八十ハチ薩サ縛ハハ但チ他カ引キョウ誦ニ多タ、薩サ縛ハハ尾ビ爾ニ也ニ合鼻ヒ囉ラ爾ニ

引イン八ハチ摩マ訶カ縛ハハ日ニチ羅ラ、二ニ合ニ合迦キヤ縛ハハ佐サ母ボ上シヤウ捺ナ羅ラ、二ニ合ニ合母ボ捺ナ哩リ二ニ合ニ合帶テイ引イン八ハチ薩サ縛ハハ但チ他カ引キョウ誦ニ多タ、吃キ哩リ二ニ乃ノ

夜ヤ、地チ瑟シ恥チ二ニ合ニ合多タ、縛ハハ日ニチ隸レイ、二ニ合ニ合娑サ縛ハハ引イン、賀カ引イン九ク十ジュウ○第五の印 輪 二手外縛して二無

名指立て合はせ、二小指右を以て左を押して交へ立てよ。真言 唵オン阿ア蜜ミ哩リ二ニ多タ、縛ハハ隸レイ

一縛羅縛羅、二縛羅尾戌シユ弟テイ、吽ウン引イン吽ウン引イン頗ハ吒チ頗ハ吒チ、娑サ縛ハハ二ハハ合ニ合賀カ引イン○第六の印、三股叉

虛心合掌して、二大指を以て各々二小指の甲の上を押し、二頭二中二無各々立て合

はせ、指の隙を去けて三載又の如くせよ、真言 唵オン阿ア蜜ミ哩リ二ニ多タ、尾ビ盧リ引イン枳キ頓ニ、一イ葉ヤク

婆僧、囉乞灑合拈、阿引羯哩灑合拈、吽引吽引頗吒頗吒、娑縛合賀引○第七の印寶
 二手外縛し、二頭寶形にし、二大並べ立てよ、眞言 唵尾麼黎、惹也縛黎、一
 阿密哩合帝、吽引吽引吽引吽、三引 頗吒頗吒頗吒頗吒、娑縛合賀引○第八の印、篋の印
 眞言 唵跋羅跋羅、三跋羅三跋羅、二印捺哩合也、三 尾戌達頓、吽引吽、引嚕嚕
 左隸、娑縛合賀引此 第八梵篋の印明は、本尊加持にのみ之を用ひ、餘は略す。
 ○八印略眞言、小野の説 ○第一 唵縛日羅、娑縛賀(御本押)金剛 ○第二、唵縛羅瑟、娑
 縛賀 鉞斧 ○第三、唵波奢、娑縛賀 索 ○第四、唵佉羅哦、娑縛賀 劔
 ○第五、唵斫羯羅、娑縛賀 輪 ○第六唵底里瑟羅、娑縛賀 三股叉 ○第七
 唵眞陀摩尼、娑縛賀 如意寶 ○第八 唵摩訶尾爾也、陀羅尼 總持以上三形
 ○正念誦 前の第八、跋羅跋羅の呪之を用ゆ ○散念誦 佛眼。大日。本尊。八種。 ○伴
 僧 ○御加持は之無し ○勸請 本尊聖者 大隨求。 ○發願 本尊聖者 隨求菩薩 ○禮佛
 南無摩訶鉢羅底薩洛 ○讚四 ○護摩息 ○部主 勝無能 ○諸尊段 三十七尊、或は滅
 惡趣之を請供す。

國譯薄雙紙 普通諸尊法第一終

尊は不動法此の
 四のありに所變に
 大日所變一には
 金剛薩埵の所
 變、三には釋迦
 變、四には除蓋障
 の所變なり、その
 中、大日所變の不動
 尊の法は調伏及
 息災に修するな
 り。大法に付て行ずる
 大法に付て行ずる
 別行といふ。一説
 には、清淨の石を
 ねたるをいふ。即
 ち淨菩提心堅固不
 動にして傾動すべ
 からざる義を表
 す。利劔此れ智
 慧の利劔なり。引
 手四攝の方便に
 を以て善提心に引
 入するなり。

國譯薄雙紙 普通諸尊法

普通諸尊法第二 ○五大尊 ○愛染明王 ○烏瑟沙摩 ○金剛童子 以上諸明王○
 北斗 ○屬星 ○焰魔天 ○十二天 ○聖天 ○神供 ○施餓鬼 ○毗沙門 ○水天
 ○地天 ○吉祥天 以上天等 以上十九尊
 薄雙紙 普通諸
 ○不動法 息災、調伏、大法、別行、房中より佛前に至る作法常の如し
 ○壇前普禮 ○著座普禮 ○塗香 ○三密觀 ○淨三業 ○三部 ○被甲 ○加持香水 ○加持供物 ○
 覽字觀 ○觀佛 ○金剛起 ○普禮 ○表白 ○神分 ○祈願 ○五悔 ○發菩提 ○三昧耶 ○勸請
 大聖不動威怒王、四大八大諸忿怒、○發願 本尊聖者 不動明王 諸大忿怒 ○五大願 ○普供養 ○三力
 ○大金剛輪 ○地結 ○四方結、
 ○道場觀 「壇の上に惡字有り變じて五峯八柱の寶樓閣と成る、其の中に殊妙の壇有り、
 壇の上に吽字有り變じて(三)瑟瑟の座と成る、座の上に(四)利劔と成る、

(一) 四智 四段の作法あり。

(二) 入我我入 十八道の如し。

(三) 本尊加持 先づ大日加持智拳印四處加持、グドパンの明なり。

(四) 諸尊段 調伏の時、五大尊、息災の時、三十七尊なり。

利劔變じて大聖不動明王と成る、右の手には智恵の利劔を持し、左の手には方便の絹索を執り、大忿怒の形を現して火生三昧に入る、儀形一之を觀す可し、四大八大諸大忿怒前後に圍繞せり、^(七)加持 ○大虚空藏 ○小金剛輪 ○送車輅 ○請車輅 ○召請 ○四明 ○拍掌 ○結界^(三) ○虚空網 ○火院 ○大三昧耶 ○闕伽 ○花座 ○振鈴 ○理供 ○事供 ○讚 ^(二)四智 ○普供養 ○三力 ○祈願 ○禮佛 南無、阿利耶阿遮羅、曩駄微地也、囉惹、返 縛曰羅、遜婆爾、縛曰羅、軍荼利、縛曰羅焰曼德迦、縛曰羅、藥叉、

○入我我入 ○本尊加持 先大日 根本印の印内縛して、二頭指を立て合はせ、二大指を以て二無名指の甲を押せ、火界呪 曩謨薩縛但陀引 譚帝毗藥、二薩縛目契毗藥、二薩縛陀、引但羅引 吒、音替摩訶引 囉灑拏、欠佐引 囉佐引 囉、薩縛尾觀南、二合 叫但羅合 吒、音憾引 輪引 ○劔印 常慈救呪 常 ○正念誦 慈 ○本尊加持 常 ○字輪觀 五大 ○本尊加持 如 ○佛眼印明 ○散念誦 佛眼。胎大日。本尊二種。 ○後供養 ○闕伽 ○後鈴 ○讚 ○普供養 ○三力 ○祈願 ○禮佛 ○廻向 ○至心廻向 ○解界 ○撥遣 ○三部 ○被甲 ○禮佛 ○出堂 ○護摩 息災、 ○部主降 三 ○本尊段自加持、召請、撥遣、諸供物、慈救 加持物 一字 ○諸尊段 或調伏 七尊 ○御加持 慈救

○降三世 ^(二)調伏

○種子 三昧耶形、五鈷 ○尊形、^(八)四臂

○道場觀 「壇の上に月輪有り、月輪の中に卍字有り五鈷杵と成る、變じて降三世尊と成る、八臂にして、^(三)四面なり、咲怒恐怖の形にして四牙露し出せり、^(三)二手に印を結ぶ、右の第二は鈴、第三は箭、第四は利劔なり、左の第二は三戟、第三は弓、第四は索なり、^(四)右の足に自在欲王を踏み、左の足は彼の王妃を踐む、遍身に火光を流す、身色玄青なり、^(五)眷屬圍繞せり、 ○印 二手忿怒拳にして、檀惠背けて鈎結せよ、進力背け豎てよ、眞言を誦して左に三たび轉じて避除と成し、右に三たび轉じて結界と成す、 ○眞言に曰く 唵 蘇 蘇 婆 婆 蘇 婆 蘇 吽、^(短聲)下 唵 蘇 哩 合 訶 拏 合 藥 哩 合 訶 拏 合 藥 哩 合 訶 拏、^(長聲)波 耶 吽、^(長聲)引 阿 引 曩 野 解、^(長聲)婆 誝 梵、^(長聲)縛 曰 羅 合 吽 泮 吒、^(長聲)音 「觀想せよ、^(三)三毒の煩惱を降伏して、^(七)菩提心を成就す」 ○又外五股印 ^(加持)四處、小 ○勸請 降伏三世大明王、四大八大諸忿怒、 ○發願 ^(本尊聖者)四大八大 ○結界 ○禮佛 曩謨、縛曰羅、蘇婆爾 ○正念誦 呪大 ○字輪觀 大五 ○散念誦 佛眼。大日。不動。本尊。軍荼利、

(一) 調伏 此れ五壇の護摩の時なり (二) 四面 四智を表す (三) 二手 第一印は是れ金剛藥叉是れ是れ極深なる不動尊の故に第三の手は右に持し、第四の手は左に持し、形は愛染の三摩耶なり、^(四)右の足に自在欲王を踏み、左の足は彼の王妃を踐む、遍身に火光を流す、身色玄青なり、^(五)眷屬圍繞せり、 ○印 二手忿怒拳にして、檀惠背けて鈎結せよ、進力背け豎てよ、眞言を誦して左に三たび轉じて避除と成し、右に三たび轉じて結界と成す、 ○眞言に曰く 唵 蘇 蘇 婆 婆 蘇 婆 蘇 吽、^(短聲)下 唵 蘇 哩 合 訶 拏 合 藥 哩 合 訶 拏 合 藥 哩 合 訶 拏、^(長聲)波 耶 吽、^(長聲)引 阿 引 曩 野 解、^(長聲)婆 誝 梵、^(長聲)縛 曰 羅 合 吽 泮 吒、^(長聲)音 「觀想せよ、^(三)三毒の煩惱を降伏して、^(七)菩提心を成就す」 ○又外五股印 ^(加持)四處、小 ○勸請 降伏三世大明王、四大八大諸忿怒、 ○發願 ^(本尊聖者)四大八大 ○結界 ○禮佛 曩謨、縛曰羅、蘇婆爾 ○正念誦 呪大 ○字輪觀 大五 ○散念誦 佛眼。大日。不動。本尊。軍荼利、

德なり。

〇二手 寶棒の印なり。

此の尊は出世の軍を伏し此の餘に世間の願望を成就す此の法は祖師又は佛菩薩の崇りに之を修す。〇印 二中立合する本尊所持の寶棒と意得るなり即ち寶棒の印さなり又ハ鋼の印さなり

〇觀念せよ 是れ凡夫の第六識の惑の所知障を摧破する義なり尤も妙觀察智の教令輪なる故に之を斷す。

通を成ずることを表す右第一の手には劔を持し、第二の手には金剛杵を持す、左第一の手には三戟叉を持し、第二の手には輪を持す、〇二手に印を結ぶ、身色青黒にして大智火聚の中に住す、其の焰燃諸の衆生の業煩惱を焚燒す、此の尊は是れ無量壽如來の教令輪身なり、大悲門より出でて無明妄想の諸の衆生の爲めに、極惡瞋怒の身を現し、〇出世の魔軍を伏し世間の怨敵を滅す、十地の菩薩教令に隨はざれば尙ほ能く銷融す、況んや餘の諸の天龍八部障難を作す者の、一時に殄滅して餘有ること無き者なり、諸相悉く圓滿して無量忿怒の使者、前後に圍繞せり、〇印 根本 二手内縛して、二中指を立て合はせ、 〇眞言 大呪を用ひ、或三 唵惡吽 〇心印 内三股内縛して、二中指を立て合はせ二頭指を屈して二中指の背に立てて著ること勿れ、二大指を並べ立て二中指の中節を押す。 〇心咒 唵紇哩、二合ビキリ多、引娜曩吽、薩縛設咄論、合曩捨野、塞擔、合婆野、塞擔二婆野、娑頗合吒、音娑頗合吒、音娑縛二合賀、引「〇觀念せよ、所知障を摧伏して、智慧を増長す。 〇心中心印の前如し、但し二頭指を直く立てて屈せざらんなり、惡夢の時此印を用ひ、云云 〇唵瑟置哩、三合ハヤラハム、吽欠、娑縛二合賀引 以上三種印言 〇勸請 焰曼特迦大明王、四大八大諸忿怒 〇發願 本尊聖者 焰曼德迦四大

〇二 結界 不動或は自結界を用ひ、

〇三 布字觀 入我我入の時觀を先づ布字觀を先づ入我入觀に入る。

〇四 金剛藥叉法 此の尊北方羯磨部の所作令輪にて成出所智一切義成就の智なり、此尊の夜叉と云ふは極惡の尊は鳥惡沙摩と一體とする時あり。

〇五 羯磨輪 摧破の義なり、

〇六 五眼 面上の五眼は金剛界五智を表す。

〇七 馬王の髻 馬の鬣髪つ今も此の尊の髻も現する相なり忿怒を現する相なり印 此れ摩羯魚の首を表す、縛小は牙なり、内縛

諸大忿怒 〇二 結界 〇禮佛 南無、縛日羅、焰曼德迦。 〇正念誦心中 〇字輪 觀大五 〇散念誦佛眼、大日、不動、本尊、降三世、之を頂上に唵、六頭を心上に惡、六臂を腰に吽、六足を成す 〇護摩調伏 〇部主動 〇本尊段、用ひ頂上に唵、成し、腰に吽、成す 〇諸尊段 五大尊、或

自加持 根本印、召請、撥遣呪、諸供物呪、心中 加持物呪、上 〇諸尊段 三十七尊

〇〇三 金剛藥叉法 調伏 〇種子 〇三昧耶形 〇羯磨輪 〇尊形 三面 〇道場觀 「壇の中に阿字有り變じて

蓮花座と成る、座の上に吽字有り變じて大羯磨輪と成る、輪變じて金剛藥叉明王と成る、三面六臂にして衆生の器械を持す、五眼忿怒の形なり、三首に馬王の髻あり、珠寶を以て遍く遍身を嚴飾せり、火焰燃劫火の如し、堅固精進して眞言を持念し、誠を至して禮敬し供養せん衆生には、我れ時に身を現して加持し憐愍せん、亦惡人惡魔の惱苦を除滅して、世間出世の悉地を成就せしめん、云云 〇七 印 二手内縛して、二小指を立て相ひ鈎して著ること勿れ、二大指を並べ立て、二頭指を屈して二大指の上に置き。 〇眞言 唵摩訶夜乞叉、縛日羅薩怛縛、弱吽釁斛、鉢羅吠奢吽 〇又

の二中大二名は齒
なり、二大頭
間を眼さす
り、又印種
り、牙菩薩の
り、同體なる
り、五塵の煩
此尊は前五
て成所作智
五塵を摧破
嚴大佛事を
義なり。

法は自門に別行す
五種の悉地を成ず
る中、別して敬愛
を至要とす故
に座も赤蓮自身
赤色なり蓮花部
を主にし蓮花部
す。には部母と爲

印 二手内縛して、二小指直く立てて著ること勿れ、二頭指少しき鉤して牙の如くし
て属ること莫れ。 ○眞言 唵吒枳吽娑破吒、合鉢羅合吠捨耶、吽泮吒。引 ○又
印 二手各々金剛拳にして、二頭二小各々立てて、鉤して牙の如くして口の兩邊に當
てよ。 ○眞言 唵縛日羅、夜乞叉吽 「觀念せよ、二五塵の煩惱を摧破して、精
進を増長する義なり。」 ○勸請 金剛藥又大明王、
四大八大諸忿怒 ○發願 本尊聖者 金剛藥又
四大八大 諸大忿怒
○結界 ○禮佛 唵縛日羅夜乞叉 ○正念誦大
本尊、降三世、軍荼利 ○伴僧呪 ○御加持大
大威德、大金、一字 ○護摩調伏、息
自加持印 召請、撥遣、同諸供物呪加持物、上 ○諸尊 五大尊或
三十七尊

○愛染王法 房中より佛前に至る作法常の如し
○壇前普禮 ○著座普禮 ○塗香 ○三密 ○淨三業 ○三部 ○被甲 ○加持香水 ○加持供物 枳里
○覽字觀 ○觀佛 ○金剛起 ○普禮 ○表白 ○神分 ○祈願 ○五悔 ○發菩提 ○三昧耶 ○勸請
金剛愛染大明王、三十七尊諸聖衆。 發願 本尊聖者 愛染明王
三十七尊 諸尊聖衆 五大願 ○普供養 ○三方
○大金剛輪 ○地結 ○四方結

○五峰八柱 胎藏
界の八業にして胎
部不二の樓閣な

○本尊加持 此右
に左を押す、名
の印は法身印と
ふ、又は金の剛
けるは金の剛拳
するは金の剛拳
内に相交する蓮
花部の義なり蓮
染は金の剛部蓮
部兼合は即ち獨
二中立合は即ち
股淨外合は即ち
の三障を除く義
人寛即ち天寛地
の三障を除く義
痴なり。

○道場觀 如來 「觀想せよ、壇上に惡字有り變じて、五峯八柱の寶樓閣と成る、其の中
に殊妙の壇有り、壇の上に紇哩字有り變じて赤色の蓮花と成る、蓮花の上に阿字有り
變じて熾盛の日輪と成る、日輪の中に象字有り變じて五股金剛杵と成る、杵變じて金
剛愛染明王と成る、儀形常の如し。」
持如常 ○大虛空藏 ○小金剛輪 ○送車輅 ○請車
輅 ○召請 大鈎 ○四明 ○拍掌 ○結界 降三世 ○虛空網 ○火院 ○大三昧耶 ○闍伽 ○花座 ○振鈴
○理供 ○事供 ○讚 先四 次 愛菩薩の讚 縛日羅 合 選引 誑 摩訶燥引 企也、
縛引 拏 也 縛商迦羅 二 合 摩引 羅迦引 摩 敵 摩訶縛日羅 二 縛日羅 左 引 波、
也 曩謨娑都帝 ○
普供養 ○三方 ○祈願 ○禮佛 南謨縛日羅、羅誑、胃地薩恒縛、摩訶薩恒縛 ○入我我入
定 「觀想せよ、本尊の三密と我が三密と、平等平等にして無二無別なり。」 ○本尊加
持 本印 二手金剛拳にして、内に相ひ又へて縛を爲し、忍願を直く立てて針の如くせよ
相ひ交へて即ち染を成す、是を根本の印と名く、心願喉頂を印
瑟泥合沙、縛日羅 合 薩恒縛、弱引吽引釁斛 ○次 外五股印 復根本の印を説く、二手
金剛縛にして、忍願堅て相ひ合はせて、二風鉤形の如し、檀惠と禪智と堅て合せて五
峯の如くす。 ○眞言に曰く 吽吒引枳吽引惹 聲 ○次 内三股印 眞言に曰く 吽

悉地シツヂ ○正念誦大 ○本尊加持染の印、外五股印、内五股印
○字輪觀



○本尊加持先の如し、但し先大日、次本尊、次佛眼、三種、降三世、大金剛輪、一字 ○散念誦佛眼、大日、本尊
○後供養事供 ○後鈴 ○讚 ○普供
養 ○三力 ○祈願 ○禮佛 ○廻向 ○至心廻向 ○解界
○撥遣 ○三部 ○被甲 ○禮佛 ○出堂
○烏菟沙摩法生

○種子三 ○三昧耶形、獨股 ○尊形種

王と成る、大忿怒の形なり、目赤色にして通身青黑色なり、舉體に焰起ほのほつて四臂あり右の上の手には劔を執り、下の手には絹索を執る、左の上には打車棒、下には三股叉なり、器仗の上に並に焰起て、虎皮を揮と爲し蝮を瓔珞と爲し、夜叉及び阿修羅衆、訶利帝母愛子等を以て侍従と爲す。 ○印獨股 二手内縛して、二大二小立て合

○鳥瑟沙摩 此尊の名號多く不淨
○金剛と云ふも又は淨
○穢迹金剛とも受觸
○殊に産生の生屋
○穢れ多き故に修障
○産穢の之を修障
○拂ふ
○打車棒 牛遣
○持つ常の木 棒
○虎皮云云 不
○淨煩悩を莊嚴とな
○不動の所變なり
○訶利帝 此尊
○帝母子に愛する故に
○なり

○又印 此の印
○又印は穢所へ行
○は又穢蓮花に
○は又穢蓮花に
○は又穢蓮花に
○は又穢蓮花に

○結界 不動なり

○金剛童子 此
○法は安産に修す
○此の法は空禪の
○軌弘法大師御請來
○の青童子を用ゆ

はせ獨股形の如し、二大指端しを挂へ心の前に向へよ。真言曰根本 曩莫三曼多縛曰
羅赦、唵、縛曰羅引、俱嚕合、麼訶麼羅、訶曩娜訶、跛者、駄尾望合、娑野、烏樞瑟
摩、二俱嚕合、駄吽吽、牛娑縛引、賀引 ○又印内三股の印、四處加 真言解穢 唵瑟哩摩
哩、摩哩摩哩、瑟瑟哩、娑縛訶 ○又印 二手蓮花拳に作り、左の拳を以て、
心に安き、右の拳を以て五處を印せよ、各々真言一返を誦せよ。真言曰 唵引俱嚕合、
曩吽引惹人此の印言は、本尊加持に之を用 ○勸請 穢跡金剛大明王、金剛部中諸忿怒。
○發願 本尊聖者 不淨金剛 ○結界 ○禮佛 ○南無、烏瑟沙摩、毘地野囉惹 ○
正念誦解穢 ○字輪觀五 ○散念誦佛眼、大日、不動、本 ○伴僧 ○御加持 ○護
摩 ○部主不 ○本尊段、自加持、召請、撥遣、諸供物の呪、加持物の呪、○諸尊段五大
或三十
七尊

○金剛童子法所望

○種子三 ○三昧耶形、三鉢 ○尊形黃童子

○道場觀「壇上に鍔字有り大海と成る、海の中に寶山有り、山の上に吽字有り變じて

(一) 八幅の金輪
星宿の物體の時
金輪は釋迦金輪の
輪の毛孔より出生
する故に能生の尊
なれば上首となす
ことなり
(二) 三十二相
迦金輪の故に三十
二相云ふ

(三) 結界 星宿は
胎藏蓮華部に之れ
あり故に馬頭を用
ふ
(四) 花座 中尊金
輪の座なり、荷葉
坐は諸星の坐なり
(五) 蠟燭 火を付
くるに鳥口といふ
もの明を以て各の星
ら付くるなり行者自
(六) 禮佛 漢音に
讀むなり

壇の上に紇哩字有り寶蓮花臺と成る、臺の上に阿字有り淨月輪と成る、上に多字有り八幅の金輪と成る、金輪變じて金輪佛頂と成る、身黃金色にして法界定印に住す、印の上に(一)八幅の金輪あり、(二)三十二相八十隨好具足し莊嚴せり、其の後邊の左右に七の荷葉座有り、座の上に各々で字有り星形と成る、星形變じて北斗七星と成る、金輪の前及び四方四隅に九の荷葉座有り、座の上に各々咩字有り星形と成る變じて九曜と成る、第二院に十二の荷葉座有り、座の上に各々咩字有り星形と成る、星形變じて十二宮と成る、第三の院に二十八の荷葉座有り、座の上に各々咩字有り星形と成る、變じて二十八宿と成る、是の如くの無量の星宿各々妙衣を身に纏ひ形貌巍然として、無量の眷屬前後に圍繞す

○大虛空藏○小金剛輪○送車輅○請車輅○大鈎召○四明○拍掌○結界不動○虛空網○火院○大三昧耶○闍伽○花座荷葉座なり、右の手拳に作り腰に安す、左五指を申べて掌を仰けて肩の上に擧げよ眞言に曰く 歸命、阿 ○次に五 蠟燭に火を付け各々星の明を誦せよ○五供印明○現供○讚龍八部 ○普供養○三方○祈願○禮佛「南無一字頂輪王 南無北斗七星 南無七曜九執十二宮神 南無二十八宿諸宿曜等 南無金剛界、 南無大悲胎藏界、 〇次に本尊加持

(一) 頂輪王云云
此の印八幅の輪の
なり、二頭指の印
は日金輪釋迦の印
輪に通ず眞言は
釋迦金輪に局るな
り
(二) 妙見 此の星
は七曜の外にして
尊星王と名く、武
曲星の脇に在る星
なり
(三) 召北斗印言
二無名指の甲を二
大に押し來去三
度す
(四) 北斗 是れ北
斗の空に列ゆる星
なり
(五) 七曜云云 七
曜は九曜の中の七
曜を計都の二
星を加へて九曜と
云ふ
(六) 相又 相並ぶ
なり
(七) 當年星 是れ
年々に替るなり
(八) 本命宿 是れ
生れ日の宿なり

○先づ大日印言智拳印 羯磨呪 ○次に(一)頂輪王印言 内縛して、二中指直く堅て、劔形にせよ、二頭指平に屈して二大指の甲を挂へ押せ○眞言 曩慕三滿多、那羅那羅跋左羅 唵 ○(二)妙見印言施無畏 唵素底里瑟駄、娑縛訶 ○(三)召北斗印言 虛心合掌して二大指を以て二無名の甲を捻して、二中二小蓮葉の如くして、二頭指小さく開き屈して來去せよ。曩莫、三曼多、那羅曩曠醯積、頗伊、賀伊、那伊、迦伊、羅伊、謨羅多羅、迦羅合、娑婆合賀引 ○(四)北斗惣印言 二手合掌して、十指相著けて二風二空極めて之を相開け。口傳に有り 唵颯多、面曩野、伴惹密惹野、染普他摩、娑縛合引曩羅訖山、二 娑縛都、娑縛賀 ○(五)七曜九執十二宮惣印言 定惠團にして端合せて、二空退け堅て合せて心に當てよ。 曩莫、三曼茶沒馱南、藥羅合醯濕縛里合野、鉢羅合鉢多儒低羅摩耶、娑縛合 ○二十八宿惣印言 虛心合掌して、二火外に(六)相又へて、二空も亦相又へよ、 曩莫、三曼茶沒馱南、諾乞灑合怛羅、涅蘇那爾曳、娑縛賀 ○本命星印言 ○(七)當年星印言 ○本命曜印言 ○本命宮印言 ○(八)本命宿印言 ○金剛吉祥成就一切明、二羽金剛掌、檀惠を以て内に相鉤して、戒方雙へ屈して掌に入れ、忍願相合せて峯の如くす、進力を屈して各々忍願の上節を捻す、禪智を以て

(一)破諸宿空風
獅子口印も又
獅子口印も又
獅子口印も又
獅子口印も又
獅子口印も又
獅子口印も又
獅子口印も又
獅子口印も又
獅子口印も又
獅子口印も又

は曰く、八葉の印を以て八星の惣印と爲す七星に妙見 唵サタジナ多而曩野、伴惹密惹野、染ヒシ 普他摩、娑縛合弭曩、羅訖山合婆縛都、娑縛合二 詞 ○七曜九執十二宮惣印言 定 惠團にして、端を合せて二空退け堅て合せて心に當てよ、曩謨三曼多沒馱南、藥羅ニ 醴濕縛里合野、鉢羅合鉢多儒低羅摩耶、娑縛合二 詞 ○二十八宿惣印言 虛心合掌し て、二火外に相又へて、二空も亦相又へよ、熾盛光の軌に曰く、空火交へて手の背に 著けよ」意を 曩謨三曼多沒馱南、ナ 諸乞灑合但羅涅里蘇那爾曳、娑縛賀 ○當年星 印言○本命星印言○本命曜印言○本命宮印言○本命宿印言○金剛吉祥印言 二羽金剛 合掌して、檀惠を以て内に相鉤して、戒方雙へ屈して掌に入れ、忍願相合せて峯の如 くす、進力を屈め各々忍願の上節を捻す、禪智を以て各々忍願の初交を捻せよ。 唵 縛曰羅室利、摩訶室利、阿彌底也室利、素摩室利、央譚羅迦室利、沒陀室利、沒羅賀 娑跋底室利、戌羯羅室利、舍爾始者始制帝室利、摩訶三摩曳室利、娑縛詞 ○妙吉 祥○破諸宿曜印言 内縛して、指節を痛めて、並へ逼め二空を堅てよ、是を破七曜一 切不祥の印と名づく。 唵薩縛但羅、三摩曳、室利曳、娑縛賀 ○佛眼印言常の ○念誦 佛眼。大日。金輪。八字文殊。妙見。召北斗。北斗惣呪。七曜惣呪。二十八宿惣呪。當 ○法施心 年星。本命星。本命曜。本命宮。本命宿。金剛吉祥。破諸宿曜。炎冤天。大金剛輪一字

(二)後供養
此に擬養
此に擬養
此に擬養
此に擬養
此に擬養
此に擬養
此に擬養
此に擬養
此に擬養
此に擬養

七〇(一)後供養理供 ○讚四智。天 ○普供養 ○三力 ○祈願 ○禮佛 ○廻向 ○至心延向 ○解界 ○撥遣右の手彈 ○三部 ○被甲 ○普禮 ○出堂 師曰く、撥遣以前に供物を焼く一文曰く、 法施の音を聞いて承仕來つて之を焼く、 ○炎魔天供師説に曰く亥の刻を ○先づ供具を辨備せよ ○壇前普禮 ○著坐普禮 ○塗香 ○三密 ○淨三業 ○三部 ○被甲 ○加 持香水小三股印 ○加持供物同 ○覽字觀 ○觀佛 ○金剛起 ○普禮 ○表白 ○神分 ○祈願 ○五 悔 ○發菩提 ○三昧耶 ○發願 本尊界會炎冤法王。大山府君。 ○五大願 ○普供養 ○三力 ○大金剛 輪 ○地結 ○四方結 ○金剛眼 ○道場觀如來 一壇の上に惡字有り、光明を放つて遍く大地を照して瑠璃の寶地と成す 其の上に亦惡字有り宮殿と成る、七寶を以て莊嚴して幡蓋寶樹周匝嚴飾せり、此殿の 四方に四門開通せり、門毎に皆階道有り、殿の内に壇場有り、其上にニ字有り變じて 檀茶の印と成る、印變じて焰魔法王と成る肉色にして人頭幢持し、右の手は與願 の印にして水牛に乗る、左右前後に后妃姪女有り。太山府君五道の冥官等の眷屬圍繞 せり、「此觀を作し已て穆欠の眞言を誦して七處を加持せり。 ○大虛空藏 ○小金剛輪

(一) 獻座 水牛は
本尊の坐なり、荷
葉は眷屬の坐な
り、印明別に結
するにあらす
印明は荷葉坐の印
言なり、心念に觀
するのみ。

(二) 太山府君 昆
沙門の化身なり。
(三) 五道大神 常
の燭燿なり。

○送車輅○請車輅○大鉤召但し眞言の末に炎摩耶、霹靂四の句を加ふ○入佛三昧耶○四明○拍掌○結界不○虚空
網○火院○大三昧耶○闕伽○獻座 但し二意有り一には水、二には荷葉座なり。○次に蠟燭に火を付く、各々
を誦すべし○五供養印明○現供○讚四智。或天龍八部。○禮佛四攝の次に南無、焰魔耶、提婆囉惹
○本尊加持 ○先大日印言智拳印。羯磨の呪 ○次に焰魔王印檀茶幢の印 虛心合掌して、二地二
風掌に入れて背を相合せて、空を以て風を押す、明に曰く、曩莫三曼多沒駄南、引
吠無背及縛縛多野、娑縛訶 ○又眞言前印を 唵焰魔耶、娑縛訶 ○次に後の印
印明に曰く、 歸命、沒里合底野合吠、娑縛訶 ○次に妃の印 惠の手、五輪を垂
れて健吒の相なり、鈴の印に同じ、左腰に安す、明に曰く、 歸命、摩哩但野吠、娑
縛訶 ○次に太山府君の印印明に曰く、 歸命、質但羅ニク、矩跋多合野、娑縛訶
○次に五道大神印明に曰く、 唵焰魔羅合烏揭羅鼻利耶、阿揭車、娑縛訶賀 ○
次に司命印明に曰く、伺命伺命、多都多都、唵多本尼耶、娑婆訶 ○次に司録印明
に曰く、已者已者毗迦良、娑縛訶 ○次に努吉尼、左掌を舒べて面門に合はせて舌
を出して掌に附く、人の血を食する勢の如し、明に曰く、 歸命、頤別訶、娑縛訶
○次に遮文茶印 定の手を仰て掬に作して胸の上に當て、想へ、鬪體を受るの形の如

(一) 諸神印明 此
れ諸鬼神の印明
なり、諸鬼神の印
明に結するに時
は、此の印を結す
るに時、諸鬼神の
印明を結するに時
なり。

しと、惠の拳を腰に安す、歸命、護嚕護嚕左門怒、娑縛訶 ○次に成就仙印明に曰
く、 歸命、悉駄尾爾也、陀利南、娑縛訶 ○次に毗那夜迦 二小二無指を以て鉤し
て内に向ふ、中指を以て立て、相柱ふ、二風を以て各々中指に附く、二大を以て近く
頭指の側に附け、五處を加持す、明に曰く、 唵摩訶譚拏、波多曳、娑縛訶 ○次に
諸神印明 右の手胎拳にして、風の頭しを舒べて少しく屈め之を召く、明に曰く、
唵嚕迦嚕迦、娑縛訶 ○次に佛眼印明常の ○散念誦佛眼。大日。不動。本尊二種。諸眷
大金。 ○後供養事供。四智天龍。 ○普供養 ○三力 ○小祈願 ○禮佛 ○廻向 ○至心廻向 ○解
界 ○撥遣右の手彈 ○三部 ○被甲 ○普禮 ○出堂(本次第には供壇の圖有り略)
○石山炎魔王供次第に曰く
先づ供物を辨備せよ、所謂五穀の粥なり、堅く調ふるを以て吉となす。應に香花水を加ふべし。但し蘇密を粥に加入す。又傍に菓子を加ふべし。壇上
に壇敷並に散花、例の尊像を南に向けよ、其の壇は四肘若は三肘、處の便宜に又闕伽
前を儲けて、交飯羹菓子燈明各々二杯壇の一方に居へ、而して彼の粥の上に蠟燭を挿
む、位に随つて次第を分ち居るなり、其次第は圖に在り」文
太山炎魔天の子にして遮文茶役神
即ち深砂神なり

十二天供養次第
法は御修法の大鏡
に就て國土に修す
五穀成就に修す
十二天の内證に
はすんば五穀豊饒
にあらす
みを出さず
と云ふ

四臂天等
主の時四臂天等
は二時四臂天等
は二時四臂天等
天等徳圓満の時
の二臂は金剛上
の印は是れ天祥
崇り止むるなり
事不尊に剛薬な
是動尊に剛薬な
り三昧に入るな

十二天供養次第

○壇前普禮○辨供○著座普禮○塗香○三密○淨三業○三部○被甲○加持香水○加持供物○覽字觀○淨地○觀佛○金剛起○普禮○表白○祈願○五悔○發願○五大願○普供養○三力○大金剛輪○地結○四方結 ○道場觀如來「寶宮殿有り中に曼荼羅有り、中央に瑟瑟の座有り、座の上に紇哩字有り蓮花と成る、上に憾字有り利劍と成る、變じて四臂不動尊の羯磨身と成る、四方四角、及び内の四隅に阿字有り荷葉座と成る、其數十二なり、其の上に伊舍那等の十二天安座せり、各々天衣を身に纏ひ無量の眷屬之を圍繞す。」

○大虚空藏○小金剛輪○送車輪○請車輪○大鈎召○四明○拍掌○入佛三昧耶○不動結界刀印 ○虚空網○火院○大三昧耶○闍伽○花座荷葉座なり。此の時蠟燭を指す。 ○五供印明 ○現供但し燈次に蠟燭を供すべし。供の事先づ右の手を小三股の印に作り之を加持すること三度許り、阿耨多羅三藐三菩提を以て之を加持するなり。飲食の印を結て之を供す。正しく蠟燭をば之を擧げざるなり。 ○次に四智の讚諸天の讚。私に曰く天龍八部を用ゆべきか。 ○普供養 ○三力 ○禮佛三十七尊の次に不動十二天。之を禮す。 ○次に不動印明 ○次に十二天印命伊舍利より、乃至月天次の如く之を用ゆ。 ○次に念誦 法施佛眼。大日。不動。十二天。法施。大金。一字。 ○次に五供 ○現供 ○普

聖天初之
れあれども法花の
法是の法は未
灌頂の法は未
行せしめずには
供は各別なり。浴
時の観念なり。

供養 ○三力 ○祈願 ○禮佛 ○廻向 ○至心廻向 ○解界 ○撥遣不動天等 ○三部 ○被甲 ○禮佛 ○出堂 ○十二天印明

△東北方自在天左三載の印(朱)裏に曰く、手の手拳に作り。頭中大の三指載の如し。此朱注御本に無し。 曩莫三曼多勃駄南、唵伊去舍曩去曳喃、莎阿△東方帝釋天左の名小は前の如し、風を扇じて、火の背に著け、空少しく之を扇す。 唵因捺羅耶喃、娑縛訶△東南方火天常の如く。右の掌を開いて大指を扇す。 唵阿譏那曳喃、娑縛訶△南方炎魔天壇茶の印。 唵焰摩耶喃、娑縛訶△西南方羅刹天左刀の印。 唵地哩底曳喃、娑縛訶△西方水天龍索の印、曰く内縛して二風を圓にす。 唵縛嚕拏耶喃、娑縛訶△西北方風天風幢の印なり。曰く定の拳地水を並へ立て、肩を擧ぐ。 唵縛耶吠喃、娑縛訶△北方毗沙門天棒の印。 唵吠室羅縛拏耶喃、娑縛訶△上方梵天定空指を以て水を捻し花を取る形なり。 唵沒羅合含摩寧喃、娑縛訶△下方地天鉢の印。 唵畢哩體反微曳喃、娑縛訶△日天鉢の印の如し。又は胎の印。 唵阿去爾底也喃、娑縛訶△月天梵天の印の如し。伏兔有り。 唵戰捺羅去也喃、娑縛訶

○聖天頸次第(袖書) 開白結願の時、先づ天像を沐浴せしむ、名香を湯に入れ半印を以て之を加持す、眞言に曰く、百返。若は、唵阿努娑折羅、娑跋隸拏訶、莎訶洗浴の時觀想の水を以て毗盧遮那の身を洗浴し、鏡子の智水を以て阿字本不生の體を洗ふ、私曰く、開白以前に香湯を儲けて、寒温を調へ淨器に入れて之を加持し像を洗し之を沐浴せしめ紙を以て之を拭ひ奉り安置すべきなり 以上

頭人身なる故に天
此の印は其の牙の
形なり。
合掌して頭を低
心念す。鶏羅山中
那伽迦山とも云
ふ。七金山の隨一
なり。此に象頭山
と云ふ。此等常に
眷屬と共に此山に
集て遊戯す。山に
中に清淨の油海あ
り。此山自然に羅
荷等の浴物あり。之
今浴作法に
准す。五輪世界
剛界の如し。金
剛界の如し。息
災相。歡喜天
尊は第六摩訶
の太子なり。無
も念に人無
の太子に依りて
の象頭を生ず。此
の象頭を七金山
の内象頭と云ふ。
此の山は住世の
問

袖書 此法は後夜日中の二時に之を修す、若し急事の時三時に之を行す、但し初
夜には供具を備ふと雖も、供養並に浴油は之を行せず、只念誦法施許なり。○先づ天
の覆を取り去く○次に壇前普禮○著座○次に著座普禮○三密觀○淨三業○三部○被甲
○灑水○次に壇上の浴場を取つて火に居へて之を加持す、小印大呪を以つて百八返加
持するなり順に之を加持す ○印 右の手小名の二指屈め掌に入れ、中指直く立て、頭指
を中指の背に著け、大指を以て頭指第一の文の側に著く、呪に曰く大呪。或 ○加持供
物前の印を以て ○次に油を取つて壇の中心に置いて、像を取つて油の中に放ち著けて
紙を覆ふて之を取つて多羅の油中に立つるなり○覽字觀○觀佛○金剛起○普禮○表白
○神分○祈願等○五悔○發願本尊界會歡喜天、 ○五大願○普供養○三力○大金剛輪○
地結○四方結

○道場觀如來 「五輪世界を觀せよ、其上にあ字有り毗那耶迦山と成る、山の上に阿
字有り寶宮殿と成る、中に白色の圓壇あり、壇の中に清淨の油海有り、海の中に阿
入字有り變じて荷葉座と成る、上に毘那の字有り變じて箕箕と成る、變じて歡喜天
男女の二像と成る、共に象頭人身なり、相向ふて互に抱いて立つ、無量の眷屬前後に
圍繞す、七處加持
常の如し

の事圓足なれば五
欲備ふに何毒
不備ふれば佛
簡ふれば何法
の天に一人に
故に十女に
化して佛の天
伏して佛の天
せしむる故に
れば十一の化
男三種あり此
二種あり此
は男音に二實
二天に二實
天は極々實
なり極々實
深秘なり根
明にして即ち
即善提なり(以上三〇八頁註)

○大虚空藏○小金剛輪○送車輪○請車輪○召請根本印なり、軌の如く大
指來去す第二の印なり ○眞言に曰く、唵
簸迦羅ニ主拏彌縛多野弱、娑縛訶○入佛三摩耶○四明○拍掌○虚空網○火院○大三昧
耶○闍伽眞言に曰く普通眞言の次に 唵ト渡リ哩ヤ野、娑縛合賀○荷葉座○五供印明○普
供養○三力○現供一に捧げ供す、但し羅荷
酒團は時には之を供せず ○四智讚○本尊讚 唵ハ誑ハ底ハ、扇底ハ娑婆悉
地、麼訶誑那ハ底、扇底ハ娑婆、娑縛合誑ハ底ハ、扇底ハ娑婆悉
○禮佛 南無誑那ハ鉢底ハ提婆囉惹 ○本尊加持○先づ大日印明○次に身印 内縛して
二中指堅て相せて、二頭各々中の後に附け、二大之を並べ附く。二大開き左右の頭指に付くる
なり。七處を印す、口に曰く
箕の印なり、物を籠 ○身呪に曰く、曩謨、尾那ハ翼ハ迦ハ、賀ハ悉ハ底ハ、母ハ法ハ瀉ハ、但ハ爾ハ野ハ、他ハ、
唵ハ娜ハ下ハ同ハ娜ハ翼ハ迦ハ、尾ハ那ハ翼ハ迦ハ、但ハ爾ハ野ハ、波ハ哩ハ、合ハ但ハ羅ハ、合ハ翼ハ迦ハ、
引ハ佐ハ賀ハ悉ハ底ハ、合ハ餉ハ引ハ佐ハ賀ハ悉ハ地ハ、合ハ餉ハ引ハ佐ハ賀ハ悉ハ只ハ多ハ、扇上ハ底ハ娑羅耶、娑縛合誑ハ底ハ、
隨つて之を改め用ひし ○次に二小指二無名持を以て鈎して内に向へ、即ち二中指を以て直く堅て
、相又ふ、頭指を以て各々堅て、中指に附けよ、二大指を以て又堅て、頭指の側に附
け近づく、大指去來す三度、召請、本尊加持
共に同じく之を去來す ○心呪に曰く、唵ハ頤ハ哩ハ虐ハ吽ハ、娑縛合誑ハ底ハ ○次

(一) 悅與の印は上動す此の印は左右相向ふ斗りなり。
 (二) 佛慈護 四處加持此の印言に由りて諸天威光を増し行者を守護し一切の災難を除く。
 (三) 蘿蔔等 牙印にて壇に置きなむ。
 (四) 灌油 尊の前處を汲んで女の後より男の杓を天に當らば杓を天に置き金合して頭を低れ念ぜよ此れ懺悔する義なり。
 (五) 法施 心經尊勝陀羅尼仁王偈般若偈等なり。

に二手各々小指無名指屈して掌に入れ、二中二頭開きて二大を二頭の下に附け、各印を以て左右の口の邊に付けて二牙と想へ。楡尾の條なり、口に曰く牙の印なり。○中心心呪に曰く、唵盧盧呼娑縛訶 ○次に悦與の印牙の印を用ゆ ○眞言に曰く、唵鉢羅摩訶拏曳、娑縛訶 ○次に調和の印第一印を用ゆ、但し二大去來す ○眞言に曰く、唵、一 鑠都嚕、二 婆羅摩駄伽曳、三 娑縛訶
 ○次に佛慈護の印 此印言は本尊の印明には非ずと雖も之を加用すべしと見たり 十度内に相ひ又へて作て月と爲す、禪智壇惠堅て相著く、印を結ぶこと成し已て心額喉頂を印す、上に印を散す ○眞言に曰く、唵沒駄味底里、縛曰羅囉乞叉感、娑縛訶 ○次に佛眼の印明○次に蘿蔔酒團等を供す、右方なり 半印。心中心呪。○灌油 後夜四百返。日中三百返私曰く、杓を以て多羅の油を汲んで尊の間、護て杓を以て尊の御頭に突き觸る、事を得ず、百八返滿ち畢つて、金剛合掌して、普供養の眞言、三力、法身の偈を誦讀して、能く祈願せよ第二第三第四も亦復是の如し ○蘿蔔酒團を供す左方なり。 如前供し畢つて此時殊に所求を祈願すべし。云云 ○散念誦 佛眼。胎大日。十一呪。中心心呪。悅與。調和。佛慈護。法施等。大金。一字。 ○五供養印明 ○普供養 ○三力 ○現供方 ○闍伽 ○四智讚 ○本尊讚 ○普供養 ○三力 ○祈願等 ○禮佛 ○廻向 ○至心廻向 ○解界 ○撥遣 彈指三度 ○三部 ○被甲 ○普禮 ○次に天を取つて本座に居へ奉る、紙を覆ふて、之を取る 能く油を滴たて、後之を安置すべし ○出堂

或記に曰く、若し事遅延せば軍荼利の眞言を誦して祈請せよ、修中若し障礙を致さば十一面の眞言を念せよ」文

○壇圖 供物等は皆圓に之を居くべし。此は日中の作法なり。後夜には附二杯は佛供の跡左右に之を居く。蘿蔔酒團許なり(供壇の圖は略す) 蘿蔔根之無き時は種オホを以て之を用ゆ、浴油は初め壹升多羅に之を入る、數句に及ぶと雖も之を改め替へざるなり、自ら減る時は之を加ふべし。

- 一、支度 注進 聖天供一七箇日支度事。 合。蘇蜜 名香白 壇一面三尺
- 脇机前 燈臺二 半壘一枚 壇敷布一段 壇供米七石上品、五石中品 油七升上品、五升中品 炭二
- 火鉢口 阿闍梨 承仕人 駟使人 淨衣白 右注進如件 年號月日

一、卷數 聖天供所 奉供 供養法 奉念 佛眼眞言、大日眞言、十一面眞言、本尊大呪、同心呪、同心中心呪、悅與呪、調和呪、佛慈護呪、大金剛輪眞言、一字金輪眞言。右 護持大施主羽林殿下御心中所願成就圓滿の奉爲めに去る二十二日より始め今日に迄る三箇日夜の間、殊に精誠を致す奉供如件
 御記に曰く、建保二年七月二十七日三寶院に於て御本尊を以て寫了す、金剛佛子憲

深生年二
 十四歳
 國譯 薄 雙紙

〇〇神供作法 (既に四度に出づ仍つて略す)

〇〇〇(一)施餓鬼 (袖書)儀軌に曰く、棚の高さ三尺に過ぎず、諸の餓鬼食すること能はず

云云仍て古き支度は貳尺五寸之用ゆ、寛信の支度に曰く三尺」文 一切の餓鬼に飲

食を施さんと欲は、先づ須らく(二)廣大の慈悲心を發して普く一切餓鬼並に靈祇天

仙等を召くべし、淨き處を點定して、地を掃へよ、但し(三)桃柳石榴樹の下を用ゆる

こと勿れ、一器の淨食を儲けて淨水に和して、銅器或は(四)白瓷の鉢或は漆器に盛れ

食の多少は意に隨へよ、東方に向つて施せよ、或は居し或は立つ、
人定の時之を行す。

〇先づ三部被甲護身等〇次に淨地普印真言 囉囉引波譚多入薩縛達莫入 〇次に淨

土變 拳印 唵僕欠 〇次に普集餓鬼印 右の五指を舒べて大中相捻じて、頭指三

度之を召け、眞言返 唵歩布入帝哩迦、多哩但他菓多引也 〇次に食器を取つて手に

居へて偈を誦せよ。至心奉上 一器淨食 普施十方 盡虛空界 一切餓鬼 先亡久滅
山川地主 乃至廣野 諸鬼神等 皆來至此 受我此食 依我呪食 離苦得樂 往生

(一) 施餓鬼 或は
机上に置きて之を施
す、尤も淨處を掃
除し之を修すべ
し、云何なれば
上界の天等も降
り來る故なり、此
の法には珠を摺ら
す、廣大云云生
々世々の父母長
鬼道に墮す、況ん
や今身の父母勤
すんばや、拔苦せ
ずんばあるべから
ず、故に慈悲を發
するものなり、若
し行者廣大の慈悲
等怖れて來らざる
故なり、桃柳石榴
大力の鬼王守護し
柳は古佛の菩提樹
の故に、石榴は詞
利帝母の愛木の故
に、帝母の愛木の故
に、白瓷瓦に燒
きたるものなり。

(二) 七七斛とて天
竺に大人米とて大
粒の米あり、廣大
にして増すなり、
是を七七斛とい
ふ。

(三) 水輪の觀、掌
の中心に字門を取
り、右の五指を伸
べ、鑲字七返唱へて
後、右の手に鑲字
あり、甘露の乳水を
流出すと觀す。

(四) 過去云云、過
去寶勝、過去の花
なれども、法花證
明を爲す多寶如來
を留むる故に、現
在の佛と同じ。

淨土 發菩提心 行菩薩道 晝夜恒常 擁護於我 一切善願 皆令滿足 〇次に五大願

常の 〇次に前の印を結んで、食器に當て、飲食を加持して眞言七返を誦せよ。
師説は前
の印大指

を以て、中指の甲三度之を摩じ然して 曩莫 薩縛但他菓多、縛囉吉帝、唵三婆羅三婆羅吽引

「想へ、一切の餓鬼、皆摩伽陀國の七七斛の食を得、食し已つて皆天上淨土に生じ

て行者をして業障を消除し壽命を増長せしむ」〇次に甘露陀羅尼施無曩莫、蘇嚕頗也、

但他菓多也、但爾也他、唵蘇嚕蘇嚕、鉢羅蘇嚕、鉢羅蘇嚕、娑縛合賀引「想へ、飯食

及び水變じて無量の乳及び甘露と成る、諸の餓鬼をして平等に受用せしむ」云々

〇次に遍照尊一字 水輪の觀を作せ。曩莫、三滿多沒駄南、鑲 左の手を以て食器

を執持して、右の五指を展へ開き下に向へて食器の上に臨して、鑲字七返を誦せよ、

「想へ、甘露の乳水字門より流注して窮盡無し、一切の餓鬼飽滿して乏少有ること無

し、此れを普施一切餓鬼飲食の印と名く。」

〇次に食を淨地に瀉し置く 或は棚或は流水、或は樹下或は淨石に之を瀉し、
更に廻觀すること勿かれ、亦殿の基階に近く勿れ、 〇次に心を至し

て五如來の名號を稱せよ 各々 南無、過去寶勝如來、除慳貪業福智圓滿。南無妙色身如
來、破醜形圓滿相好。南無甘露王如來、灌法身心令受快樂。南無廣博身如來、咽喉廣

大飲食受用。南無離怖畏如來、恐怖悉除離餓趣。

若し能く是の如く五如來の名號を稱せば、佛の威光加被を以ての故に、能く一切の餓鬼等をして、無量の罪を滅し無量の福を生せしむ、弘法大師御口決に曰はく、今一切の婆羅門仙皆此食を得、食し已つて異口同音に呪願して云はく、此人現世の中に於て、亦延壽を得て、共に梵天の威徳を具足して梵天の行を行せん。文

○發菩提心
剛合掌にして唱ふ。

○次に發菩提心、唵胃地質多、沒駄波多耶弭

○次に三昧耶戒 唵三摩耶薩怛鑊

「想へ、諸の餓鬼等菩薩の三昧戒を受けて、皆甚深の祕法を聞くに堪えたり。」

次に光明眞言一返 ○次に三歸を唱ふ ○次に心經 ○次に祈願

願施此食 所生功德 普將廻施 一切餓鬼 法界有情 共生淨土 疾得成佛

○次に撥遣拳に作り仰で三彈指して聲 唵縛日羅、穆乞叉穆

○毗沙門天 (袖書) 口傳に曰く、天等を供するには、著坐して普禮の前に、先づ五股を取り胸に當て

普禮等を爲す。天等は惡心を具す故に。先づ自身金剛薩埵成るなり。若し自身不善なれば崇有り故に此事を作すなり、以上は勝俱低院口傳なり。

壇前普禮 ○著座普禮 ○塗香 ○三密觀 ○淨三業 ○三部 ○被甲 ○加持香水灑淨 ○加持供

○光明眞言の印に
手五色の印に
返唱ふ、此の印の
端より五色の光明
を放つて觀ず。
○彈指高聲に
爲す、鬼類は耳根
鈍なる故に七返、
此の印明の功に
由て淨土に免か
若し音なくんば音
ありと觀す。多聞
天と觀す。勝俱
運なり。

物小三股印 觀字觀 ○觀佛 ○金剛起 ○普禮 ○表白 ○神分 ○祈願等 ○五悔 ○發菩提 ○三昧

耶 ○勸請佛法護持大天王。吉祥天女諸眷屬 ○發願至心發願。唯願大日。本尊外會。多聞天王。禪尼師等。八大藥叉。諸大眷屬 ○五大願 ○普供養 ○三

力 ○大金剛輪 ○地結 ○四方結

○道場觀如來拳印 「心の前に素字有り、變じて須彌山と成る四寶所成なり、其の北面の半

腹に惡字有り、變じて吠室羅摩拏宮と成る、莊嚴殊妙なり、内に亦惡字有り變じて荷

葉座と成る、座の上に字有り變じて寶棒と成る、棒變じて毗沙門天王と成る、七寶

莊嚴の甲冑を著す、左の手に塔を捧げ眼を以て之を視る、右の手に寶棒を執る、

前に又惡字有り荷葉座と成る、座の上に室里字有り如意寶珠と成る。八藥紅蓮花の上に寶珠變じ

て吉祥天女と成る白色にして天女形なり、左の手に如意寶珠を持して心に當つ。右

の手に施願の印なり、四十二部の羅刹王、二十八部の藥叉大將、左右前後に衛護圍繞

せり、七珍萬寶自然に充滿す、本より弘誓を起して無盡無餘界の一切衆生を拔濟す、

是れ吠室羅摩拏、摩賀提婆囉惹なり。」

是の如く觀じ畢つて七處加持、塔の中に八萬四千の法門有り、棒の首は如意寶珠なり

經 ○大虛空藏 ○小金剛輪 ○送車輅 ○請車輅 ○大鈎召眞言の末に本尊の名並に召請の詞を加ふ ○入佛三昧耶

○甲冑 是れ猛
將の形なり、棒の
頭に一顆の如意
寶珠を安す、即ち
是れ福徳圓滿の義
を表す。
○眼を以て云
なり。佛法擁護の義
なり。吉祥天 妃の
故に、寶生尊の化
身なるなり。

○眞言云云 眞
言の末にベイシラ
マンダデイバアラ
ンジャエイケイキ
ソワカを入る。

(二) 振鈴 天等に
は通途は用ゐず。

印〇四明〇拍掌〇結界不〇虛空網〇火院〇大三昧耶〇闍伽〇荷葉座右の手拳に作り腰に當つ左掌を肩の上に仰ぐ歸命、阿入〇(二)振鈴任意〇五供印明〇普供養〇三力〇現供〇讚先四智。大本尊。次吉祥天。或は天龍八部之を用ゆ。

〇本尊讚に曰く、金剛掌心に當つ 唵菩薩沒地藥帝弊致嚕夜、娑縛訶 〇吉祥天の讚

吉慶、吉祥、蓮花嚴飾、貝財、白色、大名稱。蓮花眼、大光耀、施食者、施飲者、寶光、大吉祥、曩謨率都帝、照に曰く、是を十二名號と爲す。本〇普供養 三力 祈願

禮佛四攝の大 曩謨、吠室羅摩拏耶、提婆囉惹返 曩謨、摩訶室利耶曳、提婆拏囉多。南無金剛界等 〇次に本尊加持 先づ大日智拳印 次に本尊三種先づ合掌して十指内に相又へて、二水堅て、頭相柱ふ、二風堅て、微し屈す、左の空を右の掌の中に入れて左の火の甲を押し、右の空左の空の背を越して、左の掌の中に入れて右の火の甲を押し、二風と呵とともに招く、眞言に曰く、大 曩謨、引囉怛囉怛囉夜耶、曩謨引失戰荼縛曰羅播拏曳、摩訶藥乞叉細曩、鉢多曳、曩謨引阿他嚩嚩囉室拏薩也、摩訶囉引惹摩羅給、但藍鉢羅尾沙弭、薩縛薩但縛、唵底瑟多南、怛囉也他、唵摩尼縛駄羅也、薩縛賀、布嚩拏縛駄羅也薩縛賀、摩拏囉訖也薩縛賀、悉定迦羅也薩縛賀、吠失羅末拏也薩縛賀、難曩駄也薩縛賀 〇又印胎藏多聞天 虛心合掌して、雙地を掌に入れて

(二) 又印 二手内
縛は寶なり、上
に塔あり、塔寶印
さいふ。

(三) 八葉 八葉の
上に寶珠ありと觀
す。

相交ふ、二空堅て並べて水火堅て合す、二風火の背に屈して一寸許相著げざれ、是を伽駄棒と名く、眞言大師歸命、唵吠室羅摩拏耶、娑縛賀 〇(二)又印 二手内縛して、二中指立て合はす、塔寶棒と名づく、口傳に曰く、中指寶形の如し、秘印なり。除突軌の説なり 金剛界二十天の中に之有り、次第には中指一股「文唵縛曰羅吠羅縛吽。或は莎呵」〇吉祥天の印 (三)八葉の印口傳 唵摩賀室利耶曳、娑縛訶 〇禪尼師童子印 金剛合掌 唵禪尼師曳、莎賀 或は、唵奢毘哆羅夜、莎賀 〇八大藥叉の印 二手拳に作り、二風を申へ二拳を屈して面て相合はせ、二風端相對へて一寸許相離し著けず、明に曰く、唵、藥叉濕縛合羅、娑婆合賀 〇佛眼印〇散念誦佛眼。大日。本尊大呪。小呪二。吉祥天。禪尼師。諸藥叉。法施。大金。一字。

〇五供〇現供〇後鈴任意〇讚等〇廻向〇至心廻向〇解界〇撥遣右の手拳にして、大頭二指彈指一度、或三度。 〇三部〇被甲〇普禮〇出堂 〇吉祥天女眞言 怛囉也合化、上引室哩二拏、一室哩拏。二薩縛迦引哩野合娑駄頼。三悉頼悉頼、頼頼頼頼五阿、六洛乞叉若、合曩引捨野、三娑縛賀 〇五大子 禪爾只、獨健、那吒、鳩跋羅、甘露、或文に曰く、禪貳師、獨健、那吒、拍拔羅、常見、最勝、〇八大藥叉 摩尼跋陀羅、寶布魯那跋陀羅、滿僧眼爾耶大將、散沙多那哩、衆醯摩縛多、即ち是れ雪山毗灑迦、持法。阿吒縛迦、半遮羅。

法は雨乞又は此の
足の時之を修す
請雨法に支度六
修す故に北の法
を修す北に向て
方に常る故なり。

龍索 蛇の形
なり。

眷屬下劣なる故に
結界あれば怖れて
來り難きが故に用
ゐざるが宜し。用
印の上器を戴て
器を大海と觀じて
二大指を二龍王と
觀じ滴る時無熱と
水が滴る四時無熱
瀧ぐと觀す。

○水天供次第 道場を建立し本尊を安置して、供具を辨備すべし

○壇前普禮 ○著座普禮 ○塗香 ○三密 ○淨三業 ○三部 ○被甲 ○加持香永枳里 灑淨 ○加持

供物枳里 ○覽字觀 ○觀佛 ○金剛起 ○普禮 ○表白 ○神分 ○五悔 ○發菩提 ○三昧耶 ○發願
本尊界會 縛嚙拳天 諸龍王等
難陀拔難 諸龍王等

○道場觀如來 「觀想せよ、壇の中に鑲字有り變じて大海水と成る、水の中に波羅字有

り龜と成る、龜の上に鑲字有り龍索と成る、龍索變じて水天と成る、其身淺綠色な

り、右の手に刀を執り、左の手に龍索を持す、頭冠の上に五龍有り、天衣瓔珞其身を

莊嚴す、四天女妙花を持して左右に侍立す、無量の龍衆前後に圍繞せり。」

○大虚空藏 ○小金剛輪 ○送車輪 ○請車輪 ○召請大鈎召の印明あり、眞言の末に ○四明 ○拍掌

○結界有無不定 ○虚空網 ○火院 ○大三昧耶 ○闕伽 ○荷葉座 ○理供 ○事供 ○讚 ○普供養

○三方 ○祈願 ○禮佛 南無縛嚙陀提婆三 ○本尊加持先大日印言 鉢の印なり、飲食の印の如

し、但し二大指三度來去す、觀念有り、即ち此鉢の印を大海と觀じて、海中に諸龍を

召請す。云々 或説には、勸請にも同じく此印明を用ゆ」文 眞言に曰く、跢姪他、烏駄

男は堅牢地天あり天
に男は堅牢地天あり天
軌の經大日女天あり天
勝王在在在在在在在
光自在の義に依て
天さ名け難しと雖
光自在の義に依て
天さ名け難しと雖
福徳増益の豊饒は
は修すの地祭に之
に五寶瓶の味中
潤流しり穀の味
潤流しり穀の味
形に見ゆるは尊別
形に見ゆるは尊別

去迦、提婆那、理醜、理醜、娑縛訶 ○龍索の印 内縛して、二風を豎て合はせ圓か

にして環の如くせよ、眞言に曰く、唵阿、波波多曳、娑縛訶 ○又印 定の拳を申

べて風少しく屈す、惠の手腰に安ず。眞言に曰く、唵縛嚙拳野、娑縛訶正念誦

用 ○諸龍印 二羽五輪を散し舒べ、二空相又へ右を以て左を押して、蛇の腹行す

るが如くして胸の前に廻はせ。眞言に曰く、唵迷伽奢爾曳、娑縛訶 ○佛眼印明 ○

散念誦佛眼。大日。廣目天。水天。一字。 ○後供養事供 ○讚 ○普供養等 ○廻向 ○廻向方便 ○解界 ○撥

遣彈指 ○三部被甲等 ○廣目天印言 二拳背け合はせて空を以て火輪の甲を押す、

風交へて索の如くす。唵尾嚙博乞叉野曩、哦底波多曳、莎呵 ○道場莊嚴 青色の

幡二流寸長五 壇の左右に之を立つ、青瓷の鉢に水を盛り壇の中心に之を置き、有口又青色

の糸之を置く、口傳有口大幔、壇敷、淨衣皆青色也。（本次第には供壇の圖有り此に略す）

○道場觀 「壇の上に七寶の宮殿有り、殿の内に荷葉の座有り、座の上にヒリ字有り、字

變じて三寶瓶と成る、瓶變じて堅牢地天と成る、三男天 内色にして首に髮鬘を著け、

身に羯磨衣を着して莊嚴微妙なり、兩手に寶瓶を持す、諸の地神等の眷屬圍繞せり。
 ○根本印 合掌して二頭二小又へて掌の中に在き、二中二無名直く立て頭相拄ふ、二大を以て並べ立て二頭の側を押す、二大來去す。○真言に曰く 歸命、唵鉢羅合婆囉
タンネイ 相備、設哩三曼多、阿馱阿馱、阿豆阿豆、比里底毗比里底毗曳、莎呵 ○次に瓶印言
即鉢の 唵比里底毗曳、娑縛賀 ○散念誦佛眼。大日。不動。本尊。
印なり ○梵號 比里底毗曳提婆
地神部類 眷屬

〇〇〇吉祥天

○壇前普禮○著座普禮○塗香○三密○淨三業○三部○被甲○加持香水○灑淨○加持供物
小三股印 枳里枳里○覽字觀○觀佛○金剛起○普禮○表白○神分○祈願○五悔○發菩提○三昧耶
勸請 吉祥天女諸佛母 ○發願 吉祥天女諸佛母天 ○五大願 ○普供養 ○三力 ○大金剛輪 ○地結 ○四方結
 ○道場觀「觀念せよ、前に惡字有り大光明を放つ、此光明大地に變じて吠瑠璃の地と成る、地の上に更に惡字有り宮殿と成る、宮殿の前に寶臺有り、此の寶臺を周匝して

〇〇〇吉祥天 寶生 如來の所變にして此の法は豊饒の爲に之を修す。

〇〇〇天女菩薩 是れ寶生の所變なり。 〇〇〇妙蓮花座 天部は荷葉なれども寶生の所變の故に蓮花生なり。

〇〇〇白象王 淨菩提如意寶珠白淨信心の義なり。

流泉浴池有り、寶蓮花開敷せり、此臺の四面に皆階道有り、寶樹行列し匝遠せり、臺の中央に壇場有り、壇場の中央に蓮花臺滿月輪有り、月輪の中に頰字有り、變じて如意寶珠と成る、如意寶珠變じて大吉祥。天女菩薩の身と成る寶冠を戴けり、左の手に如意寶を持し、右の手は施願の印に作す、項背に圓光有り紅色の妙蓮花座に坐すなり、左右に梵天帝釋及び四天王、並に眷屬の天女周匝圍繞す、又吉祥天の上空に千葉の寶蓋有つて蓋を廻ぐる、天人有つて音樂を調べ天花を散す、又蓋の上の虚空の中に一聚五色の雲有り、雲の上に白象王有り鼻を以て寶瓶を纏ひ取つて、之を傾くれば七寶を溢れ落す、又上の虚空に俱胝の如來有して、此の吉祥天女菩薩を圍繞せり。此觀を作し已つて、印を以て七處を加持すること例の如し。

○大虚空藏 ○小金剛輪 ○送車輅 ○請車輅 ○大鈎召 眞言の末に本尊名並に召請の詞を加ふ ○四明 ○拍掌 ○虚空網 ○火院 ○大三昧耶 ○闍伽 ○荷葉座 右の手拳に作り腰に當り左掌を肩の上に仰ぐ 歸命、阿入 ○振鈴 任意 ○五供印明 ○普供養 ○三力 ○現供 ○讚 先四智。次本尊。或は天龍八部之を用ひ 吉慶、吉祥、蓮花嚴飾、具財、白色、大名稱、蓮花眼、大光耀、施食者、施飲者、寶光大吉祥、曩謨、率都帝 ○普供養 ○三力 ○祈願 禮佛 四攝の次 南無、摩訶室里野曳、提婆拏 四多 返南無金剛界等 ○次

（二）口決 八葉の上
に寶珠を觀す、
之れを吉祥の印と
いふ、一切衆生の
諸の希願を滿すの
なり。

に本尊加持 先大日智拳印 〇印 被甲の印小野 〇眞言十二名號 怛爾也合他 上引室
哩合 合ニ 室哩合 二薩合 縛迦合 哩野合 二娑合 駄合 頼合 悉合 頼合 五、阿合 洛合 乞合 叉合 茗合 捨合
野、合 三 娑縛賀 〇次に八葉の印口決 唵摩訶室里野曳、莎呵正念誦 〇次に寶菩薩
の印明 外縛して二頭指を寶形にし、二大並べ立つ、或は曰く 唵縛曰羅囉怛囊、唵。

〇佛眼印〇散念誦佛。大。本尊三種。毗沙門。 〇五供〇現供〇後鈴用意 〇讚〇廻向至心

廻向〇解界〇撥遣右の手拳にして大頭二指 彈指一度。或は三度。 〇三部〇被甲〇普禮〇出堂 〇護摩増益。作法

〇部主寶善 〇諸尊七十 〇伴僧小呪。但し一口 〇本尊勸請の印、八葉の印なり、頭指

を以て之を召く、言は小咒なり。供物にも同じく小咒を用ゆ。〇結界馬頭 〇字輪觀河

本書に曰く、大吉祥天女經一卷。吉祥天女十二名號經一卷 陀羅尼集經第十卷 次

第十

師口に曰く、或最祕傳に曰く、吉祥天を行せば、黒耳の作障有る故に、先づ彼の天を
去けて後に修すべきなり、其の法は先づ三部被甲、次に心經一卷、次に隨求の印言之
を以て彼の天に廻向して、然して後に道場に入るべし。又曰く、護摩の神供には、梵
天帝釋各三 本尊に七 之を供す、法施には心經、金剛般若の偈、隨求、光明眞言、發菩提

心、三昧耶戒、本尊の明各々百返之を誦す、次に念誦了つて彈指せよ、又曰く、歸
る時に後を見る勿れ、又供物等手づから之を持參せよ、又供する時火を燃さず、黒暗
の處、若くは竹林にして之を供す。文
師口に曰く、黒耳の法、種は迦、三は獨股、印は普印なり、言に曰く、唵迦羅室利莎
訶

〇〇圓滿金剛 本流には用ゐざるなり

國譯薄雙紙 普通諸尊法第二終

○阿闍云云 大呪の事なり。

○寶生尊 此尊金剛寶勝如來とも云ふ。

○如意寶珠 福徳聚門の故に衆生如來より寶善薩化す此れ因果なるなり。因に在りては實菩薩の果に在りては實生尊なり。願の施願 與願の印なり。四規近 寶光。幢。唉。の四菩薩なり。

印を結び儀軌の大呪を用ゆ。 ○阿闍佛陀羅尼別 ○正念誦羯磨 ○本尊加持如 ○字輪五大或在別 ○本尊加持如前、但先大日 ○佛眼印明 ○散念誦佛眼。大日。本尊。金剛薩埵。降三世。大金剛輪。一字。 ○後供養理供 ○闍伽 ○後鈴 ○讚如 ○普供養 ○三力 ○祈願 ○禮佛 ○廻向 ○至心廻向 ○解界 ○撥遣 ○三部 ○被甲 ○禮佛 ○出堂 ○護摩息 ○部主段金剛。大日 ○本尊段 ○諸尊段三十。七尊

○寶生尊法 房中より佛前に至る作法常の如し

○壇前普禮 ○著座普禮 ○塗香 ○三密 ○淨三業 ○三部 ○被甲 ○加持香水 ○加持供物 ○覽字觀 ○觀佛 ○金剛起 ○普禮 ○表白 ○神分 ○祈願 ○五悔 ○發菩提 ○三昧耶 ○勸請平等。性智寶。生尊。寶部。本尊。外會。寶生。如來。內證。諸眷屬。摩尼部。中諸眷屬等。 ○五大願 ○普供養 ○三力 ○大金剛輪 ○地結 ○四方結 ○道場觀 「觀想せよ、壇の上に惡字有り寶樓閣と成る、樓閣の中に殊妙の壇有り、壇の上に阿字有り淨月輪と成る、月輪の上に訖哩字有り寶蓮花と成る、蓮花の上に字有り如意寶珠と成る、寶珠變じて金剛寶如來と成る、頂より黄金の光を放つて無量の世界を照す、右の手は施願の印、左の手は拳を膝の上に仰ぐ、相好圓滿せり、寶部四親近の菩薩、並に八供四攝等本位に依つて住せり。」

○結界 此の界に軍荼利の用ひ可きなるを五部を三部に攝する故なり。寶善薩の證を用ひ此尊は因果同體の故なり。軍荼利の辨事故に南方の所變教令に辨事天の南方福徳門に相應の由念誦に用ひ本尊の由緒ある尊を出する。定光佛法 此法は修すること希に之を修す。佛頂形 如來の頂を蓮光に載す。功徳如來無見相の功徳無比の義なり。平等房 實名は保壽院永嚴なり。成就院 助僧止の兄弟なり。推し付て定言を推し付て定

○大虚空藏 ○小金剛輪 ○送車輅 ○請車輅 ○召請大鈎 ○四明 ○拍掌 ○結界降三世 ○虚空網 ○火院 ○大三昧耶 ○闍伽 ○花座 ○振鈴 ○理供 ○事供 ○讚四智。寶 縛曰羅囉他、縛曰羅迦除、摩訶摩泥、阿迦除藥婆、縛曰羅茶、縛曰羅藥婆、曩謨娑都帝 ○普供養 ○三力 ○祈願 ○禮佛 曩謨、囉怛曩三婆縛、薩多他藥多、返 ○入我我入 ○本尊加持、二手外縛して、二中指寶形の如し。唵囉怛曩、合、三婆縛怛洛合、二 ○正念誦羯磨 ○本尊加持 ○字輪觀五大 ○本尊加持先大日。次佛眼。佛眼。大日。本尊。散念誦。軍荼利。吉祥天。大金剛 ○後供養理供 ○闍伽 ○後鈴 ○讚 ○普供養 ○三力 ○祈願 ○禮佛 ○廻向 ○至心廻向 ○解界 ○撥遣 ○禮佛 ○出堂 ○護摩盆 ○部主大日。或寶菩薩 ○諸尊七十

○定光佛法 顯教には燃燈佛に云ふ

「樓閣の中に八葉の大蓮花臺有り、臺の上に月輪あり、輪の中に阿字有り、字變じて佛頂形と成る、形變じて定光佛と成る、相好圓滿眷屬圍繞す。」 ○讚四智 ○印 ○眞言 唵三摩地、入縛羅、莎呵 平等房曰く、此の定光の眞言は若しは愚人の推作する所か、其故は、三摩地とは定なり、入縛羅は曰く光なり、

光の二字の梵名に
作るといふことな

善名稱 此の
波は渡海の祈り風
じて旅行の時に
の法を修して宜
師のこの尊は七
薬師の中の一佛

通佛 胎藏の
一切佛身の眞言
も諸尊に通ず、
す。佛讚は諸尊に

三二八
仍つて梵號を以つて名と爲る、但し定光佛とは燃燈佛なり、本とは錠の字を用ゆ、今
定の字を用ゆるは借音か、足あらざるを錠と言ふ是れ燈器の名なり、燃燈佛は梵號な
り、法花經の梵本を勘ふべし、故に此佛は諸佛の通眞言を用ゆべし、胎藏遍知院の明
等なり。」支

善名稱吉祥王如來法

「樓閣の中に八葉の大蓮花臺有り、臺の上に月輪有り、輪の中に阿字有り、字變じて
寶珠と成る、珠變じて善名稱吉祥王如來と成る、相好圓滿にして無量億の衆、不退の
菩薩、前後に圍繞せり。」

印合掌

眞言に曰く、

曇莫、三曼荼沒馱南、暗、薩縛沒馱胃地薩怛縛、

此佛の名號本誓は七

哩捺野爾也、

吠奢爾、

曇莫薩縛尾泥、娑婆訶。

讚佛

佛藥師經上卷に出づ、件の文に曰く、我願くは、來世に菩提を得む時に、若し衆生有

つて江海に入り大惡風に遭ひ、其船舫を吹いて洲渚にして歸依を作す有ること無ふし
て、極めて憂怖を生ず、若し能く心を主として我名を稱せば、是の力に由るが故に、

皆心に随つて安穩の處に至ることを得て諸の快樂を受く」文傳教大師入唐の時、鎮西
に於て此佛白檀の像四軀を造立して、竈戸山に安置す、件の像は寶珠を持す、形像は
藥師佛の如し、但し右の手に寶珠を持し、左の手は施無畏なり。

大佛頂

勸請 金輪佛頂轉輪王、八大佛頂諸轉輪、○發願 金輪佛頂、八大佛頂、諸轉輪王。

道場觀「虚空法界の中に、大金剛峯寶樓閣有り、高うして中邊無し、諸の妙寶を以

て莊嚴交飾せり、無量百千の光明照耀す、其の中央に大蓮花王有り、花臺の上に阿

阿の三字有り、七大師子王と作る、其の上に阿字有り大月輪と成る、輪變じて八幅

の金剛焰輪と作る、輪形廣大にして三千世界に遍し、輪臍の中に於て白蓮花王有り、

其上に惡字有り變じて八幅の金剛輪寶と成る、其輪變じて攝一切佛頂輪王の身大日也

と成る、是の如來の形、紫磨金色にして大丈夫の相なり、法界定印に住す、其の印の

上に入幅の輪を持す、其の攝佛頂輪の身より八色の光を放ち、大輪一一の輪幅の間に

八方八色の金輪を出生す、其の八方の輪臍に八種の蓮花を出生す、其の蓮花に於て八

法は此の法界の
二に此の法界の
金輪佛頂は二に
は此の法界の
の攝佛頂は二に
は此の法界の
佛頂の三摩地に
德最上無比に
覺界の障を降伏
す用其の故に結
に用其の故に結
云息災護摩の時
持物の觀想の時
月輪の觀想の時
は智の觀想の時
煩悩を破す此の
輪の權破す此の
なり。即ち大日
の紫磨金色なり。
胎 胎 胎

(一) 大惠刀 金剛合掌の大惠刀なり。
(二) 除障 尊勝佛頂なり。鈞召の印にして召かす。
(三) 黃生 廣生佛頂なり。
(四) 無邊聲 無量聲佛頂なり。

(五) 八大菩薩 八大明王なり。

歸命、但陵合帝儒羅施、鄔瑟尼合灑、娑縛訶△發生佛頂 八葉の印なり。歸命、咄嚕咄、鄔瑟尼灑、娑縛訶 △白傘蓋 傘蓋の印なり。歸命、嚕悉怛多、鉢怛羅、鄔瑟尼灑、娑縛訶△勝佛頂 (一) 大惠の印 歸命、苦惹欲、鄔瑟尼灑、娑縛訶 △(二) 除障佛頂 鈞の印 歸命、訶唎尾枳羅拏、半祖、鄔瑟尼灑、娑縛訶 △(三) 黃色佛頂 內五股の印、歸命、室哈咄、鄔瑟尼灑、娑縛訶 △最勝佛頂 轉法輪の印、歸命、施泉尾惹欲、鄔瑟尼灑、娑縛訶 △(四) 無邊聲佛 法螺の印、歸命、吽惹欲、鄔瑟尼灑娑縛訶

○(五) 八大菩薩の印言 △虛空藏 二手虛心合掌して、二大指並べて掌の内に入れ、二無名指中節の文を押す、二頭指中節を屈して、二大指の上に覆ふへ。曩謨、阿迦遮迦羅縛耶、唵阿哩迦摩哩沒哩、娑縛訶 △普賢 二手外縛して、二中指を立て合はす。唵三昧耶、薩怛縛 △金剛手 內五股の印、曩謨、三曼荼縛曰羅曇、戰拏摩訶嚕娑陀、咄 △文殊 二手虛心合掌して、二大指を並べ立て、二頭の中節を屈して端を合せ、二大指の甲の上に置き、二中指を以つて二無名指の背に附けて相纏へ。唵阿羅波灑曩△除蓋障 二手虛心合掌して、二頭二中各、圓かに立て合はせ、二無名二小共に屈

(一) 大咲 軍荼利明王なり。

(二) 步擲 普賢の教令輪にして普賢變じて步擲なる。

して掌に入れて背を合はせ、二大を並べ立て、二無名の中節を押す。歸命、惡薩怛縛絲多弊囉葉多、但藍怛藍、嚕嚕、娑縛訶 △地藏 內縛して二中立て散す 唵訶訶訶、尾娑摩曳、娑縛訶 △觀音 外縛して二頭蓮葉、二大並べ立つ。唵阿嚕哩迦、娑縛訶 △慈氏 二手虛心合して、二頭指を屈して甲を合はせ、二大を並べ立てて二頭指の側を押す。唵阿嚕哩迦、娑縛訶 △慈氏 二手虛心合して、二頭指を屈して甲を合はせ、二大を並べ立て、二頭指の側を押す。歸命、唵梅怛黎耶、娑縛訶 ○八大明王の印言 △(一) 大咲 右の手小指を屈して大指を以つて小指の甲を押せ、餘の三指直く立て、各々着くること無うして隙有らしめよ、左の手頭指大指相捻じて、餘の三指直く立てよ、所謂持花の印なり、左右此印に作り、兩印相對へて之を立てよ。唵縛曰羅吒、訶娑耶吽發吒 △(二) 步擲 右の手小指を屈して、大指を以つて小指の甲を押し、左の手胎藏の拳に作り肘を上げよ、左右共に此印に作り、相對して之を立てよ。唵紇哩咄、矩嚕吽、勃嚕咄、素嚕咄、惹嚕咄、虛 △(三) 降三世 大印常の如し、唵蘇波儺蘇婆吽、縛曰羅吽發吒 △(四) 大威德 內縛して、二中を立て合はす。唵吽惡吽 △不動 兩手劔の印 唵阿左羅羯拏、戰拏娑駄耶、吽發吒 △無能勝 右の

手頭指大指相捻して、餘の三指直く立つ、所謂持花の印なり、但し火を屈して掌に入
れよ、此印を結んで心に安ず、左の手肘を立て五指を舒べて外に向ひ立てよ。唵炬嚕
炬嚕、戰擊哩摩登偃、娑縛訶 △馬頭 印常の如し 唵賀野紇里縛、吽吽發吒 △
大輪 小金剛輪の印 唵縛日羅、斫羯羅吽

(一) 普通佛頂
剛合掌の如し、金
母の虛心合掌の次
に金剛合掌を深く
中節の程を交ゆる
なり。

(二) 辨事 辨事佛
頂なり、眞言は次
の次勝金剛の次第
に出たり。

○(二) 普通佛頂 二手虛心合して、十指深く交へよ。娜莫、三去 滿多母駄南、一麼鼻
鉢羅合底賀多、舍引娑曩、唵斫訖羅、合戰舌底唵、吽、三引 ○正念誦眞言 婀、
但嚕咩、吒嚕咩、咄嚕咩、訥嚕咩、忽嚕咩、室嚕咩、勃嚕咩、素嚕咩、吽。 ○散
念誦 佛眼。大日。陀羅尼。(二)辨 ○讚四智 ○禮佛、南無、翳迦乞叉羅沒駄、鄔瑟尼灑三、
〔光采、アイジユラ、〕 南無、帝儒羅施、鄔瑟尼羅、薩但他葉多 〔發生、〕 南無、咄嚕咩、鄔瑟尼羅、薩但他葉多。
〔白傘、〕 南無、悉但多、鉢但羅、鄔瑟尼灑、薩但他葉多、〔勝、〕 南無、惹野、鄔瑟尼灑、薩但他葉
多 〔除障、〕 南無、尾枳羅拏、半祖鄔瑟尼灑、薩但他葉多。 〔廣生、〕 南無、室嚕咩、鄔瑟尼灑、薩但
他葉多。 〔最勝、〕 南無、尾惹野、鄔瑟尼灑、薩但他葉多。 〔無邊聲、〕 南無、吽惹欲、鄔瑟尼灑、薩但
他葉多。

○護摩○火天○部主佛 ○本尊、自加持、召請、撥遣、諸供物、加持物、○諸尊○世天

(一) 師主僧正成
賢師覺洞院の勝賢
なり。

(二) 大勝金剛
愛に之を修す、此
法は寶馬の勝負に
利あり、又兵具加
持にも之を修す。

(三) 十二の大印
十二の持めなり。

御本記に曰く、此次第は、中宮御産の御祈、(一)師主僧正之を勤仕す、件の料に成賢を以つて書せしめ御す所
なり。

○○○大勝金剛

○種子○三形、千幅金輪 ○道場觀 「壇の上に紇哩字有り、千葉の大白蓮花と成
る、蓮花の上に吽字有り、變じて千幅の金輪と成る、輪變じて大勝金剛轉輪王と成る、
手に十二臂を具す、左右第一の手は智拳印を持す、復五峯の金剛、蓮花、摩尼、羯磨、
鉤、索、鎖、鈴、智拳、法輪を持す、(二)十二の大印なり、身色日の如くして五髻に光明
あり。其の光無主にして十方に遍す、面門微咲にして相好圓滿せり、八供四攝の菩薩、
乃至無量の聖衆、前後に圍繞す。」

○智拳の印 唵摩訶縛日嚩鄔瑟尼灑、吽但洛紇哩惡吽 ○本三昧耶の印 二手

内縛して、二中指を立て合はせ、上の節を屈して劔形に作る。眞言前の如し ○

正念誦前 ○散念誦 佛眼。大日。本尊。 ○伴僧の咒 佛頂 歸命、唵吒嚕咩滿多娑縛訶

○御加持の呪 佛頂 ○勸請 大勝金剛轉輪王 ○發願 本尊聖者大勝金剛 ○禮佛

南無、摩訶惹耶、縛日嚩、鄔瑟尼灑 ○讚四 ○護摩敬 ○部主佛 ○諸尊 三十

○(二)熾盛光法天
○種子 三形、十二幅輪

○道場觀 「壇の中に十二幅の大輪有り、上に阿字有り八葉の白蓮花と成る、中臺に勃嚕訶字有り、又後の葉に勃嚕訶字有り、變じて十二幅の金輪と成る、變じて熾盛光佛頂如來と成る、身の諸の毛孔より大光明を放つ、首冠に五佛頂あり、二手は釋迦の如し、前の佛眼文殊葉に金剛手、左の不思議童子の右救護惠、文殊の左毗俱胝、金剛手如意輪手左 七曜九執、大梵天、淨居天、那羅延天、都史多天、帝釋天、魔醜首羅天、十二宮、二十八宿、八方天、降三世、不動、無能勝、烏瑟澁摩、等の七十餘尊、前後に圍繞せり。」○印 ○先づ金輪(三)根本の印 二手内縛して、二中指を立て合はせ上節を屈して劔形に作り、二大指を並べ立て、二頭指を申へ中節を屈して端を合はせ、二大指の上に置き。眞言 曩莫、三滿多沒馱喃、勃嚕訶 ○次に(四)本尊の印(被甲の印なり) 二手内縛して二中指を立て合はせ、二頭指を屈して二中指の背に立て、二大指を以つて各々中指の第二の節を押す。眞言 曩謨三滿多、一沒馱喃、上聲阿鉢羅合底、了達

三賀哆舍四娑娜喃、上聲但姪他、唵、七佉佉、八佉佉、上聲佉佉、九吽吽、短聲入縛二羅一入縛羅二鉢羅合入縛二羅、三鉢羅入縛羅、四底瑟姪、二合底瑟姪、二合瑟致合哩、七瑟致合哩、八薩普合吒、九薩普合姪、二扇底迦、廿室哩合曳、廿娑縛合訶。二十誦前の正念誦 佛眼。大日。本尊。文殊。金剛手。不思議童子。救護惠。毗俱胝。不動降三世。七曜。二十八宿。大金。一字。○勸請 熾盛光佛頂輪王、七曜星宿諸眷屬。○發願 熾盛光佛大轉輪王。○禮佛 ○讚(四智。本尊。在經) ○護摩 佛部主眼 ○諸尊 童子。救護。毗俱胝。四天王。○世天 常の外に曼荼羅の諸天等に之を供す

○(二)白傘蓋 (袖書)小野の厚造紙下巻に、白傘蓋佛頂の印を説いて曰く、二大指を以て各々二無名指の甲の上立て相合す。眞言に曰く、唵摩麼吽囉囉翼の反

○種子 三形、蓮花の上に白傘蓋。○形像 黄色にして左の手蓮の上に傘蓋、右の手を仰げ地水火風を屈す、空を舒べて赤蓮に坐せり。頂輪王の軌に曰く大無名の甲を捻して側して合はせ、二頭を屈して蓋の如くし、中微屈し合はせ、小堅て合はす、唵摩麼吽囉囉翼文 ○梵號 悉多多鉢多羅、鄔瑟尼灑 ○密號

○印の明を用ひ、
海の印を結び、大
金龜の印なり。

金龜三層蓮花の妙高山等常の如く觀念すべし、次に○印を結び明も誦すること亦復是の如し、次に如來拳の印を結んで觀想せよ、「須彌山の頂無量廣大にして平等なり、寶・卍・但洛・紇哩・惡の五字を想へ、變じて七寶の宮殿と成る、繪綵珠網を懸けたり、其の莊嚴無量なり、其の中に五部の曼荼羅壇有り、其の中に如來部輪有り、紇哩字を想へ八葉の蓮花臺と成る、其の上に三字有り、中央に心、左右に阿字あつて大覺師子の座と成る、其の上に紇哩字有り變じて大寶蓮花と成る、其の上に唵字有り變じて塔婆と成る、所成の五大轉じて大毗盧遮那如來と成る、三身自受法樂の故に三十七尊、及び外部の天等を流出し、圍繞恭敬せられて三密の法を説き給ふ」唵僕欠を誦して七處を印せよ

○次に大虛藏○轉明妃並びに伽陀○次に小金剛輪○次に啓請○次に開門○次に啓白○次に送車輅○次に請車輅○次に金剛王○次に降三世○次に虛空網○次に火院○次に大三昧耶○次に闍伽○次に花座○次に讚四○四明○次に拍掌○次に振鈴○次に能與無上菩提最尊勝智拳の印唵吽惹護平娑、唵字を以つて月輪の中に觀じて頂上に置き、字の色珂雪の如し、此の想成し已つて、即ち自身を見るに月輪の中に坐して、便ち毗盧遮那と

成ることを得。」

○第一最勝云
云袈裟を加持し
ながら定印なり。

○次に能摧伏左の手に袈裟の二角を取り唵吽惹護平娑 吽字を以つて月輪の中に處かしめて、頂上に置き、字の色青色なり、此身即ち阿闍如來と成る。」○次に滿願左は先の如し右は與願の印なり唵吽惹護平娑。惹字を以つて月輪の中に處かしめて頂上に置き、字融金色の如し此觀成し已つて即ち寶生如來と成る。」○次に○第一最勝三昧耶定の印唵吽惹護平娑。護字を以つて月輪の中に處かしめて、頂上に置き、紅蓮花色の光の如し、觀成し已つて此身即ち阿彌陀如來と成る。」○次に施無畏左の手に袈裟を取り右の手に施無畏なり唵吽惹護平娑。娑字を以つて月輪の中に觀じて、頂上に於て五色の觀を作せ、觀成し已つて自心即ち不空成就如來と成る、凡そ五佛皆隨方の光を放つて中方は普く十方を照す無數百千億の光を以つて、其の方の恒河沙世界の衆生を照す、期の光に遇ふ者は悉く三昧に入る。○金剛波羅蜜左の手に袈裟を取らす右の手に先の如し唵、薩怛縛、合縛入日哩、二合娑縛引、訶引 ○寶波羅蜜左右の手に先の如し唵、囉怛曩、合縛入日哩、二合娑縛引、訶引 ○法波羅蜜左右の手に先の如し唵、達摩、合縛入日哩、二合娑縛引、訶引 ○羯磨波羅蜜左右の手に先の如し唵、羯磨、合縛入日哩、二合娑縛引、訶引 以上は五佛四波羅蜜なり○次に金剛薩埵菩薩左の手拳にして腰に安す、右の手杵を取つて三度抽擲す

く風 唵、縛上嚕那也、娑縛二合訶引 ○風天 右上の如し、左の五指直くして地水を風せよ 唵、摩耶吠、

上娑縛二合訶引 ○毗沙門天 合掌して、二地二火を風して掌に入れ、唵、拘米羅也、娑縛二合訶引

○自在天 右の拳腰に安し、左の手直く立て、地水を招く。唵、伊舍那、娑縛二合訶引

○上方天 右拳腰、左五指を舒る。唵、陀羅泥、娑縛二合訶引 ○下方天 印の唵、

末羅沒泥、娑縛二合訶引 以上は十天なり ○次に事供を獻す 塗香。花鬘。燒香。 ○次に廻

向輪陀羅尼の印 唵、娑摩合羅娑摩合羅、微摩引曩娑引羅、摩訶斫迦羅、五縛上吽

長 前の供具を以つて、恭敬して諸佛菩薩に供養す、此の力に由るが故に、五無間

等の極重罪業消滅することを得、何ぞ況んや輕罪をや、復應に此の種々の善根を以つて

衆生に廻向すべし、願くは諸の衆生速かに阿耨多羅三藐三菩提を證せん。○次に四智讚

○次に摩尼供養 ○次に三力偈 ○次に禮佛 南無摩訶毗盧遮那佛 南無阿闍佛

南無寶生佛 南無無量壽佛 南無不空成就佛 南無四波羅蜜菩薩 南無十六

大菩薩 南無八供養菩薩 南無四攝智菩薩 南無金剛界一切諸佛 南無大悲

胎藏一切諸佛 ○次に佛母加持 ○次に入我我入觀 ○次に本尊契 智拳 唵吽

惹護平娑 ○次に根本真言 唵、縛入折羅、二合唵、娑縛二合訶引 ○次に加持

念誦 ○淨珠の明を誦す ○次に施轉の明 ○次に念誦已つて偈を誦す ○次に本尊加持 ○次

に散念誦 ○次に入法界三昧觀 左の手の上に右の手を重れて大指端を合す 此字輪觀は金剛界の如し、但し時

に隨つて之を略す。○本尊加持 ○次に佛眼 如し ○次に八供養 ○次に壇供 先行者の左 ○次

に廻向輪陀羅尼 如し ○次に四智讚 ○次に普供養 ○次に三力偈、祈願 ○次に闍伽 如し ○

次に廻向 ○次に五悔 第五 ○次に解界 ○次に奉送 作法印明、並偈 文等常の如し ○次に三部

○次に被甲護身 ○次に出堂、大乘經を誦して泥塔を作す、心に隨つて經行するのみ。

○止風雨法 火天、或は摩耶斯龍王、之を供すべし、止風雨經之を見るべし。守護

國界經 第九に止風雨陀羅尼を説いて曰く、唵、阿密唎低底、吽、底瑟咤 二合 娑縛二合 賀引

摩耶斯龍王の印言には、胎藏諸龍の印言を用ゆべきか。或は曰く、馬頭二卷の儀

軌に、八大龍王各別の印明有り之を勘ふべし、又陀羅尼集經をも勘ふべし。馬頭の事の

馬頭儀軌の八大龍王、難陀龍王、婆素難龍王、德叉龍王、羯因吒龍王、股摩龍王

摩股摩龍王、商佉婆羅龍王、鳩唎迦龍王。以上印言皆説けり。或鈔に摩耶斯龍王の

印言を出して曰く、唵摩耶斯銘伽者備、娑縛訶。 ○孔雀經 二帖 ○仁王經 二帖 ○最勝王

王 止雨には摩耶斯龍

の法は水天を祈り

ある時に修す請雨

法は霖雨或は大風

雨にして世人愁歎

(二)止風雨法 此

國 譯 薄 雙 紙

三四五

此法は七星如意輪
 踊出して悉地を得
 る故に七星如意輪
 と反逆を鎮めんが
 爲に修せんが爲に
 修す。本星 北斗七
 星なり。

〇〇〇 七星如意輪

七星如意輪王經に曰く、爾の時に神通王菩薩に白して言はく、世尊何の因縁を以つて但し如意輪王菩薩を觀念せざる、又今〇〇〇本星等を禮拜するや、佛の言はく、昔し燃燈佛の所にして此法門を受く、七星の精靈天より下り、何利大神地より出で、願ふて我等輩此大法を護らん、若し人等有つて此法を造り奉らば、我等先づ至つて法事を成就すべし、此の因縁を以つて兼て造法を存す。」云云

○道場觀 「宮殿の内に壇有り、壇の上に七寶の輪有り、其の輪臍の内に蓮花有り、花の上に紇哩字有り、左右に但洛但洛の字有り、此三字變じて如意寶珠と成る、珠變じて如意輪觀自在菩薩と成る、身紅色にして十二臂有り、或は六臂を現はす諸の寶物を執る、又八輪の間に於て卍字有り、變じて北斗七星、並に訶利底母と成る、蓮花部の中菩薩聖衆、九曜、十二宮、二十八宿、恭敬して圍繞せり。」

○正念誦の呪 〇散念誦 北斗密呪。又各別の眞言。任意本命星返數を益す。訶利帝母。曜宿の呪。 以上常喜院 八幅寶輪の中央

此尊は都表如意輪
 して四天天下を現
 する秘法として相傳
 あるも此の方に
 は沙汰なしの如
 解脫都表如意輪
 法意の圓行の請軌
 來なり

に如意輪觀音を安す、八幅の間に右に旋つて北斗七星を安す、尊の前に訶利帝母を安じて、輪の外に八供四攝あり」常の 〇根本印明 常の 但し本尊加持の次に、北斗印明、次に訶利帝印明 常の 〇散念誦 佛眼。大日。本尊。三種。北 〇禮佛 三十七尊、本尊北斗七星、訶利帝母、南無北斗七星、南無訶利帝母。 〇發願 本尊聖者如意輪尊。北斗七星。訶利帝母。 〇伴僧大御加持 〇護摩 息。部主。本命星。祕。本尊如意。諸尊。曼荼羅の如し。本尊並に七 〇諸尊 曼荼羅の如し。本尊並に七 〇圖を出せり、此に略す。如意輪は二臂の像なり、熾盛光法の説の如し、七星は北斗曼荼羅の如し、訶利帝は只一子を懐く、左の天に吉祥菓を取る、此法は賊難の爲めに之を修す、七星如意輪王經之を見る可し。以上 小野

〇〇〇 都表如意輪 〇〇〇 都表如意輪王念誦軌に曰く、次に復本尊を安置せんには、行者自須らく己が座を敷くべし、尊の面を西方にして目前に存す、行者像の前に面を東にして坐すべし」〇〇〇 都表如意輪軌に曰く、都とは攝の義、一切諸佛菩薩を攝入す、是の故に都と名付く。表とは顯の義。大光を顯現して四天下を照す。是の故に表と名付く。冥には一切諸佛菩薩を攝し、顯には日光を現して天下の一切衆生に視せしむ、此

命終日没 生死を引ずる 極楽に引ずる 観音の因縁 示現の観音 西に没する 日没の観音 十六想観 即ち此の觀中第一 觀するなり 日想觀と 輪の光の如し、日

義有るが故に名付けて都表聖如意輪と曰ふ、衆生の類有つて此相を知ること無し、此れを知らざるが故に歸依を作さず、能く秘すべし、信心堅固の者を尋ねて之を傳授すべし、命終の時必ず淨土に生ず、晝分六時行住坐に、常に觀想して是の法を廢すること勿れ、名付けて日想と云ふ、正とは正念に住す、故に往生疑無し」文都表如意輪私記に曰く、師謂はく一切佛菩薩の大悲心を以つて觀音の心中に攝す、八大觀音等の無量無數の觀音、但偏に此の如意輪の心中に攝入す、日想觀は十六想觀の第一なり、此法の中に日想觀を以つて其終の奉送觀と爲す、是れ深祕のみ。」或は曰く、此菩薩、大悲方便の力を以つて、日天の身を現して四天下を利す。」文七星九曜十二宮、二十八宿等無數の天衆有つて、恭敬圍繞す」以上 或は曰く、虚空の中に熾盛の日輪有りと觀すべし、日輪の中に天の寶座有り、座の上に紇哩字有り、變じて金剛寶蓮花と成る、寶蓮花形變じて日天と成る、日天變じて如意輪菩薩と成る、其の色身黄金にして、火頗底光を放つて四天下を照す、首に寶莊嚴の冠を戴き、項背に圓光を佩ひ給へり、身に六臂を具す。」

白衣 此尊の 息災の 爲めに 災法と云ふ 故に 尊は白蓮中に入注

尊は白蓮中に入注 爲す、仍て白衣と直に 號す、慈悲深重に 生ず、恒に一切衆に 入住して、餘念なき 表示なり、蓮花部 部の母なり、餘蓋に 同く、天衣の災難 三摩耶形なり、觀音の 正法妙如來の成佛 の時、菩提樹の 形なり、此印圓鏡

○三昧耶形、白蓮花 ○道場觀 「樓閣の中に紇哩字有り蓮花臺と成る、臺の上に阿字有り淨月輪と成る、月輪の中に伴字有り、鉢曇摩花白蓮花と成る、變じて白衣觀自在菩薩と成る、髮冠純白に襲ふて其身白色なり、頂上に觀自在王有す、説法の相に住し、頭上に淨天の衣を以つて覆ひ垂れたり、左の手に寶鏡を執り、右の手に楊柳の枝を把る、蓮花部の聖衆、並びに一切の星宿恭敬して圍繞せり。」

○眞言 唵濕吠帝濕吠帝、半拏羅縛引悉囉、娑縛合賀

○正念誦 ○散念誦佛眼、大日、本尊、六觀、發願、蓮花部中、請尊聖衆、 ○禮佛 曩謨阿利耶、伴怛囉縛臬囉、冒地薩怛縛、摩訶薩怛縛 ○讚四方 ○護摩息 ○部主正觀

○種子娑梨 ○三昧耶形、吉祥菓

○道場觀 「樓閣の中に紇哩字有り、八葉の蓮花臺と成る、臺の上に阿字有り、變じて

○二十八宿大藥
又孔雀明王は障
難を除く尊にして
二十八夜を眷屬
と爲す今尊も
彼の尊に同する故
に二十八宿大藥
又を
出す
○印 諸觀音の
通印なり
○水月云云 此
法は感應道交の秘
術吉祥成就の妙行
なり月は下り水に
宿り月は澄水に下
らすして是則ち
上らずして是則ち
加持感應の理
因縁和合の義是
れ吉祥速に獲得
するなり
○石山淨
祐の七集、胎の七集あり
七集、胎の七集あり

○或は手
垂れて水を出すは
飢渴の餓鬼を救ふ
義なり
○左の足云云
之れ輪王坐といふ

○揚柳觀音此
法は息災除病延命
に修す揚柳は無
罪障を拂ひ無
することを表す

月輪と成る、輪の中に娑字有り變じて吉祥菓と成る、變じて葉衣觀自在菩薩と成る、天女形にして首に寶冠を載けり、冠に無量壽佛有す、瓔珞環釧、身を莊嚴せり、四臂有り、右第一の手は心に當て、吉祥菓を持す、第二の手は施願の手に作る、左第一の手には鉞斧を持す、第二の手には絹索を持して、蓮花に坐す、無量の相好圓滿せり、○二十八宿大藥又將等の眷屬、前後に圍繞せり。○印 左の手蓮花拳に作つて膝の上に安じて、絹索を持すと想へ、右の手五指を舒べて掌を仰ぐ。施願の印なり○眞言 唵鉢羅拏合捨縛哩、吽引發吒、聲○又○印 八葉の印、言 誦佛眼、大日、木尊、孔雀明王、白 ○發願 蓮花部中、諸尊聖衆、 ○禮佛 曩謨。阿利耶、伴但羅奢縛利。 ○讚智 ○護摩 息 ○部主 正觀

○種子 多娑

○根本の印 外縛して、二中立て合はせ月輪の如くす。曩莫

三滿多唵駄喃、尾瑟多鈎但摩薩但縛、係多、娑縛訶 ○心中心の印 内縛して二中立て交へ合はす。唵鉢納摩、室利曳、娑縛訶 ○又の像、三面六臂、左第一の

手は寶蓮花、次に金輪、次に孔雀の尾、右第一の手は利劍、次に寶珠、次は青蓮花なり、身色日光の如し寶山に坐す、四面に周旋して四攝八供養、二十八宿あり、大日經疏第六に曰く、水吉祥は或は蓮花の中より水を出だし、或は手を垂れて水を出す、以上成蓮房の説 水月觀音の像、大海の中に石山有り、石山の上方を繋けて左の足を垂れ下だし、右の足を立て、膝相ひ又へて左の膝を鉤す、面を少し仰げ思惟相を作して月と水とを詠するの様なり、尊像の頂の上に月輪有り、像の前に海水有るなり、感應、道を交ゆること月の水に浮ぶが如し。以上は教王房、元海僧 私曰く、道場觀等此の如く觀すべきか。

○梵號 阿利耶曩迦室利

○楊柳觀音 此法を修せんは欲は、澡浴清淨にして白髮、或は紙或は突絹を取つて、觀自在菩薩の像を畫いて、慈悲の體を作せ

壇の上に阿字有り變じて蓮花と成る、上に利字有り楊柳枝と成る、轉じて觀自在菩薩
と成る、身色相好莊嚴常の如し、右に楊柳枝を執り、左の手を乳の上に當つ、内外八
供養の菩薩、天龍八部恭敬して圍繞す。」

○印 右臂を屈して諸指散じ垂れ、左蓮拳にして腰にせよ、眞言を誦し已つて(二)身
上を摩す、三 唵縛曰羅但羅摩耶、四 鞞殺社寶嚩、囉惹耶、莎呵 五 三洛又返を滿れ
ば即ち成就を得、阿彌陀、並に多聞天の眞言之を加用す。 ○六 安悉香を燒く、
南無楊柳觀自在菩薩、蓮花部中諸大菩薩摩訶薩 七 此法を修する行者は、殺盜姪を
作さず、五辛酒肉を食はず。 或は大慈大悲は千手千眼觀世音菩薩摩訶薩三十二臂陀羅

尼眞言 唵引蘇悉地迦唎哆喃、哆目多曳、縛曰羅合縛曰羅合吽駄賀曩賀曩吽發吒

○種子咒 ○三昧耶形、ホウゴ 風篋

○道場觀 「壇の上に阿字有り、寶殿樓閣と成る、内に紇哩字有り、變じて八葉の蓮
花と成る、上に阿字有り月輪と成る、上に阿字有り變じて(一)風篋と成る、變じて阿摩

の(一)身上云云 右
の手は右膝に覆
ふ(二)左は胎拳に
て三度胸を摩す
言三度了りて眞
なるなり此の胸を
摩するは除病の意
なり(三)三洛又 三十
萬返をいふ 安息
香なり此の香を
燒けば必ず觀音影
向するなり(四)此
法は在家にも許す
故あり(五)阿摩 觀音
戒あり(六)阿摩 觀音
此に寛廣又は無
畏さもいふ 寛廣
さは有情を度する
こは寛廣の故に
無畏には無畏を以
て衆生に施す故
に修此法専ら減罪
等を減する也(七)惡
業(八)風篋 毘毘
の頭あり(九)如 毘
の頭あり(十)曲 毘
の二十五菩薩極樂
に之を持つあり

(一) 波羅蜜菩薩形
云云 此の菩薩別
に在るにあらす、
柔和の良なり、
(二) 摩竭 鯢魚、
(三) 獅子 無畏を
表す、是れ諸觀音
の施無畏なり

提觀自在菩薩と成る、身白肉色にして(一)波羅蜜菩薩の形の如し、三目四臂にして白師
子の座に乗す、頭を左の膝の下に向けて首に寶冠を戴けり、白蓮花を以つて嚴飾せり、
前の二手に鳳頭の篋を執る、左の一つの手の掌に(二)摩竭魚、右の一つの手には吉祥
鳥を持す白色なり、左の足屈して(三)獅子の項の上に在り、右の足垂れ下せり、嚴むる
に天衣瓔珞を以つてす。遍身に光焰あり、面貌慈悲にして左に向へり、蓮花部の聖衆、
前後に圍繞せり。」

○印 二手蓮花合掌して、二頭相ひ鉤して著けず、而して三度之を招け ○眞言

軌に在り、但し今は 但姪也他、阿摩鉢鉢羅摩鉢、尾摩鉢多羅鉢、三鉢羅比野鉢、伊里
他爾多以下之を書す 寧只里寧、吉里寧、阿嚩賀寧、嚩嚩賀寧、馱羅寧、馱波寧、阿縛多羅寧、薩
縛多羅寧、齡跋寧、阿齡曇跋寧、曇頤曇頤曇頤寧、曇努曇努曇努寧、住の反住上寧、
娑蜜栗殿、觀銘阿舍麼曩、跋羅布哩馱寧殿演、曩莫阿哩也、縛路枳帝、縛濕縛羅野、
娑縛訶 ○又の説、印前の(一)眞言呪 曩莫、嚴摩羅鉢吒曳、唵阿摩鉢、娑縛訶

○正念誦呪 ○散念誦 佛眼、大日、正觀音、本尊、
部中摩訶薩 ○護摩 息災、或 ○部主 正觀 ○諸尊 七十
○勸請 大聖慈悲阿摩鉢、蓮花

指蓮葉、二無名直く立て合はせ、二小指立て交るなり、即ち一印に四種の持物之有り。

○眞言 唵鉢頭合末備攏建制、尼例濕縛合羅、步嚕步嚕併。 ○正念誦呪前の

散念誦佛眼、大日、正觀音、千手、本尊、馬頭、大金剛輪、一字 ○勸請 青頸大悲觀世音、蓮花部中諸聖衆

○護摩息、正觀、諸尊、七尊

○種子三昧耶形、蓮花

○道場觀 「壇上に阿字有り、變じて寶宮殿と成る、中に蓮花有り、上に月輪有り、

上に欠字クツ有り、變じて蓮花と成る、變じて香王菩薩と成る、身肉皆白なり、面貌端正にして頭に天冠を戴き、頸に瓔珞有り、三右の臂垂れ下して五指皆申ぶ施無畏の手なり、其の五指の端より各々甘露を雨して五道の衆生に施す、手の下に並んで黒鬼三五箇有り、左の臂肘を屈して手を左の脇脇に當て、以つて蓮花を把る、其の花は足の下の

蓮花より出生せり、其の花三白紅色なり、足の下の蓮花は赤白紅色なり、項背に圓光あり、上に傘蓋有り、五色の錦綺以つて衣服爲り、兩重の珠條珠條膊膊の上に絡へり一は

赤色、一は黄色なり、無量の聖衆圍繞せり。」

○印八葉 ○眞言 南謨 曷喇怛娜怛喇夜引也一南謨阿離耶跋盧吉羝、稅跋羅引也、

菩提薩埵引也、莫訶薩埵引也、南謨健陀引羅曷羅社引也、五菩提薩埵引也、莫訶薩埵引也、七伊只撒八彌只撒、九謨底丁里曼底、十薩婆頌他、上十沙引彈孃、三迦利沙般拏

引十地錦謎、引十鉢喇拽叱六婆縛訶

○勸請 香王觀音大悲尊、蓮華部中諸聖衆

○種子或は ○三昧耶形或は師子、或は梵籬、或は三股、或は青蓮華の上に五股、或は青蓮華の上に梵籬、其の上に五股、大理趣房傳に曰く、青蓮華の上三股

口傳に曰く、種子或は、三形師子首 ○尊形 師子王之座に乗り智慧の劍を操持

す、左に青蓮花を執り、花臺に三智杵を立つ、首髻に八智の尊あり、暉光十方に遍す。

○道場觀、「想へ、須彌山の上に阿字有り、轉じて妙樓閣と成る、其の中に紇哩字有

り、大蓮花と成る、其の上に心字有り、師子と成る、其の上に阿字有り、淨白圓明の

月輪と成る、其の上に紇哩字有り、八葉の蓮花と成る、其の上に滿字有り、轉じて利

國譯薄雙紙

三五七

○八字文殊法普通法に出たれども今は已達の行用なり。

○智杵先は三股金剛をいふ、然れども獨股も三股も五股も共に智杵と云ふ。

○香王菩薩法
○種子三昧耶形、蓮花
○道場觀 「壇上に阿字有り、變じて寶宮殿と成る、中に蓮花有り、上に月輪有り、上に欠字クツ有り、變じて蓮花と成る、變じて香王菩薩と成る、身肉皆白なり、面貌端正にして頭に天冠を戴き、頸に瓔珞有り、三右の臂垂れ下して五指皆申ぶ施無畏の手なり、其の五指の端より各々甘露を雨して五道の衆生に施す、手の下に並んで黒鬼三五箇有り、左の臂肘を屈して手を左の脇脇に當て、以つて蓮花を把る、其の花は足の下の蓮花より出生せり、其の花三白紅色なり、足の下の蓮花は赤白紅色なり、項背に圓光あり、上に傘蓋有り、五色の錦綺以つて衣服爲り、兩重の珠條珠條膊膊の上に絡へり一は赤色、一は黄色なり、無量の聖衆圍繞せり。」

○印八葉 ○眞言 南謨 曷喇怛娜怛喇夜引也一南謨阿離耶跋盧吉羝、稅跋羅引也、菩提薩埵引也、莫訶薩埵引也、南謨健陀引羅曷羅社引也、五菩提薩埵引也、莫訶薩埵引也、七伊只撒八彌只撒、九謨底丁里曼底、十薩婆頌他、上十沙引彈孃、三迦利沙般拏引十地錦謎、引十鉢喇拽叱六婆縛訶

○勸請 香王觀音大悲尊、蓮華部中諸聖衆

○種子或は ○三昧耶形或は師子、或は梵籬、或は三股、或は青蓮華の上に五股、或は青蓮華の上に梵籬、其の上に五股、大理趣房傳に曰く、青蓮華の上三股

口傳に曰く、種子或は、三形師子首 ○尊形 師子王之座に乗り智慧の劍を操持

す、左に青蓮花を執り、花臺に三智杵を立つ、首髻に八智の尊あり、暉光十方に遍す。

○道場觀、「想へ、須彌山の上に阿字有り、轉じて妙樓閣と成る、其の中に紇哩字有

り、大蓮花と成る、其の上に心字有り、師子と成る、其の上に阿字有り、淨白圓明の

月輪と成る、其の上に紇哩字有り、八葉の蓮花と成る、其の上に滿字有り、轉じて利

三〇 秘印 二頭二
大の間を以ては
獅子の口を以ては
切衆生の惡業煩惱
怨敵不吉祥の事を
敬食すと観するを
口傳とす。

三二 釋林錄 釋林
寺宗觀の請來録な
り。

二〇 衣を加持此
の印明の功勝る
、故に衣服加持に
用ゆるなり。

三〇 破諸宿曜云
云。獅子口の印な
り。
三三 振鈴云云。本
尊有縁の印を結
誦する所に大凡そ
三處あり。一は、
五大願の次、普供
の前の或は振鈴の
次、五供の前の或
は第三度の本尊加
持の處なり。又餘
處に之を加へ用ゆ
るは、之れあり。

劍と成る、轉じて大聖文殊師利菩薩と成る、身色黄金にして光明、法界に遍す、首髻に八智の尊あり、右の手に智劍を操持し左の手に青蓮花を執り、蓮花の上に五股杵を立つ、身の瓔珞莊嚴威德無比なり、曼荼羅の聖衆三重に圍繞せり、八大童子、四大明王、十六大天等、各々位に隨つて次第に安立す。○印 ○印二手内縛して、二大指を並べ立て、屈して師子の口の如くす、二大二頭の間を以つて師子の口と爲すなり、觀念に口傳有りなり。
○真言 一光網
「我」 「無垢光」 「請召」 「救護惠」
「依口傳加之」 「地惠」 「不思議惠」 「計設尼」

師傳に曰く、此八字真言は、八大童子の種子に宛つ、仍つて真言の末に中尊の種子を加へて之を誦す、所謂・q字是なり。但し件の種子は事に隨つて改め用ゆべし。

○息災 若し息災除難の事等を求めば、心中に當て、滿字を書す。 ○増益 若し福慶縁位吉祥の事等を求めば、心中に當て、滿字を書す。 ○敬愛 若し怨人を降伏する事を求めば、心中に當て、滿字を書す。

○降伏 外道佛法を信ぜざる等の爲めには惡法をして、師傳に曰く、道場觀の種子、並に真言の終の字、事に隨つて改め加ふる事此の如し、但し字を改めず通じて滿字を用ふるは常の事なり。

○又印 文殊師利法寶藏陀羅經 には八字の陀羅尼を説く。次に如意寶印を説いて曰く、兩手を持つて相ひ又へ、二頭指相ひ挂へ、其の大母指を屈して掌内に入れ相

ひ又ふ、此印亦は大精進如意寶印と名づく、即ち陀羅尼を説いて曰く、即ち陀羅尼を説いて曰く、頭指實形。二大 唵帝儒濕縛合羅、薩婆羅多、合娑陀迦、悉地耶合、悉地耶、合、眞多摩提、囉多娜合、呼、若し此真言を誦じ其の印を結べば、能く廣く一切の事業を作す、若し身上を莊嚴せんと欲は、着衣の時は、衣を加持すること七返して之を着すれば即ち護身を得、常に衆人の恭敬を得、若し陣に入つて戰鬪せんと欲はん時は、所有の器械並に皆加持すること一千八返して、隨身して將に入れれば即ち降伏することを得て其賊自然に退散す、若し一切の怨敵を降伏せんと欲はば、此真言を以つて衣を加持して之を着すれば即ち降伏を得。云々 ○又印 胎藏文殊 二手虛心合掌して、二中指を以つて二無名指の背に屬け、二大指並べ立て、二頭指中節を屈して端を合せて二大指の上に置け。 ○眞言 曩莫三曼多沒駄引南 引係係俱摩羅迦、尾目訖底、反、鉢佉引悉體以反、多、娑麼合羅娑摩合羅、鉢羅合底枳然、合娑縛引、訶引 ○又印 外縛して、二中指を以つて、四處を印す。 ○眞言 八字 小野の秘説に曰く、妙吉祥 破諸宿曜の印言之を用ゆ、極秘の説には、件の印を以つて本尊八字の眞言を用ゆ。文 振鈴の後は八大童子の印明之を用ゆ。胎藏次第に或は本尊加持の次に之を用ゆ。 ○正念誦 八字眞言

○降三世降三世
此の曼荼羅は此の
曼荼羅の内眷有る
なり。

○八佛文殊の
八智八佛と心得る
なり。

○劍に火炎無
し、虚空蔵の劍に
は火炎あり、文殊
の劍には火炎な
し、花座の印、常
座と観ず、八獅子
の座と観ず。

○散念誦佛眼。大日。本尊。八大童子。○降三世。大威。

○伴僧の呪八字。○御加持の呪

上同。○勸請三世覺母大聖尊。八大童子諸眷屬。○發願本尊聖者八字文殊。八大童子諸眷屬等。○禮佛。南無

阿利耶曼殊師利返。○密號。般若金剛。又吉祥。○讚四智。又。○結界馬頭。○字輪觀。大

○八大童子各別の種子、三摩耶形、△請召

○異には、梵北△救護、南△烏波、東△光網、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

○異には、南△地惠、北△救護、東△烏波、西△計設

羅に依つて之を書す。

曼荼羅の事。儀軌に曰く、「其の曼荼羅の法は、先づ心に當て一圓輪を作せ、由滿月の如し、中心に當て、滿字を書せ、次に字の後の北面より唵字を書せ、次に右に旋つて東北の角に阿入字、東方に味字、東南の角に羅字、南方に鎗字、西南の角に佉字、西方に左字、西北の隅に洛字、此の九字を以つて内院中尊と爲す、或は院の中に於て妙吉祥童子を書け、其の頂に八髻あり、前に五髻あり、頂上に一髻、頂の後に兩髻あり、一一の上に皆佛身有ます、次に第二院に入文殊殊を安布することを説く、布位の法は、尊の前に南面に請召童子を書け、次に西南の隅に計設尼童子を書け、次の四方の右邊に救護惠童子を書け、次の西北の隅に烏波計尼童子を書け、次の後面の北方に光網童子を書け、次の東北の隅に地惠童子を書け、次の東方の左邊に無垢光童子を書け、次の東南の隅に不思議童子あり、此の如く八方の妙吉祥童子菩薩、皆面を中尊に向へ、奉教の勢の如し、皆蓮花の上に座す、一一各々師子に乗る、二手に各々標幟印契を執持すること有り、書くこと須らく如法なるべし、圓輪の外四角の中に於て四忿怒明王を書け、東南の角に降三世金剛を書け、西北の角に無能勝明王、西南の角に閻曼德

迦金剛、東北の角に馬頭明王を書け、○次に第三院に十六大天外護を説く、尊の前に當つて鈎菩薩、次に西に焔魔后、次に西に羅刹主、角に當つて燒香菩薩、次に角の北に羅刹后、次の北に水天、西門に索菩薩、次の北に龍天后、次の北に風天王、西北の角に花菩薩、次の東に毗沙門天、尊の後の北方に鎖菩薩、次の東に毗沙門后、次の東に伊舍那天、東北に燈菩薩、次の南に伊舍那后、次の南に帝釋天、左方の東門に鈴菩薩、次の南に帝釋后、次の南に火天、東南の角に塗香菩薩、角の西に火天后、次の西に焔魔天。」以上第

○護摩息災に就い ○部主 馬頭。小野の秘説 ○本尊段 ○自加持 ○召請 ○諸供物 眞言 ○加持物 ○撥遣 ○諸尊段 否は任意、鈎召の印を用ゆ、秘説に曰く、天變の時九曜七星、之を用ゆ。醍醐の傳也。又の説には、三十七尊之を用ゆるなり。

（一）八字文殊鎮 鎮に三あり、不動葉衣は新宅の鎮なり、今の鎮は人家に崇ある時に之を修す。

（二）梁の上に見せざる様に納む。人、の神を借るとは人の家を借るとり、物を成す等なり、如し。白檀 八字文殊に家に崇あり、悪鬼等ありて家穩ならざる時、圖の如く書き箱に入れて梁の上に置く。

○（一）八字文殊鎮 師説に曰く、板を以て月輪を造り胡粉を塗り、月輪の中央に本尊の種子を書き、其の廻りの中に納め壇の上に安け、修法終つて後、其家の三梁の上に之を納む、此の鎮は神人の家を借る事等之有る時に之を行ふべし。

○大聖文殊鎮家の法 梵本の字を以つて青き紙に書記して、中に種子の廻りは、眞言なり、寢殿の中の梁の上に、白檀の宮に入れて之を安すべし。今の鎮は此文の意なり。

月の輪の圖



（朱）月輪 納の箱は 供ならば 鈴の後、 護摩なら ば中瓶の 後に安す べきなり。云々

- 注進 八字文殊法一七箇日支度の
- 事合 蘇 蜜 名香 白檀
 - 五寶 五香 五藥 五穀 壇一面
 - 方五 脇机二 燈臺四 禮 盤一脚及
 - 壇敷布一 佛供覆布二 芥子 袋
 - 大幕一 壇供米十六石九斗 燈油一斗
 - 桶五口 此の内、爐桶一口。厨師桶一口。神供桶二口。足桶一口。杓三枚（大小）
 - 折敷三枚 闕伽脚一 長櫃合 阿闍梨

梨 伴僧口 承仕人 駈仕人 見丁人 淨衣（白衣、裏は）衣を色に作る

右注進如件 年月日 行事大法師阿闍梨

八字文殊御修法所

- 奉供 大壇供二十一箇度 護摩供二十一箇度 諸佛供三箇度
- 奉念 佛眼眞言 大日 本尊 降三世 大威徳 無能勝 馬頭 破
- 宿曜障 一字金輪

種子を以て五尊の
種子となし眞言と
なす。

○次に、各別印明△法界虚空藏。」「二手外縛して、二中指寶形の如くす。四處加持 唵
縛曰羅、囉怛曩、鏝、娑縛訶△金剛虚空藏。」「外縛三股の印、中指寶形此印を結んで額に置く 唵
縛曰羅、囉怛曩、吽、娑縛訶△寶光虚空藏。」「外縛して、二中二頭二大寶形。右頂 唵
縛曰羅、囉怛曩、但洛、娑縛訶△蓮花虚空藏。」「外縛二中寶形、二頭蓮葉。後頂 唵縛曰羅
囉怛曩、訖哩、娑縛訶 △業用虚空藏。」「外縛、二中寶形、二頭 唵縛曰羅、囉怛曩、惡
娑縛訶 ○次に金剛吉祥印明○次に破宿曜障の印明 ○次に正念誦惣呪前の如し○散念誦佛
大日。本尊惣呪。各別八字文殊。金剛吉祥。破宿 〇伴僧胎藏虚空藏院の明なり。但し 〇御加持の呪
囉障。成就一切明。軍荼利。大金。一字金輪。 〇發願五大虚空藏、七曜星宿、諸大眷屬、但 〇
上 〇勸請本尊五大虚空藏、七曜星宿諸眷屬、但 〇發願五大虚空藏、七曜星宿、諸大眷屬、但 〇
禮佛 南無達麼馱都、阿佉沙佉羅婆、胃地薩怛縛耶、摩訶薩怛縛、南無縛曰羅、アギ
ヤシヤキヤラバ、ボウヂサトバヤ、マカサトバ。南無囉怛曩泥惹、アギヤシヤキヤラ
バ、ボウヂサトバヤ、マカサトバ。南無鉢納麼、アギヤシヤキヤラバ、ボウヂサトバ
ヤ、マカサトバ。南無羯磨泥縛、アギヤシヤキヤラバ。ボウヂサトバヤ。マカサト
バ。 〇讚四智聖に 〇護摩息災増益事に從 〇部主、佛眼息災寶生増 〇本尊段 自加持惣印
召請 撥遣 諸供物惣 加持物上 諸尊七尊 〇世天段常の如し、但し七曜星宿等、

〇〇〇〇 求聞持常喜院
〇梵號 阿梨耶、阿佉沙佉羅婆 〇密號 如意金剛 〇種子字。或は咒 〇
三昧耶形、如意寶
〇尊形 軌に曰く、菩薩と満月と増減相稱へ、身金色に作せ、寶蓮花の上に半
跏して坐す、右を以つて左を押す、容顏殊妙にして熙怡喜悅の相なり、寶冠の上に於
て五佛の像有り、結跏趺坐す、菩薩の手に白蓮花を執り、微しく紅色を作す、花臺の
上に於て亦如意寶珠有り、吹瑠璃色にして黃光發焰あり、右の手復與願の印に作す」
〇印 軌に曰く、護身手印の相は、先づ右の手を拳にして、然して後頭指と大指と
相捻して、狀香チを捻ヒネるが如し、其の頭指の第二の節を屈して、第一の節極めて端直なら
しめよ、此の印を作し已つて、頂上に置いて陀羅尼一返を誦せよ、次に右の肩左の肩
心喉、亦皆是の如し。文又曰く、即ち手印を作して、掌に淨水を承けて陀羅尼三返
を誦せよ、即ち之を飲め、其の手の印の相は、先づ右の手の五指を仰け舒べて、其の
頭指と大母指とを屈して相ひ捻す、狀香チを捻ヒネするが如し、是れは此の虚空藏菩薩の如

(一) 兩印 地水火
 の三指を属する
 屈せざるの印
 なり、加持の時
 屈し、浄水等の
 舒するに随つて
 舒するなり。

(二) 一日一上
 日に修する。一
 時なり。一日兩
 時は修する。二
 時なり。

(三) 尊の向云
 百萬返の内は行
 東に向ひ蘇加持
 時は南向くなり
 は北に向くなり
 五五の綵色な
 四四の綵色な
 合一尺二寸なり
 なり。水壇は八寸
 り。以て作る壇
 横の處にて寸方
 取。蘇黄色にし
 六。蘇黄色にし
 て。堅地の相。煙
 七。煙は中、煙火
 氣は下なり。

意寶珠一切の事を成辨する印なり。」文私に尋ねて曰く、今は一印の法なり、儀軌に
 (一) 兩印を出すこと如何、又二印の中に何れを以つて本とするや、或る師曰く、風空相
 ひ捻するを如意寶印と名づく、仍つて一印と云ふか、地水火の三指は用に随つて卷舒
 す。」

○眞言 軌に曰く、南牟、一阿迦去捨反二揭反婆引耶、余可唵阿唎五迦入摩利六慕
 利。七娑縛訶 ○眞言句義 南無の義阿伽捨の義揭婆耶也唵の義阿利有迦摩利蓮花に三名
 有り、未敷なるは風摩羅なり、將さに落ちんとするを迦、慕利、光明の義、莎訶の義 ○畫像の材體、軌に曰
 摩羅と名づけ、中に處して盛なる時を分陀梨と名づく、慕利、光明の義、莎訶の義 ○畫像の材體、軌に曰
 白麤、或は 〇身量 下は一肘を減ぜず、或は復此よりも 〇修所 空閑。寂靜。淨室。
 浮き板の上 〇一日一上或は一日兩 〇尊の向ふ方面を正しく西に向ふ。或は北に向ふべし。師
 上集經に曰く、又三時。 〇咒遍 多少初の如く増減を得ずして百萬返を滿 〇壇集經に
 の衣色 師曰く 〇數珠 水精或 〇咒遍 多少初の如く増減を得ずして百萬返を滿 〇壇集經に
 四肘五綵 別に一の方に、木曼荼羅を作つて、下は一肘に至せ、此れに過ぎても意に任
 せよ、壇の下には四足を安け、或は編附けよ、上の面より地を去ること稍々、四指を
 須いよ、其の材は沈檀最勝なり、或は栢等の香有る木。 〇蘇一兩集經に曰く、三
 兩」 ○蘇器 熟銅 私曰く、必ず減金を塗るべし。 〇悉地の相、軌に曰く、氣煖火」

下中上は蘇悉地に曰く、煙氣光。」集經に曰く、煖焰火。」 ○供物 塗香。白檀之
 品の相は蘇悉地に曰く、煙氣光。」集經に曰く、煖焰火。」 ○供物 塗香。白檀之
 沈檀花。時花。若し無き時は、梗米。蕎麥。食。葷穢を除きて 燈。牛蘇油を用ゆ亦 〇牛蘇加持作
 龍腦花。桶、相等の葉、或は丁香を用ゆ。 新淨を須ゆ 燈。通しても許す 〇牛蘇加持作
 法 師説に曰く、日月蝕の日に當つて、先づ百日の行法を結願す。 或る説に曰く、結願
 當 次に本尊木檀等を露地高顯の淨處に移すこと常の如し、一座の行法を修して正念誦
 に至つて、返數を限らずして日月蝕を待つ、若し蝕の顯現する時には早く正念誦の珠
 を置き、散念誦の珠を取つて急速に返數了はる、一字の明を残して金を打つこと一度、
 ○次に發願 先づ護身の印を結んで明を誦する。三返 至心發願 加事牛蘇 唯願大日 本
 尊界會 虚空藏尊 兩部曼荼 諸尊聖衆 大慈大悲 同共加持 轉成五智 醍醐妙藥
 服食此藥 即護聞持 一經其耳 文義俱解 記之於心 永無遺忘 ○次に五大願 ○次
 に明を誦し蘇を攪く、復滿に至る迄返數を限る勿れ、復一字以後は常の如し。
 ○行法次第 成蓮院の記に之有り。大 問護淨如法の作法云何、師説に曰く、右の手に護
 身の印を結び身の五處の肩。右の肩。左の肩。左の腕。左の腰。を加持す、左金剛拳にして腰に安す。
 問壇邊に置在す云云 如何。 二説あり、裏書に曰く、師曰く闍伽等供具の事なり、二
 説の中に只常の如く兼て之を居えるなり。」

問淨水を飲む、云云實に之を飲むか。師曰く、實に少分を飲み鍔字の智水を観ず、私に證を擧げて曰く、終經第六、攝真實經の中、十一面軌の中等を引見すべし。」或師曰く、只觀法なり、六月成就の法に曰く、

問闍伽水を酌む事云何。師曰く、晨朝に之を酌み二桶に分つ。一は闍伽、佛供等、一は手水淨水。

問堂門に至つて作法有りや。師曰く、護身の印を作して明三返を誦す戸を開いて入る。問像前の禮拜其の作法云何。又曰く、護身の印を心に當て、明を誦すること三返して之を禮せよ。問覆面を去ける事云何。二説あり、一に曰く普禮以前に佛邊に歩み寄り手を以つて之を取り去る、一に曰く、著座以後鳥口トリクツを以て之を去ける。前

說便宜なり、但し軌の文は後説に叶ふか。問灑淨の様云何。又常の如く覽鍔等を用ひて加持するや。師曰く、覽鍔等を用ひず、只右の手を護身の印に作り、地水火の三指開き舒べ、左の手に散杖を以つて水を取り右の手の印の上に置いて、明を誦すること三返して供物等及び自身を灑ぐ、是れ即ち加持なり、第二第三も亦是の如し。○

表白○神分○祈願○五悔以下金掌○發願○五大願○普供○三力常如但し金掌を收めて護身の印に作り、心に當て、之を唱ふ、發願して曰く、至心發願 唯願大日 本尊界會

虛空藏尊 降臨壇場 所設妙供 哀愍攝受 護持弟子 心中所願 速疾成就 或師曰く、五悔乃至三力は之を用ひず、表白神分祈願のみなり。

○道場觀 護身の印を作り心に當て、目を閉ぢて觀すべし、「本曼荼羅の上に阿字有り、字變じて月輪と成る、月輪中に紇哩字有り、字變じて寶蓮華と成る、蓮華の上に但洛字有り、變じて如意寶珠と成る、寶珠變じて虛空藏菩薩と成る、身金色を作す、相好莊嚴せり、首に五佛の寶冠を戴き、寶蓮花の上に半伽して坐す、而も容顏殊妙にして熙怡喜悅の相なり、左の手に白紅色蓮花を執る、花臺の上に於て如意寶珠有り、吠瑠璃色にして黃光發焰あり、右の手は與願の印を作す、五指垂れ下だして掌を現はにして外に向ふ、菩薩の身と此像と等しくして異有ること無し。」

道場觀終つて七處加持用否如何。師説に曰く、之を用ひず。問本尊を請するに二十五返とは何の意ぞや。師曰く、私曰く、觀虛空藏經に曰く天冠二十五佛 問闍伽は之無きや。師曰く、有るべし、曰く左を手印に作り闍伽の器を置き、右は護身の印に作りて之を加持す、明を誦すること一返、次に右、左の手に同じく合はせ捧げて明を誦すること一返、本尊の足を浴すと想へ、水を火壇に沃ぐこと三度、然して後本處ミナトに置く。」○花座○五種

供養常の如し、但し手印を作り、上に供物を置 ○讚四智。本尊。護身の印を用ゆ。 ○禮佛十八道の如

攝の次に本尊南無 ○本尊加持印を結び右拳にして風空 明を誦すること三返して五處を加

持す。○正念誦正念誦の印 問常途の加持念珠法を用ゆべきや。師曰く、用ゐず、

當印明にて兼ねて加持を成すか。又曰く呪返を満すること、此法は正念誦に在り、二

座ならば各々五千返なり。」 ○入法界觀護身の印 ○散念誦佛眼。大日。本尊。八字文殊。

○解界護身の印にて明一 大虚空藏經に曰く、東方には一寶莊嚴佛國菩薩なり、一

寶とは虚空の印なり。」文虚空藏經に曰く、南方香集世界勝花敷藏如來所從の菩薩なり」

文 問二時若くは三時、之を修する其時尅云何。師曰く、二時ならば晨朝と日没、

三時ならば日中を加へよ。」問或説に曰く、此法を修するの間、毎日明星を拜するこ

とを用ゆるや。師曰く、今流は必しも然らず、明星の出づる時不定の故なり。」問

或か曰く、百日の間、滅日没日をば、之を除いて百箇日を取る、但し之を除くとも例

の如く之を修して、然り而して其日の返數は百萬返の内には入れずと」用否云何。

師曰く、今流は然らず、只蝕の日を計カへて結願の日に當つて、開白の日も善惡の日を

擇ばず。」問蘇は開白の日より之を置くや。師曰く、二説あり。私曰く、結願の日

に之を置く宜しきか。」問蘇器は木壇の何れの處に置くや。師曰く、蝕に逢ふの

時木壇の中心に、乳樹葉七枚之を敷き廻はし其上に之を居く、但し以前は大壇の上へ

火舎の内。」問木壇は極めて卑しきなり、繩床を用ゆる時は云何。二説あり、今

流は大壇の上に木壇を置く。中心に之 闍伽等は壇に之を備ふ。」問五色並に楸の用

否如何。師曰く、大壇に木壇を重ねる時は、大壇に五色を曳くか、但し木壇許りな

らば之を用ゐず。」問知識助伴は、蝕の時には何の呪を用ゆるや。師曰く、軍荼利大

咒なり。」問蝕の日には行者は必ず斷食するや。師曰く必ず爾なり。」問蘇器の様

如何。ヨキ 吉を用意有るべきか。」問日蝕には尙不審有るべし。日光の熾氣溢すること

有らんか。之を知り別くる云何。師曰く、問乳樹葉の敷き様云何。師曰く、此の

散杖は日月蝕時の所用なり。以前毎時の所は、只常の如きの散杖なり。以上 問散杖を

削ると否との二説如何。只常の如き杖なり。」問蘇を攪く時兼ねて蝕を見るや。

軌に曰く、目に日月を觀ぶ兼ねて又蘇を見る。」文集經五に曰く、呪師○若し日月の

一をのみ見れば驗を得ず」文同六に曰く、日月を仰ぎ看蘇を呪す」文千臂經に曰く、

別に人をして看せしむ呪師若し見れば法即ち成せず。」文 問蘇を分つ作法云何、四

の本尊、師、行者、智識なり或は五に分つ、曰く先づ成就者を加ふ。問本尊に捧ぐる様如何 二説あり、一に曰く、本尊奉送の前に、少分して樹葉等に置き、壇の便宜の所に供す、一に曰く、結願奉送の後、座より下りて本尊に捧ぐ。」以上

○結願作法(別紙に) 出ず 香花等の供物、常の時に倍増して三寶に供養すべし。先づ壇等を以つて高顯の淨處に移して、木

曼荼羅の上に乳樹葉七枚を敷いて、其の上に蘇を入れる器を置き、例の如く修して他の顯現の時に臨んで、散念誦了つて、一字金剛の明を除く 散念誦の數珠を置き、正念誦の數

珠を取つて金丁願して曰く、至心發願 加持牛王(異には)王 唯願大日 虛空藏尊 兩部

界會 諸尊聖衆 大慈大悲 同共加持 轉成五智 醍醐妙藥 服食此藥 即獲聞持

一經耳目 文義俱解 記之於心 永無遺忘 次に左の手に念珠を取り、正に右の

手に乳樹木を取つて、本尊の明を誦して右に蘇を攪き廻らし、兼ては蝕せる日月を見、

兼ては蘇を見る、返數を限ること無く之を加持して、却退圓滿の後、正珠を置き散珠

を取つて、一字の明を滿し祈願了はる。 ○次に後供例の ○次に讚。此れより以前

に結願事の由え有るべきなり、下座以後に、別に蘇を四つに分つか。四に分つに口 四分

とは本尊と師と知識と行者となり。以上 別紙以上御口傳師私記を以つて書き取り了る。

同別紙裏書に曰く、正念誦方の事、衍師の口に曰く、常途に似ず、謂はく左右の兩手に護身の印を作し、風空寶形にして、風を以つて珠を捻じて數を取り、左の風空を捻じて珠を出だす、兩の手相ひ合はす、其の方は、尋ねて曰く、何物を以つて乳を分つや、又本尊に奉るは何處に置くや。又曰く行者の食する方如何、本尊に奉りし残り如何。愚書、師曰く、乳樹葉とは、桑並に穀カチなり、師又曰く、散杖は穀、若くは桑の枝なり、其の太さ小指許りなるを之を用ゆ、皮は削ると削らざると二説なり。」文

○滅惡趣法

○種子ドボウ ○三昧耶、ミ 樹枝 ○道場觀 「樓閣の中に大蓮花有り、花の上に月輪有

り、輪の上にミ字有り變じて樹枝と成る、變じて滅惡趣菩薩と成る、白黄色にして左

の手仰げ火を屈し、地水風の空を舒べて心の上に當つ、右の手は施無畏なり、赤蓮花

に坐し給ふ、除蓋障院の八菩薩、乃至無量無數の眷屬、前後に圍繞せり。」 ○ミ 印 左

の拳、左の腰に安ず、右の手、五指を舒べて外に向ふ施無畏の 三度物を打たんとす

る勢の如くす、地獄の門を打破すと想へ。 ○眞言 曩莫、三曼多沒駄引南、特ボク情ボク娑

(一) 滅惡趣 此の
尊地藏と同體を習
ふなり、或は別體
破惡趣とも又は除
罪の爲めに之を修
す。樹枝 柳なり
(二) 印 右より左
の方へ打つ勢なり

難、阿毗庾合達羅坭、薩但縛合馱敦、娑縛訶○正念誦前の眞言なり○散念誦佛眼。大日。本尊。除障。除疑。施無畏。○伴僧御加持 ○勸請 大慈大悲滅惡尊、除蓋障等八菩薩 ○發願 本尊聖者滅惡尊除蓋障等八大菩薩 ○禮佛 ○讚四 ○護摩息 ○部主除蓋障尊之請す ○諸尊除蓋障院九

○般若菩薩法
法と心經の法と大
旨同じ事なり。

○般若菩薩法

○諸子ジニヤ 或はガ ○三昧耶形、梵篋 ○道場觀 「觀想せよ、心の前に惡字有り、變じて七寶の樓閣と成る、其内に殊妙の壇有り、壇の上に紇哩字有り、變じて蓮花臺と成る、臺の上に月輪有り、上に多字有り變じて梵篋と成る、變じて般若菩薩と成る、白色にして面上に三眼有り、左の第一の手には梵篋を持して心に當つ、第二の手は掌を仰げて臍の下に安ず、第三の手は仰げ舒べて亦風指を屈す、右の第一の手は風指を屈して四指を堅て、梵篋の上に當つ、第二の手は施無畏、第三の手は掌を堅て、水指を屈し四指を舒べ、胃ヨコを著し赤蓮花に座し給ふ。」○印眞言○梵篋の印常の如し ○眞言 唵地室利瑟嚩多、尾惹曳、娑縛訶

○護摩息 ○部主不 ○諸尊七十

○勸請 般若佛母大薩埵、如來部中諸眷屬

○持世菩薩法石
法は修す、表裏に
之を修す、表裏に
石山とあるは石山
淳祐の御作なり。

○持世菩薩法石

(袖書) 東方最勝燈王如來經一卷 持世陀羅尼經一卷 持世經四卷。一名法印經或三卷 持句神呪經一卷。亦云 羅尼句 持世陀羅尼別行功能法一卷 安宅神呪經一卷 佛說三享厨經一卷 三厨經一卷 陀羅尼鉢經一卷 以上 書

○道場觀 「樓閣の中に八葉の大蓮花臺有り、上に日輪有り、輪の中にぞ馱字有り、字變じて頗羅菓此に大石と成る、菓變じて持世菩薩と成る、其の像身容青黄色にして、蓮花座の上に坐して、結跏趺坐せり、身に種種の瓔珞を作す、頭冠環釧種種に莊嚴せり、右の手の中に於て頗羅菓を執る、左の手は當に施無畏の手に作すべし、其の像の面は當に微笑の容に作すべし。」

○印 此の印
に三明なり。

○印 無名指を以つて大指の上の節文を捺す、又大指を以つて無名指の甲の上を押す、兩手も亦然なり、腕を相ひ合はせ兩の小指又へて、中指の中節の背に博げ著けよ、二中指頭し相ひ柱へて二大指を並べ、二頭指直ぐ堅つる、即ち是なり。 ○眞言 唵、筏索馱上利、上娑縛合訶。此を根本の呪名づく ○心眞言 唵、室利合筏索、娑縛合訶 ○

心中心真言 唵婆蘇、娑縛訶 以上石山

印の口傳に曰く、二手虛心合掌して、二無名指を屈して掌に入れて背を合はせ、二大指を並べて二無名指の背を押す、而して二小指を直く立て右を以つて左を押し相ひ交へて、各々二中指の中節に屬けよ二中二頭顧る側にして合すなり一印を結んで三種の真言を誦するなり。 ○勸請 持世菩薩慈悲尊、蓮花部中諸眷屬。 ○護摩増益 ○部主如意 ○諸尊三十七尊

○散念誦の次に、(二)金剛般若之を讀むべし

○藥王法

○種子 〇三昧耶形、蓮花

○道場觀 「樓閣の中に八葉の大蓮花臺有り、上に月輪有り、輪の中に鞞バイ有り變じて蓮花と成る、變じて藥王菩薩と成る、相好圓滿し眷族圍繞せり。」

○印金剛合掌 〇真言 唵鞞殺社、囉惹耶、娑縛訶 〇正念誦 〇散念誦佛眼。大日。本尊。不動。一字。

勸請 藥王大士慈悲尊、菩薩聖衆諸眷屬 〇發願 藥王菩薩、諸菩薩等

○禮佛 〇讚四 〇護摩

(一)金剛髻 此法は豐饒の爲に修する故に執着を破さふ。爲に讀むといふ。(二)藥王法 此法は除病延命に修する法なり。藥王の尊形は法華曼荼羅に在り。

〇〇〇馬鳴菩薩法東方に向ふて之を修す、蠶養の爲めに之を行すべきなり。

(一)馬鳴菩薩法 釋論に出たり、此の法は蠶を養はんが爲に修す。東方檀波羅蜜の方なる故に蠶を養ふは此の菩薩の慈悲なり。

「樓閣の中に八葉の大蓮花臺有り、上に月輪有り、輪の中に迦字有り、字變じて線勾形と成る、形變じて馬鳴菩薩と成る、色相白肉色にして掌を合はせ、白蓮花に坐して白馬に乘れり、白衣を著し瓔珞を以つて身を莊嚴す、首に花冠を戴き右の足を垂る。檢るに六臂各々標物を持す、別本の眷屬圍繞せり。」馬鳴菩薩 分形大千 化爲蠶室 口吐絲綿 巡千世界 普音在光 供養感應 福祚無邊或は菩薩の通證を用ゆ

○印 左の中指無名指を屈して、大母指を以つて彼の二指の甲を押す、頭指及び小指を舒べて心の上に安す、右の手に數珠を把り真言を念す、此れを王環成就一切所願の印と名づく。 別本の軌に曰く、十指を交へ右左を押す腕相ひ離れ、印を以つて五處を印す。」文 ○真言正念誦に此 曩莫三多沒駄那、迦迦馬鳴吃哩、吒羅佉吃哩吒羅佉、毗多羅儻、娑縛訶

○又の呪、別本の軌に曰く、曩莫三曼多沒駄南、迦、縛日羅、合縛多曩佉、馬鳴紇里、二娑縛訶 ○心中心真言、唵縛日羅、斫迦羅、吽弱吽鑊斛 (三)以上石山

○飄梵語集に曰く、阿濕縛鑊沙。此に馬鳴と云ふ 口に曰く、(三)三形の線勾形とはヘンなり。但

(三)以上石山 山の道場觀に出づ。(三)三形 三形は管なし糸を縮れたる形なり。然れども形像は糸を巻いて持し玉ふ。

〇愚 成賢なり

〇龍樹 此法は智惠延命の爲に修するなり。

〇阿彌陀 此の尊は極樂往生の人なる故に阿彌陀を用ゆるなり。

形像は糸一管か。〇散念誦 佛眼。大日。本尊。白衣。〇勸請 馬鳴菩薩慈悲尊、蠶養守護諸眷屬。〇發願、本尊聖者。馬鳴菩薩。蠶養守護。諸眷屬等。〇愚曰く、普通には本尊加持の時は念珠を置く、此法は印を結んで數返を取る、但し眞言の數返如何。

〇龍樹法

〇種子 〇三昧耶形、梵篋

〇道場觀 「樓閣の中に草座有り、座の上に曩字有り、變じて梵篋と成る、變じて龍樹菩薩と成る、聲聞の形像にして袈裟衣を著す。」〇印 金剛合掌 〇眞言 曩莫、三曼多沒馱南、佉多吽、莎賀

〇又眞言 印上の唵縛日羅、婆沙覽、莎賀

〇正念誦 〇散念誦 佛眼。大日。阿彌陀。本尊。馬頭。大金。一字。

〇發願 龍樹菩薩、極樂界會、諸眷屬。羅底、度多羅那耶、娑縛訶

〇同甘露眞言 唵沙枳底、波波娑

〇又龍樹眞言二種

唵薩縛、樞婆提、娑縛訶

唵那伽闍賴樹那、娑縛訶

國譯薄雙紙 諸尊法第一終

國譯薄雙紙

諸尊法

諸尊法第二 第二重第三目次

〇不動 付安 〇愛染

〇一肘觀 〇妙見

〇水觀喜 〇五十天

〇梵天 〇帝釋

〇最勝太子 〇訶利帝

〇水迦羅 〇寶藏天

〇大黒天 〇曩俱利

〇摩利支 〇迦樓羅

〇辯才天 〇太山府君

〇四天王 〇大自在天

〇伎藝天 〇深沙神 以上二十二尊

本次第は別して甚深なり、般若寺の御傳を以て本と爲す、即ち道場觀字輪入我々入軌用由りて又立印之軌を製するなり。

薄雙紙 諸尊法第二

〇〇不動法 (般若寺作) 房中より佛前に至る作法常の如し

〇壇前普禮〇著座普禮〇塗香〇三密〇淨三業〇三部〇被甲〇加持香水〇加持供物小三

里呪〇覽字觀〇觀佛〇金剛起〇普禮〇表白〇神分〇祈願〇五悔〇發菩提股印

〇勸請大聖不動威怒王。四大八諸忿怒。〇發願不動明王。四大八諸大忿怒。〇五大願〇普供養三力〇四無量觀〇大金剛

輪〇地結〇四方結〇金剛眼〇召罪〇摧罪〇業障除〇成菩提〇大精進二惠劍密印。

〇二羽三補吒して、風、初節を屈して峯を合はせ、空の上の節を跂へよ。眞言

曩莫、三曼多、縛曰羅、救憾

〇道場觀羯磨の印「觀想せよ、最下方に欠字有り、變じて虚空と成る、虚空の中に

憾字有り、變じて風輪と成る、風輪の上に覽字有り、變じて火輪となる、火輪の上に

鑲字有り、變じて水輪と成る、水輪の上に阿字有り、變じて地輪と成る、地輪の上に

波羅字有り、變じて金龜コンクキとなる、金龜の上に阿字有り、變じて八葉の蓮花となる、蓮

花の上に大寶樓閣有り、樓閣の内に寶磐石の座有り、座の上にな字有り變じて智劍

心合掌無所不至の虚
印言なり、惠劍と
は即ち智劍、今に
て通途なり、今に
大精進密印と名け
に密印と云ふ、尚
に極々秘説は九徹
の印言なり、九徹
は二羽三神呪
虚心合掌なり、峰さ
は指の端なり、峰さ
器界觀なり、初は
金剛界の如し、印は
須彌山なり。此は

身結界なり、劍印
は劍印にて常の如
し、三迎請、是れ佛
部心三摩耶印なり
り、佛菩薩八葉、普
佛菩薩八葉、天等
王は六葉、然るに
四葉なり、然るに
不動愛染は、然るに
異に愛染は、然るに
日直に其の部の大
現し玉に八葉の用
是れ口傳なり、此の
印は十四根本の
す、軌の本説とな
賢加ふ、師説とは
勝賢の記、師主は
口説成賢の記、師
玉ふなり、成賢の記
〇六寶山の印、此
印は須彌山に坐し
不動の何れも坐し
請尊は、何れも坐し
以て本誓を淨潔す
此生即佛にして淨
提心堅固を示す。

と成る、智劍變じて不動明王と成る、左の手に四攝の寶索を執り、右の手に智惠の利
劍を執る火焰身に遍す、左に尸迦髮シキヤコツを垂れて忿怒の相を現はす、觀じ了つて〇劍印を
結び護身結界せよ。』如來拳印。七處。加持常の如し。〇大虚空藏〇小金剛輪〇送車輅ガウセウ。内縛

して、左右の五指を立て、鈎の身に向へて娑縛訶に隨つて之を招け。若しは大鈎。召を用ひ。

〇眞言 曩莫三曼多、縛曰羅救憾、噫醯エイイ引咽イキ、弱畔鑲斛 〇四明〇拍掌〇結界降三

〇虚空網〇火院〇大三昧耶〇闍伽〇花座眞言に曰く、歸命阿。口に曰私曰、八葉の印

を結び、二頭指を以つて二火指の背に付く。此れ六葉。明王は六葉の印なり。

次に〇普供養三力〇祈願〇禮佛 南無、阿利耶、阿遮羅曩陀、尾備耶囉惹返 縛

曰羅、蘇獎尼、縛曰羅、軍荼利 縛曰羅、焰曼德迦 縛曰羅、藥叉 〇十四

根本の印 △一には根本秘密の印朱獨 二羽内に相ひ又へて、輪輪各々環の如くせよ。

二空を水の測に住め、火の峯を空の面に住して、二風和合して立てよ。朱師説に「實運曰く、二空各

々水の甲を押す」云云師主、勝賢曰く、

右の空を以て左の虎口に入る、なり。〇眞言に曰く、曩莫薩縛、他他莫帝毗藥、薩縛

目契殖藥、薩縛怛羅吒、贊摩訶路灑拏、欠佉呬佉呬、薩縛尾觀南、畔怛羅吒、懷給。

△二には寶山の印 定惠内に相ひ又へて、二空を満月に入れよ。朱師説に曰く、二空並べ入る。

二、頭に置き、正しく安
 頭にあらす、此印
 八正道支な
 合せ中節を折り三
 角の形なり、是れ
 目怒相なり、三角
 は口密に二空並
 べて二中に附す
 二空は下唇なり、
 火風の端出し、二
 地の形如くして、
 牙の形正しく、二
 指するにあらず、
 只其の勢の如く
 印、加持四處の
 之を甲の印と
 いふ。惡又波、此
 は驚迅といふ。師
 子吼せん、此に
 時、身の髪を繕ふ
 如く、右の髪を開
 は、即ち驚迅の形
 全、火焔の印、右
 の空、地水火の
 の間、左の五、
 は、火の根を柱ふ。

眞言一字曩莫、三曼多、縛日羅赦、憾。△三には頭密の印(朱)私曰く、二拳右を仰け、二の金剛を以つて、定を惠拳の上に置き、印を以て頭に置き。眞言一字△四には眼密の印。二羽。内に相ひ又へて二空満月に入れ、風輪和合して立てよ、眼及び眉間を印すべし。(朱)先づ眞言一字△五には口密の印。地輪内に相ひ又へて、水を以つて地の又へたる間を押す、二火並べ申べて直くせよ、空各々水の甲に加し、二風を火の甲に加へよ、印を以つて口に置き。(朱)師主曰く、二火側めて跏ふるなり、印少しく開く、口の形なり。眞言一字△六には心密の印。二羽補吒して、風空、彈指の如くせよ。(朱)師説に曰く、二風甲を合す。眞言一字△七には密持四處の印。復次に三補吒して、二火建て、幢の如し、風を火の初節に住め、二水寶形の如くせよ、二地及び二空各各にして建立せよ、心及び兩の肩喉を印して、頂上に住めて散せよ。(朱)師主曰く、使者の法、並に底哩三昧耶經所説の甲の印は、二大二中二小各々面を合せて三股の形を爲す、仍て此印彼等の説に準じて二大二中二空各々立て合せて三股に作るべきか眞言一字△八には惡又波の印(押)御口に曰く、前印右の師子奮迅の印と名づく、前の密印を改めず、惠の風輪を開き立てよ。眞言一字△九には火焰の印。惠の手の空輪を以つて、地水火の甲に加して、風を豎て、定の掌に跏へよ、右に旋らして界方を成し、左に轉じて解散と名づく。眞言火界の呪△十には火焰輪止の印。

二、頭に置き、正しく安
 頭にあらす、此印
 八正道支な
 合せ中節を折り三
 角の形なり、是れ
 目怒相なり、三角
 は口密に二空並
 べて二中に附す
 二空は下唇なり、
 火風の端出し、二
 地の形如くして、
 牙の形正しく、二
 指するにあらず、
 只其の勢の如く
 印、加持四處の
 之を甲の印と
 いふ。惡又波、此
 は驚迅といふ。師
 子吼せん、此に
 時、身の髪を繕ふ
 如く、右の髪を開
 は、即ち驚迅の形
 全、火焔の印、右
 の空、地水火の
 の間、左の五、
 は、火の根を柱ふ。

定惠各々拳に作つて、空を火風の間に出だせ、二拳背けて相ひ合せよ、能く諸火を制止す。眞言一字△十一には商佉の印。定の空を地水に加せよ、惠の羽も亦此の如くす、二火申べて針の如くせよ、觀の風は火の節に付け、止の風は之を開き立てよ。(朱)師主曰く、地水の甲に加するなり。二火の頭相柱ふるなり。眞言一字△十二には渴議の印。止の空を以つて地水に加ふ、觀の風火輪を、定の空水地の環に入れて、輪の面を月と合せよ、即ち劍を定の鞘に住むべし、抽き出して諸事を辯せよ、斷結避護等なり。(朱)劍印常の如く、惠の劍を定の鞘に入れよ、即ち左の股の上に置き、眞言七返を誦して惠の劍を、定の鞘より抜き出して胸の左に當て、惠劍左に三度轉じて避除を爲し、右を三度轉じて結界を爲し、次に四方四角上下を指して結界す。東北の角より之を起首すべし、然して後に五處を印す。印了つて本の如く、左の股の上に於て劍を鞘に指すなり。又曰く、始め劍を鞘に入れ、左の股の上に置き、慈救呪七返之を誦して、其後劍を抽んで順逆旋轉四方四角上下、並に五處加持等。皆眞言慈救呪。曩莫三曼多、縛日羅拳、戰拳摩訶、嚕殺一字の呪を用ゆ。是れ師主の御傳なり。眞言慈救呪。曩莫三曼多、縛日羅拳、戰拳摩訶、嚕殺多、婆頗吒耶、吽怛囉吒、唵給。△十三には縞索の印。惠の空を以つて火水及び地等の三輪に加して、風を建て、定の月に入れ、止の地水火を以つて拳れ、空風跏へて環の如くせよ。(朱)師主曰く、火水地の甲に加するなり。眞言一字△十四には三股金剛の印。觀の空を以つて風の甲に加して、三輪を金剛の如くせよ、所有の諸の供具に、散灑して淨除を作せ、眞言

(一) 入定の印
陀定印なり。

(二) 覽字門
は赤色に觀す。覽字
母所生身の業聚不
淨無明淨善提心顯
現するなり。唯授一
人の大事、大聖眞
寶に傳へ、聖眞觀
賢深に傳へ、聖眞觀
憲深に傳へ、聖眞觀
徹して一切衆生を
業煩悩を斷ずる
是れ九徹の義なり
九の火炎ありは
れ三界九地の煩悩
を斷ずる義を表
す。
す。戸法髮は髮を
いふ。今髮の義
なり。擲髮の額の
相なり。

(三) 初後云云
に歸命を加へ、後
に婆娑賀を加ふ。

(四) 字輪觀
今は一字の字輪觀に
て是れ深秘なり、
印は法界定印な
り。

(五) 字義云云
無分別觀なり、我
上定觀を我心久
て定観に出づ。此
の印外五股の印
尊に配すれば二小
の風は南降三世
二大は西軍茶利、
左の頭は不動威徳
二配は不動威徳
觀心と當り隨方と
隨方の様なり。今

一字
の明

○入我我入觀 此觀文は般若寺僧止。入定の印を結んで「想へ、心に滿月輪有り、其の月輪の上に阿字有り、阿字本不生不可得なるが故に、滿月輪の自性も亦不可得なり、阿字と心滿月輪と、自性不可得なるが故に無二平等なり、心の下に覽字門あり、覽字門の下に滿字門有り、滿字變じて黒風輪と成りて、覽字門を吹いて三角火輪門を吹き起す、其の火輪右に轉じて無明業聚不淨の身を焼いて、刹那に灰燼と成り、白灰と成る、其の風輪吹き散じて唯心滿月輪のみ有り、其の上には字門有り、變じて不動尊の三昧耶身と成る、三昧耶身は謂く劔なり、若くは轉じて不動尊の身と成る、「想へ首に七髻有り、磐石の上に居して左の手には索を持ち、右の手には劔を執る等畢る。」九徹の義あり、尋ね ○次に定印を改めず、十九布字觀。曩莫、薩縛他他葉帝毗藥合、薩縛目契毗藥、薩縛他引、唵阿左羅贊拏、以上三、頂上に安じて頂相を成す之、企盈阿、頂上に安じて金戸法髮を成す、之を垂髮の眞言と名づく。憾長、額の上に安ずる、是を垂相の眞言と名づく。唵、兩の耳に布す金耳相の眞言。但羅長目、吒。左の眼中の義にして全からず、咩長、兩鼻に護。口に安ず、口と名づく。舌端に布す金剛舌相。舌の明なり。莽長。兩の肩に布す。肩。喉に布す。喉。兩の乳に安ず、心に安ず。憾。舌端に布す金剛舌相。舌の明なり。莽長。兩の肩に布す。肩。喉に布す。喉。兩の乳に安ず、心に安ず。

な。臍輪の中に布す、吒。臍の眞言なり。吒。臍の眞言なり。吒。臍の眞言なり。吒。臍の眞言なり。臍の眞言なり。

憾。臍の眞言と名づく。娑縛賀。依つて之を略して、初後にのみ之を加ふるなり。布字觀了つて劔印を結び、自身を加持す、一字の明。

○正念誦。本尊加持。先づ根本の印、火界呪。

○字輪觀。定印を結んで目を閉ぢ心を運んで觀念せよ。「心月輪の上に憾字有り、

是れ因業不可得の義なり、因業不可得なるが故に、果位も亦不可得なり、因果も亦不可得なるが故に、生死涅槃無別なり、生死涅槃無別なるが故に、本尊と自身と隔無し、

故に大自在力大堅固力有つて、悉く自他の怨敵魔縁を摧破して、大菩薩の直道を圓滿せしむ。」此觀に住し了つて、字義を失し、言亡慮絶して良久うして定を出でよ。

○本尊加持。先づ大日印明。次に根本の印、火界呪。次に、外五股の印、慈救呪。曩

莫三曼多、縛日羅赦、戰拏、北方金、摩訶囉左拏、東方、沙頗吒耶、南方、咩但羅吒、西方、

唵。中央不。次に劔印。次に三三昧耶攝召の印。底哩三昧耶經中卷に曰く

一切如來所生の印なり、金剛堅固にして内に相ひ又へて、檀惠堅て開く所生の印なり、

此印を名づけて功德の母と爲す、佛法僧法其中に住す、明王及び本尊を請召するに、

此の祕印を結べば皆雲集し給ふ、便ち此の印を廻して諸尊に獻すれば、即ち闍伽と成

(二) 大日を用ひ、今は胎
明王等は多く胎藏の
に説く故なり胎藏の
令輪なり胎藏の教
所用にあらすと雖
も立印軌に出る
故に茲に注するな
(三) 施殘食立印
軌に出せる故に此
に出す。

(四) 安鎮法 又は
鎮宅といふ、新宅
を作るに安穩の爲
に修す。

(五) 大忿怒の通
種子なり。

つて佛を供養す。文眞言慈救呪○佛眼印明 ○散念誦 佛眼。二大日。本尊。火界。慈救。
威德。金剛夜叉。 ○後供養 理供 ○後鈴 ○讚 ○普供養 ○三力 ○祈願 ○禮佛 ○廻向 ○至心廻向
大金剛輪。一字。 ○解界 ○發遣 ○三部 ○被甲 ○普禮 ○出堂 ○護摩在 ○三八千枚作法在 ○施殘食呪、
曩莫三曼多、縛曰羅引南、怛羅吒音、阿慕伽、替拏、摩訶路沙拏、沙頗引、吒也、咩
怛羅合摩也、怛羅摩也、咩怛羅合吒音、憾、唵。

○安鎮法 房中より佛前に至る作法常の如し。

○壇前普禮 ○著座普禮 ○塗香 ○三密 ○淨三業 ○三部 ○被甲 ○加持香水 ○加持供物 少三股の
印。枳里 ○覽字觀 ○觀佛 ○金剛起 ○普禮 ○表白 ○神分 ○祈願 ○五悔 ○發菩提 ○三昧耶
枳里呪。 ○勸請 大聖不動威怒王、十二大天諸眷屬。 ○發願 大聖明王、十二大天、

諸眷屬等。 ○五大願 ○普供養 ○三力 ○四無量觀 ○大金剛輪 ○地結 ○四方結 ○金剛眼 ○
召罪 ○摧罪 ○業障除 ○成菩提

○道場觀 「壇の上に阿字有り變じて寶樓閣と成る、寶幢幡蓋珠鬘瓔珞四面に懸列せ
り、其の中央に珠妙の壇場有り、其の上に瑟瑟の座あり、座の上に「ま字有り變じて

(一) 三股 之は十
二輻輪の箭先き三
貼なり之を鎮結
といふ鎮護結界の
義なり
(二) 四臂具足 天
等の惣主の時四
臂の不動を用ひ

輪 (一) 三股の と成る、變じて大聖不動明王と成る、身青黑色にして大忿怒の形なり、肥
滿端嚴にして口目皆張つて利牙上に出づ、(三) 四臂具足せり、左右の上の二手は金剛拳
にして、頭指小指、各々曲げて鉤の如くして口の兩角に安ず、其の相牙の如し、次の
右の手には劔を持し、左の手には索を持す、遍身に火焰を出し、威光熾然なり、次の
院に十二の荷葉座有り、其の上に皆咩字有り、變じて十二大天と成る、形色所持一
に皆具足せり、諸天各々無量の眷屬、前後に圍繞せり。七處加持
輪 ○送車輅 ○請車輅 ○召請大鈎 ○四明 ○拍掌 ○結界降三 ○虚空綱 ○火院 ○大三昧耶 ○
闍伽 ○花座 口に曰く明王は ○振鈴 ○理供 ○事供 ○讚 先づ四臂
次に不動 ○普供養 ○三力 ○祈願 ○禮佛
南無、阿利耶阿左羅、曩陀尾爾也、囉惹返。 縛曰羅、蘇婆尼 縛曰羅、軍荼利
縛曰羅、焰曼德迦 縛曰羅、藥叉 ○入我我入 ○本尊加持 先づ獨股の印火界呪。
次に劔印。慈救呪。

○正念誦 ○本尊加持二種 前の如し ○字輪觀 若くは五大 ○本尊加持 先づ大日印明次に
獨股の印。火界呪 ○同印

鎮宅呪 曩麼三曼修縛曰羅赦、戰荼摩訶路灑拏、乞叉拏、薩嚩哆、瑟他、波羅赦
縛曰羅婆縛、刺致他、縛駄、耶、縛曰羅佐昆南、沙頗吒耶咩怛羅吒、哈唵 ○劔の印

慈救呪 ○五股の印外 慈救呪 ○三三昧耶攝召の印、 慈救呪 ○佛眼印明